



荒野の花嫁

The Saddle Bride

テレサ・アン・ウッド 作

前橋梨乃 訳

Contents

(タップすると、章頭に移動します。)

(序)

第 1 章	第11章
第 2 章	第12章
第 3 章	第13章
第 4 章	第14章
第 5 章	第15章
第 6 章	第16章
第 7 章	第17章
第 8 章	第18章
第 9 章	第19章
第10章	エピローグ

This is a story based in the old west of the 1870's. I have tried to be historically accurate in many regards but have chosen to use modern references to feminine undergarments in some places simply for my own pleasure. I hope that you will forgive me for that one indulgence. The story is quite long but I originally wanted it to be much longer.

この物語は、1870年代の西部を舞台としています。時代考証はできるだけしたつもりですが、女性の下着に関しては、つい筆がすべり、近代的な表現が顔を出している部分があります。そのあたりは、作者の嗜好だと考え、どうかお目こぼしてください。

大変長い話になってしまいました。しかし、これでも、当初の構想より、かなり短くしたつもりです。

第1章

クローディアス・ホッパー —— 親しい人たちの呼び方に従えば“クロード” —— は、今日もとぼとぼ、砂ぼこり舞う道の真ん中を歩いていた。

町のメインストリートなのだから両側には板張りの歩道もあるのだが、そこを歩くと、建物の間の薄暗い路地に引きずり込まれそうで恐いのだ。

いや、冗談や比喻ではない。もしそこに、同年代の少年たちがたむろしていようものなら、この、見るからにひ弱で争いごとが苦手な少年は、たちまち彼らの餌食になるのだ。この前やられた顔のアザがやっと消えたばかりだというのに、またそんな目には遭いたくなかった。

そう、クロードはみじめな少年だ。

でもそれは、今に始まった話じゃない。生まれてこの方、人並みに男の子らしい……というか、子供らしい生活なんて送ったことがないのだ。

母の面影だけはかすかに覚えているものの、両親に関する記憶はほとんどない。

物心ついた頃には、父親のいとこだという男の家に行った。この男は酒ばかり飲んでいて、しかも、遠縁でしかないクロードを押しつけられたことを恨んでいた。だから、クロードは、6歳になるまで毎日のように殴られつづけた。

それが6歳で終わったのは、男が、なじみの酒場の裏で、自身のゲロをのどにつまらせ死んだからだ。

でも、それでクロードが救われたわけではない。

そのあと8年間は、孤児院での暮ら

しが待っていた。途中、10回ほど、里子に出される機会があったが、そのたびに、こんなひ弱な体では農場の仕事に役立たないという理由で戻された。

14歳になった時には、その孤児院からも放り出された。代わりに収容しなければならぬ幼い子供たちが、いくらでもいたからだ。

そのあと、あちこちをさまよったあげく、15歳になった頃、この、ユタはソルトフラッツの町(※)にたどり着き、餓死寸前で倒れているところを発見されたのだ。

(※訳注 ‘Salt Flats Utah’ 州都ソルトレイクシティをモデルとした架空の町だと思われる ただし、当時、開拓の遅れていたユタは正式に州とは認められておらず「准州」という位置づけ 人口も少ない荒れ地のつづく土地だった)

彼を見つけたのは、ビクトリア・ジ

ョンソンという女だった。

年はいっているが気っぷのいいこの売春婦と出会い、クロードはやっと救われた思いがした。

実際には40代らしいが、すっぴんだと60歳にも見えるその顔は、いくらメイクやウィッグやけばけばしい衣装でカモフラージュしていても、もう客は取れない。しかし、そのぶん、彼女は自ら売春宿を経営し、マダム「レディ・ビクトリア」として、若い女たちから上前をはねていた。

そんな女だが、死にかかっていたクロードには同情し、売春宿の裏の小部屋に住まわせてくれ、その上、宿の雑用仕事も与えてくれたのだ。

彼女がいろいろ気づかってくれたおかげで、三度の食事にも困らなくなり、これまで人からまともな愛情を受けたことのないクロードも、若い売春婦た

ちにかわいがられたりするようになった。

そんな売春宿での生活が、すでに6ヵ月つづいている。

毎朝、各部屋のたん壺をきれいにし、飲み残しのコップを洗い、ビクトリアの二日酔いの薬を用意する。そのあと、何枚ものよごれたシーツを洗濯する。

そんな毎日だったが、クロードはそれをいやだとは思わなかった。

これまで、まともに若者らしい生活など送ったことはなかったし、だいいち、浮浪者として逮捕される心配をせず、狭いとはいえ自分のベッドで寝られるだけでもありがたい。

「あんたを捨てる気になったのは、のたれ死にさせるには、かわいらしすぎたからだよ」

ビクトリアはそんなふうに言う。

同じ年頃の少年なら——いや、彼よ

り若い少年でも——、そんな言われ方をすれば腹を立てるだろう。でも、彼女に感謝しているクロードは、それをもうれしいと感じた。

体が小さいことは、べつにクロードの罪ではない。それを悔やんでもしかたない。

たしかに、やせ細った体や薄い肩は、同年代の男の子たちからいじめの対象にされつづけてきたし、ビクトリアでさえ「骨と皮だけ」などとかからかう。それにしても、この6ヵ月の規則正しい食生活で、多少はふっくらしてきているのだ。

幌馬車隊の後をついてユタに来るまでの間、切る機会もなかったせいで、伸び放題に伸びた灰色の髪は、今では、背中にまでかかっている。整ってやさしい感じの顔立ちと合わせれば、とても男の子らしいとは言えない。もっと

小さい頃は、「大きくなればごつくなる」とも言われたが、今のところ、そんな兆候もないようだ。

どのみち、これまでどこへ行っても女みたいだとからかわれつづけてきたのだ。このソルトフラッツで暮らすようになって、悪ガキ連中からのいじめが多少ひどくなったとしても、さほど気にはならなかった。それは要するに、これまででいちばん長く、この町にいるせいだろう。

それに、この町の少年たちからのいじめに耐えられる気がするのは、たぶん、ビクトリアから愛されていると感じられるからだ。

もちろん、ビクトリアが、本物の母のように接してくれるわけではないのだが、そもそも本物の母の愛を知らないクロードにとっては、それだけでも、じゅうぶんに幸せだと感じられた。

実際のところ、クロードは単に売春宿の小間使いにすぎない。

ビクトリアや店の女の子たちの風呂の世話をしたり、店に出るためのメイクや着替えの手伝いもさせられる。コルセットをしめてくれと言われたことも——それだけは、非力なクロードには苦手だったが——何度となくある。

そんなふうに、彼女たちの裸を見慣れてしまったせいで、もう、なにも感じなくなっていた。

ある女の子などは、日頃の「お礼」だと言って、二度ほど、客にするのと同じサービスをしてくれようとした。もちろん、その気持ちには感謝したが結果としては、恥ずかしい思いをしただけだった。

クロードにとって、売春婦たちは、興奮を呼ぶような存在ではなくなって

いるのだ。

でも、町できれいに着飾った女の子たちを見かけたりすると——話す機会すらないのに——その姿に心がときめく。だから、店の女の子に対して自分がなにも感じないことを、「奇妙」だとか「異常」だとは思ってはいなかった。

けっきょくのところで、彼女たちは、自分にとって仕事の対象でしかないのだ。それに、夜といわず昼といわず、男と女がセックスする現場を目の当たりにしていると、それにも慣れっこになってしまう。

まあ、女の子が、客のものを口でくわえるのを最初に見たときは、ちょっとおかしな気持ちになったけれど、それも、ここではまれなことでないのを知り、すぐに興味は薄れていった。

もちろん、クロードにも、関心を持ちつづけていることはある。それは「読む」ことだ。彼は、目にしたものは手当たり次第に読んだ。

本はもちろんだし、1872年のユタではまだ珍しかった新聞も、クロードを夢中にさせた。

まわりには字の読めない人も多かったし、彼自身、そんなに知識があるわけではないが、ありがたいことに、孤児院にいる時、基礎的な読み書きだけは習っていた。

計算など実用的なことはあまり得意ではないのに、なぜか、読んだものを吸収する力だけは人一倍あり、歴史などはもちろん、日常生活にはあまり関係のない法律などについても、一度読んだことは忘れなかった。

もちろん、今のところ、売春宿に居候する女々しい少年に過ぎない彼にと

って、それがなにかの役に立っているわけではないのだが。

ビクトリアの売春宿に戻る道をおどおど歩きながらも、今日のクロードは、気持ちが弾んでいた。近いうちに、新しく注文した本が3冊届くから、自分が読む前にそれを貸してくれると、さっき学校の先生が約束してくれたのだ。

そう、じつはこの秋から、クロードは町の学校に通っていた。クロードの様子を見たビクトリアが、町のお偉方に掛け合ってくれたおかげだった。

自分より小さい子たちばかりのクラスで学ぶのはちょっと恥ずかしかったけれど、学校は楽しい。行き帰りに、悪ガキ連中にからまれる危険は増したというものの、そんなことで、せっかく手にした勉強する機会を失いたくは

なかった。

9月下旬だというのにまだ暑く、日差しも強い帰り道には、人影もほとんどなかった。酒場の前につながれた何頭かの馬も、飼い主を待ちくたびれ、ぐったりしている。

と、そのそばにひとりの男が座っているのが見えた。みんなからは「ウイスキー・ジム」と呼ばれている年老いたカウボーイだ。

彼は、かつてロデオのスターだったらしいが、脚をケガし、息子夫婦を頼ってこのソルトフラッツに来たのだという。

息子の店の前には日差しを避ける軒もあるというのに、いかにも偏屈ものらしく、わざわざ炎天下に出て、かいは桶の縁に腰掛けていた。いくら馬用の水の中に足を突っ込んでいるとはいえ、そちらの方が涼しいとはとても思

えないのだが。

「よう、元気か、クロード」

こちらに気づいたウイスキー・ジムは、そう言いながら、かいば桶の水をちよつとすくって、かけてきた。その水は、やはり生ぬるかった。

それにしても、こうしてクロードにも声をかけてくるのは、ウイスキー・ジムが、人目を気にするような人間ではないからだ。

町の男たちは、売春宿に来たときだけは気さくに話しかけてくるのに、町なかで会うと、たいてい知らん顔をする。そんなところで働いている人間には面識がないといわんばかりに。ビクトリアに言わせれば「世の中なんて、そんなもの」らしい。

「こんにちは、ジムさん」

クロードは、ぼろぼろでだぶだぶの帽子をとって答えた。彼に敬意を払っ

たというより、帽子で蒸れた頭がかゆかったせいだ。もう、いい加減、髪を切った方がいいかもしれない。

「そうしてると、涼しいんですか？」

「いんや、ちっとも」

ウイスキー・ジムは笑いながら言った。

「じゃが、わしは、一度思いついたことはやり通す主義でな。それに、こうして足を濡らしたまま帰れば、エリーのやつが、床がよごれると、またキーキーわめくじゃろうて。このあたりは最近静かすぎるでな。その方が、近所の連中の刺激にもなるってもんじゃ」

クロードはそれに笑い返ししながら、前を通り過ぎた。

ジムと息子の嫁は、いつもケンカばかりしているが、本当はお互い、誰よりも気づかい合っている。そのことをちょっとからかってやりたいとも思っ

たが、そばの路地の暗闇で誰かが動いた気がして、先を急いだのだ。

ビクトリアの店までは、もう一筋だ。と、その時、一発の銃声が鳴り響いた。しかしクロードは、さほどそれに驚かなかった。

酔っぱらったカウボーイが、祭でもないのに祝砲をぶっ放すことはよくあるし、玄関先でガラガラヘビを見つけた住民が、拳銃で撃退をはかることも珍しくない。この町では、いわば日常茶飯事だ。そんなことで、いちいちおたおたしては身が持たない。

ヘビどころか、カルビン・ステンソンという老人が、自宅の壁に立ち小便していたインディアンを一発で撃ち殺したという話だってある。インディアンは、家の間の路地で息絶えたのだが、その時でさえ、町の人間は騒ぎ立てたりしなかった。

二発目の銃声が聞こえたときも、クロードは平然としていた。

しかし、何頭ものひずめの音が、町の通りを近づいてきたとなれば話は別だ。それは、年に一度か二度の大事件である。気づいた住人たちが、次々に窓や入口を閉ざした。

でも、元来がおっとりしているクロードは、反応が遅れた。

そして、6頭の馬が向こうの角を曲がって現れた時、彼はまだ、道の真ん中につっ立ったままだった。

第2章

すぐ近くで大きな銃声が響いた。とたん、走ってきた馬群から、一人の男がのけぞって落ち、路上に打ちつけられた。

と、今度はクロードの真後ろで銃声がし、その弾道音が耳もとをかすめた。

馬のスピードをゆるめた男たちがそれに応戦し、クロードの近くを、さらに数発の弾が飛んだ。それに対して、道沿いのホテルの屋根からも銃が撃たれ、次の瞬間には、周囲一帯、激しい撃ち合いが始まっていた。

気がつくと、クロードはその銃撃戦のまっただ中にいた。

恐ろしさに震える少年は、腰が抜けたように、へなへたとしゃがみ込んでいた。

「早く逃げろ、クロード！」

かいば桶の陰で小さくなっているウイスキー・ジムが叫んだ。

もちろん、クロードだってそうしたかった。でも、足がすくんで一步も動けないのだ。

もし立ち上がって走り出したら、そのとたん、弾丸が体を撃ち抜く気がした。

彼にてきたのは、撃ち合う双方の男たちに向かって、「やめてーッ！」と叫ぶことだけだった。

自分は、たまたま巻き込まれたただけだ。どちらにも恨みなどない。一瞬だけでいいから、撃ち合いをやめてくれれば、すぐ道の脇に引き下がるのに…

と、そんな彼の足もとに流れ弾が飛んだ。ほこりが大きく舞い上がり、クロードを包んだ。その恐怖が、クロードの自制心すら打ち砕いた。

次の瞬間、彼はわけのわからないことをわめきながら、馬上の男たちから逃げるように走り出していた。その先には一台の幌馬車があり、その陰から銃を撃つ保安官と助手の姿が見えたからだ。

クロードがすっかり動転しているのはたしかだった。逃げるなら、さっき考えたように、道の脇に向かう方が得策なのに、撃ち合う片方のグループからもう片方に向かって、まさに銃撃の中を走っていた。

その間、彼は、自分でも気づかないで叫びつづけていた。その声は、まるで女の子の悲鳴のように聞こえていた。

ちょっと走ったところで、後ろから服の襟首を捕まれた。

次の瞬間、体が宙に浮き、彼は馬上にいた。鞍の前の部分に、腹を下にし

て乗せられていたのだ。

「さかりのついた雌猫みたいに、ギャーギャーわめくんじゃねえ！」

ドスのきいた声があった。とたん、クロードの叫びがやんだ。

いや、その男の言葉に反応したというより、そりかえった鞍のへりにみぞおちが当たって息がつまり、実際に声が出せなくなったのだ。

銃声は、まだまわりを取りまいていたが、それが急速に少なくなったことで、最終的なターゲットが絞られてきたことがクロードにもわかった。

クロードは首をひねり、自分をつまみ上げた男の顔を見た。ちらりと見返してきた男のまなざしには、見たこともないような残忍さが込められていた。まさに無法者の目だ。

なにより、その目の恐ろしさに、クロードは気絶した。

……。

「全員、銃を捨てろ。さもないと、この女の命はないぞ！」

無法者が叫んだ。

道の中央にとまった彼の馬は、脚の筋肉を小刻みに震わせていた。どうやら、血の臭いに怯えているらしい。

周囲には、8人の男たちと3頭の馬が倒れていた。すでに死んでいるか、死にかかっているかのどちらかだ。

銀行強盗の一味6人のうち、生き残っているのは彼ひとりだけになっていた。

「女……だと？」

幌馬車の陰では、保安官が、首をかしげながらつぶやいていた。

幌馬車をうまく盾にしていたつもりだったが、助手のクレムの腿には弾が

当たり、負傷している。

「あれは、レディ・ビッキーの店にいる髪の中の長いぼうずだろ」

「あ、ああ、そうだと思う」

クレムは、痛みをこらえながら忌々しげに答えた。

彼は、六連発銃を道に置き、首のネックチーフをとって、それで傷を縛ろうとしていた。

「目がかすんで、はっきりとはわからんが……」

保安官は、幌馬車の陰から顔を出し、町の男たちの何人かが、あちこちから、その無法者に向けて銃をかまえているのを確認した。

「……上等だ！ やれるもんならやってみろ。銃声が聞こえたとたんにお前は蜂の巣だぞ」

彼が怒鳴ると、銃をかまえる男たちが笑い声を立てた。どうやら、誰も、

クロードが死ぬことに心を痛めている人間はいないようだ。

「いいんだな。このまま通さないと、俺は本気で女を撃つぞ」

無法者は、気を失っているクロードの頭に銃口をあて、もう一度叫び返した。周囲の男たちの笑いの意味を理解しなかったようだ。

彼は、自分が人質にとったのが、女だと信じていた。

着ている服はともかく、さっきの叫び声や走り方は、どう見ても女だ。

走り出した時、クロードがかぶっていただぶだぶの白い帽子も、興奮していた男の目には、女性のボンネットのように見えていた。そして、今やその帽子も落ち、目の前には長い髪だけが見えていた。

「べつに、俺たちはいっこうにかまわないぜ。その……女がどうなろうがな」

保安官は、笑いをこらえながら言った。

「さあ、銃を捨てて馬から下りろ。さもないと、こっちから撃つぞ。まあ、それも、どっちだってかまわんがな。お前にかかった懸賞金は、生け捕りすることが条件じゃないんだから」

緊迫した空気が耐えられないとでもいうように、乗っている馬がいなかった。それでも無法者は、銃をクロードの頭にあてていた。

勝ち目の少ない賭けだとは思ったが、生き残る手だては、もはやこれしか残っていなかった。

……それにしても、やつらは本当に、この女が犠牲になってもいいと思っているのか？

「いいか、これが最後の警告だ」

無法者は怒鳴り返していた。

「黙って俺を通さないかぎり、女は死ぬぞ。無事に町を出られたら、女は放してやる。少しでも俺を止めようとするれば、その時は女を撃つ。いいな」

そう言いながら、彼は、ゆっくりと馬を進め始めた。保安官の隠れる幌馬車のところまで行ければ、あとは全速力で駆け抜けられる。

町の男たちは銃をかまえたままだったが、引き金を引く者はいなかった。どうやら、保安官をさしおいて、懸賞金をひとりじめしようという人間はいないようだ。あとはやつに任せるということだろう。

「もう少し待った方がいい」

腿の痛みをこらえ、歯を食いしばりながらクレムが言った。

「やつはどのみち、ここを通らなきゃならないんだ。目の前まで来れば、あんたなら一発でしとめられるだろう。やつの銃は、こっちを向いてるわけじゃないしな」

「ああ、そうだな」

保安官もうなずいた。

「ここまで来たとたん、あいつはあの世行きってわけだ」

「そうは、させないよ」

すぐ近くで、不吉な声が出た。

しかし、保安官は、その声に振り向こうとはしなかった。自分の首筋にあてられているのが、ショットガンの銃口であることに気づいたからだ。

「……あ、あんた、いったい、なんのつもりだ」

そちらを見たクレムが驚きの声を上げた。しかし、出血をおさえてネッカチーフをしぼっているのです、それ以上、

どうすることもできない。

「あのお尋ね者を逃がそうっていうのか？ あいつは、マッド・マーク・マーフィーなんだぞ！」

「あたしゃ、お尋ね者なんて、どうだっていいのさ」

ビクトリアが言った。

「だけど、かわいいクロードにゃ、ケガさせたくないからね」

無法者は、幌馬車の脇を通り過ぎたところで、年のいった淫売女が保安官に銃を突きつけているのを見て、首をかしげた。

でも彼は、与えられたチャンスをみすみす逃すような男ではなかった。

テンガロンハットを持ち上げて挨拶を送ると、馬の腹に拍車をかけ、そのまま町を走り去った。

第3章

クロードが意識を取り戻したとき、馬はすでに何マイルも来ているようだった。

鞍のへりが激しくあたる腹のあたりが痛んだが、男に逆らうのは恐くて、クロードはびくびくしながら、体を少しだけずらした。

しかし、それもうまくいかなかったようだ。いきなり、大きな手が尻をひっぱたいた。

「じっとしてな、お嬢さん」

男の声が言った。そして、尻に置かれた手が、少しの間、そこをなでるように動いた。

「飛び降りたりしたら、すぐ撃ち殺すからな」

その言葉に、ふたたび気を失うほど震え上がったクロードは、「お嬢さん」

と呼ばれたことにも、男の手の奇妙な動きにも、気をとめる余裕はなかった。

ジーンズを履いた尻を平手で叩かれたのだから、そちらの方は、さほどの痛みはなかったが、でも、それが彼を緊張させた。

鞍のへりがあたる痛みには歯を食いしばって耐え、この痛みと恐怖が、早く終わってくれることだけを祈った。

その祈りが通じたのか、ほどなく、少なくとも痛みの方からだけは解放された。なんの前触れもなく馬が止まり、クロードは襟首をつかまれ、馬から下ろされていた。

地面にしりもちをつきながら見ると、そこは、断崖絶壁の峡谷の入口だった。近くには、朽ちかけた柵囲いがあり、その中に、鞍と手綱をつけ、すぐ走れるようになった馬が6頭いた。

ライフルをかつぎ、革袋をはずしながら馬を下りた男は、ここまで乗ってきた馬の尻を強く叩いた。と、馬は、そのままどこかへ駆け去った。

男は、震えているクロードを片腕に軽々と抱きかかえると、その柵のそばまで運び、そこに下ろした。

柵の入口を開けた男が口笛を吹くと、馬たちが寄ってきた。たぶん、エサをもらえるところなのだろう。

ところが男は、4頭の馬の手綱を手早くつかまえると、あとの2頭を峡谷へと追いやってしまった。

その間、彼は、ずっと今来た道の方に鋭い目を向けていた。追っ手がいないかどうか、警戒しているらしい。

言葉もなしに、ふたたびクロードの体を抱き上げた男は、一頭の馬の鞍の上に、投げ上げるようにして座らせた。

さらに、他の3頭の馬から手綱をは

ずし、その手綱でクロードの手足を鞍に縛りつけた。そして、その3頭も峡谷に向かって追い立てた。

鞍に縛られたクロードは、それからまる一日、そのままの姿勢で馬に揺られつづけた。

男は、ほとんど人が通った気配のない山中の小道を縫うように走った。時に、いきなり方向を変えたかと思うと、時には、馬を引いて、道を外れた岩場を何マイルも進んだ。

すでにクロードには、自分がどのあたりにいて、どちらに向かっているのか、さっぱりわからなくなっていた。そして、そんなことも考えられないほどのどが渴いていた。

男は、自分の水筒から、多少の水は飲ませてくれたが、照りつける太陽に、それだけではとても足りなかった。と

はいえ、男自身も、自分の命をつなぐ最小限のものしか飲んでいないように見えた。

途中二度ほど、やはり用意しておいたらしい馬に乗り替えるために止まった以外、男は夜も山中の道を走りつづけ、その間、どんな追っ手の気配をも見逃すまいと、警戒しつづけていた。

次の日、とっぷりと日が暮れたところで、男はやっと、休憩らしい休憩をとった。

冷たい泉のほとりに馬をとめた男は、クロードと、そして馬に、腹一杯水を飲ませ、水筒の中も水で満たした。

そこからさらに数マイル走ったところに、そびえ立つ岩があり、その裏側に、馬を隠すのにじゅうぶんなスペースがあった。男はそこで野宿の準備を始めた。

といっても、火をたくわけでもなく、食事は堅いビーフジャーキーだけだった。

食事を終わると、クロードはふたたび手と足を縛られ、ごつごつした岩場の上に横たえられた。

その隣に横になった男は、またたく間にいびきをかき始めていた。

もちろんそこで、クロードは逃げようと試みたが、手足を束縛した革ベルトと闘っているうちに、この間の疲れが襲い、自らも眠りに落ちていた。

そんな旅が、1週間つづいた。

クロードには、追っ手などもう来るわけがないと思えたが、それでも男は警戒を解かなかった。

その間、唯一変わったことといたら、朽ちかけた牧場に立ち寄ったことだ。男はそこで、馬を交換する約束を

していたようだ。しかし、牧場主は夜逃げでもしたらしく、男は不機嫌そうに出てきた。

他には、二度ほど高い山の上に登った。おそらく追っ手を確かめるためだろう。クロードが見る限り、荒野には、人影すらなかった。

やがて流れの速い川べりに出て、そこに泊めてあったいかだで川を渡った。その時点まで、男は警戒の姿勢を崩さなかったが、対岸に渡りきったところで、いくぶんか緊張を解いたように見えた。そして、これまでのように短い命令だけではなく、クロードにあれこれ話しかけてくるようになった。

その夜、コットンウッド(※)の木陰で野宿した際には、会話も交わした。といっても、話したのは男の方だけで、まだ恐怖に震えているクロードはうなずくのがやっとだった。

(※訳注 ‘cottonwoods’ 西部の荒野に生えるポプラ種の総称)

「どうやら、やつらは俺たちを見失ったようだな」

男は、にやりとしながら言った。もちろんそれは、クロードが初めて見る彼の笑顔だった。

「わざわざ山に入って、追っ手をまいたのがうまくいったぜ。もしまっすぐ来ていたら、川を渡る前に必ずどっかでとっつかまったはずだ。川で待ち伏せされるかとも思ったが、そこまで頭のまわるやつもいなかったようだ」

寝る時間が来ると、男はいつものように、クロードの手足を縛る手綱を持ち出した。クロードの方も、もうそれに慣れてしまっていたので、素直に手首を差し出した。

縛り終わったところで、いつもとはちがうことが起こった。男が、クロー

ドの顔をまじまじと見つめてきたのだ。

「お嬢さん、俺が今、なにを考えてるかわかるか？　ほんとは、逃げ切ったことがわかった時点で、あんたを始末しようと思ってたんだ。だが、考えが変わったぜ。……ふふ、あんた、今年の冬の計画は、まだ立ててないんだろ」

男は、自分の言った冗談がさもおかしいとでもいうように、膝を叩いて笑った。

クロードにも男の言葉の意味がなんとなくわかり、驚いて見返していた。

と、男は、これまで自分だけで使っていた毛布を地面の上に敷いて、そこにクロードを寝かせた。

えもいわれぬ不安を感じたクロードは、男に背を向ける形で、横向きに転がった。

すると男は、クロードに身を寄せる

ように自らも横になり、掛け毛布でふたりぶんの体を包んだ。そして、なんと、クロードの尻をなでてきた。

「お嬢さん、この冬は、あんたにいい思いをさせてやるぜ。楽しみにしてな」

尻をなでていた手がクロードの細いウエストにまわされ、ごつごつした腕に引き寄せられた。

そこで男は、すぐに寝息を立て始めたが、クロードは、自分の尻あたりに何か堅いものが押しつけられているのを感じた。

……勃起！

屈辱感を感じたクロードは、あわてて体を離そうとしたが、逆に男の腕がきつく抱きしめてきた。

ジーンズの厚い生地越しにも、男のものがさらに大きくなったのがわかった。そして、時折、クロードの体にそれをこすりつけるように男の腰が前後

した。男がその手の夢を見ているのはまちがいでなかった。

たぶん、かつてどこかの町で抱いた売春婦のことでも思い出しているのだろう。でも、その固まりが侵入しようとしているのは、クロードの尻なのだ。

クロードはそれに緊張しつづけ、その夜は、ほとんど寝つけなかった。

翌朝、まだ日が昇る前に男は起き出し、クロードをまた馬に乗せた。クロードは、むしろそれにほっとした。同じように尻を打つにしても、鞍の革の堅さの方が、男のコックよりずっと落ち着いていられる。

もう追っ手はいないと言ったにもかかわらず、男はその日も速いペースで走り、何度か馬を乗り替えた。そして、暗くなると、高くはないが岩がごつごつした山中に身を隠した。

この夜も前夜同様、クロードは、夢見る無法者のペニスから逃れるため、みじめな努力を重ねることになった。

次の日も、朝早く出発した。この日、男の緊張は、前にも増して和らいできたように見えた。

目の前にはまだ荒れた土地がつづいていたが、進むにしたがい、草や木の緑が増えていった。北西の山からさわやかな微風が吹き下ろし、空気も澄んできた。

そしてこの日は、拉致されて初めて、明るいうちに休憩をとった。

いつもそうしているように、クロードは、用を足すため、長いロープをつけられた。

いつもは夜だからいいものの、これだけ明るい用を足すところが丸見えだ。逃げることはできないにしても、

どこかに隠れたかった。

「そのうち、すべて見られるんだ。恥ずかしがることなんてないだろう」

クロードの腰にロープを結びながら、男はにやにや笑った。

クロードはそこで、自分は女ではないと言おうかと思った。しかし、けっきょくはなにも言えなかった。もしそれを知ったら、そのとたん、男が自分を殺すかもしれないと感じたからだ。

男の言葉にただ顔を赤らめたクロードは、ロープの許す範囲いっぱいまで行き、そこにあった大きな岩陰に隠れて用を足した。

それを終えて戻ってくると、男は、アスペン(※)の木陰で大の字になって寝ていた。

(※訳注 荒野に生えるポプラの一種)

「今日は、あんたの手料理が食べたいぜ」

やはりにやにや笑いながら身を起こした男は、ビーフジャーキーの入った革袋を投げてよこした。

「きっと、料理もうまいんだろ」

クロードは、その言葉に従順にしたがい、革袋の中からジャーキーを取り出すと、2人分を切り分け、大きい方を男に渡した。

そして、男から離れられるだけ離れた位置に座り、自分の分を食べ始めた。いつもながら、その肉は堅く、呑み込めるようになるまでにはずいぶん噛まなければならなかった。

こんなふうに、毎日をびくびくしながら送っていると、ある意味、おびえることにも慣れてしまう。ところがそこで、クロードは、これまでとはちがう奇妙なおびえを覚えた。

こちらを見る男の目つきがおかしいのだ。

無法者は、ジャーキーをほおぼる「彼女」の口もとに魅入られていた。女らしく、肉片を小さく引きちぎり、それを噛むたび、かわいい唇がやわらかに動く。

目的の銀行強盗はけっして計画どおりいったとは言えないが、自分だけは、なんとか逃げおおせた。それは、今となっては喜ぶべきことだろう。

法の網から逃れ、その上、戦利品を独り占めできるのだ。金も、そして、この思わぬ果実も。

魅惑的に動く若い女の唇を見ているうちに、たまらなくなってきた無法者の頭の中には、ある考えが浮かんでいた。

「お嬢さん、もっどこっちへ来いよ」

男が言った。その声音は、これまでになくやさしいものだった。

クロードはそれに、逆に恐れを感じた。

もしかしたら、今ここで、殺そうと思っているのではないか？

そんなおびえが、また、クロードの動きを女らしいものにしてしまっていた。びくりと膝立ちしたクロードは、男に言われたとおり恐る恐る近づき、対座するように腰を落とした。

と、なんの前置きもなしに、男はベルトのバックルをゆるめ始めた。さらにジーンズの前を開け、それを尻のあたりまでずり下げた。

その下から、男のコックが顔を出した。それはまだ立ち上がってはおらず、左腿あたりに身を横たえていたが、それでも、クロードのものが勃起した時よりごつかった。

驚いたクロードは、それを、まるでこちらに襲いかかろうとするヘビのよ

うに感じ、おびえた目で見ていた。

もちろん、売春宿にいたのだから、これまで何度も、他の男のものを目にする機会があった。でも、今、目の前にあるものは——まだ勃起してないというのに——そのどれよりも大きい気がした。

男が自分になにをさせたいのか、なんとなくわかったが、だからこそクロードは、言葉もなくそれを見つめていた。

「お嬢さん、これがなんだか知ってるよな？」

男の言葉に、クロードはうなずいていた。

「なにに使うものかも、わかるよな？」

クロードはまたうなずいた。もちろん、自分にもついているのだから、それはわかっていた。

「そりゃ、話が早いぜ。あんたみたい

なお嬢さんにゃあ、そこから説明しなきゃならないかと思ってた。ふふ……。じゃあな、男はときどき、これを、女の口で使うこともあるってのは、聞いたことがあるか？」

そんな言葉とともに、男のものが首をもたげてくるのを見て、クロードは身震いした。

自分は、女などではない。男だ。

この男は、本当にそれに気づいてないのだろうか？ 「お嬢さん」などと呼んでいるのは、こちらをからかい、いたぶるためかもしれないと思っていたのだけれど……。

これまで、男どうしでそんなことをするという話を聞いたことがないわけじゃない。たとえば、長い航海で船員どうしがそんな関係になるとか……。

もしかして、この男は、そんな男どうしの関係の方が好きということだろ

うか？

「わかるな、お嬢さん。つまり、俺があんたにしてほしいのは、そういうことなのさ」

そこから目を離れたクロードは、勇気を振り絞って男の目を見返した。初めて男の顔を凝視しながら、彼は、自分が女の子ではなく少年、それも大人の男になりかかっている存在なのだというをはっきり言おうと思った。

驚き、おびえている少女のまなざしに、無法者は、自分のコックがさらに立ち上がってくるのを感じ、笑い返した。

「ほら、見てみろよ。こうなったのは、あんたのせいなんだぜ。これをもとに戻せるのは、あんたしかいないんだ。見渡すかぎり、あんた以外、女はいないしな。ここまで、俺はあんたに食い

物を食わせ、馬に乗せてやって、寝る時には寒くないように気を使ってやった。そのお返しくらいしてもいいはずだぜ。というか、俺をいい気持ちにしてくれないんなら、俺はあんたを撃つしかないな。いくら俺が人がいいと言ったって、これ以上、無駄飯を食わせるわけにゃいかんしな！」

顔じゅうに下卑た笑いを浮かべて、彼は言った。

この男のものをくわえなければ、殺される……！

クロードは、気が遠くなりそうだった。

そんなことは、したくない。そんなことは、死んだっていやだ……でも、死ぬのも同じくらいいやだ。

クロードは、男に許しを乞おうと、初めて口を開いた。しかし、そこから

出てきたのは、弱々しい言葉でしかなかった。

「そ、そんなこと……。……。でき
ません」

「ふふ、心配しなくたっていいさ。へ
たなのはわかってるんだから」

無法者は膝立ちし、ジーンズをさら
に下ろしながら言った。

「経験ないだろうから、どうしたら
いいか、ちゃんと教えてやるよ」

そこまで言ったところで語調を変え
た。

「お嬢さん、あんたはやるしかない
だよ」

そして、腰につけたままのホルスタ
ーに手を掛けながらつづけた。

「しなきゃ、死ぬことになるんだ
からな。さあ、どっちにするか決めろよ」

そこで、ふたたび腰を落とし、馬か

らはずして置いてあった鞍を枕に寝ころんだ。

無法者には、少女が死を選ばないのはわかっていた。

クロードは、動揺しながらも、ジーンズの向こうで首をもたげて揺れ始めたものに目を戻していた。

そして、おずおずと手を伸ばし、その肉厚の獣をつかんだ。握ると、その先がぐっと大きくなり、自分の方に向かって襲いかかるように見えた。

男は、その感触にかすかな声を上げ、クロードの次の動きを待っている。

クロードの手のひらに感じるコックが、またたく間に太さと堅さを増した。

男は少し体を震わせ、たまった欲望が解放される瞬間を期待しているようだ。それに対し、クロードの方は、ビクトリアの売春宿にいた女たちのこと

を思い出していた。

「いいか、お嬢さん、歯を立てるんじゃないぞ」

無法者は、おどおどととまどっている少女を見て、目を揺らしながら言った。

「歯じゃなく、そのかわいい唇や舌で奉仕するんだ」

言われるまでもなく、クロードはそれを知っていた。ビクトリアの店の女の子たちが話しているのを耳にしていたからだ。

歯をあてたりせず、手をうまく使えば「早くかたづく」と。

「あれの先には舌をあてておけばいいの。その代わりに、手でぎゅっと握るのよ」

サリーという名の売春婦は、新米の

女の子にそう教えていた。

「先っぽをなめながら、握った手を一生懸命動かすの。そうすれば、深くくわえなくても、すぐイクわ」

まだおどおどとしながらも、クロードは、それをしごくように手を動かし、その先に顔を近づけていった。

うまくいけば、手だけで終われるかもしれない。そうすれば、口をつけなくてもすむ。

クロードは、そんな淡い期待を抱きつつ、必死で手を動かした。

やはり、どう考えてもくわえるのはいやだった。

「そんな強く握るな」

男が言った。

「女のくせに、なんて力だ。しごくのはいいが、もっとやさしくやれよ。ゆっくりと上下に動かせ……そう……ああ、いいぞ。そんな感じだ……ううっ」

男は、かすかにうめき声を上げた。
「手はもういい。そんなに必死にならなくてもいいさ。それより、早くしゃぶってくれ」

思惑を見透かされた以上、その言葉にしたがわざるを得なかった。

おずおずとその先に舌をつけると、最初は汗くさい匂いしか感じなかった。

その表面に舌を這わせていると、それがぐいっと大きくなったのがわかった。そして、亀頭の先をなめると、これまでとちがった味がした。

塩辛いその味に、最初の液が漏れ始めたことが、クロードにもわかった。

でも、クロードは、機械的に舌や手を動かすことに専念し、その意味を考えないようにした。

彼はただ、舌を使ってその先をなめつつ、ときどき手を変えながら根本

をしごきつづけていた。

その怪物は、どうやら最大限に怒張してきたようだ。男の息づかいも荒くなりはじめている。

クロードは、今度は、くわえる前に絶頂を迎えさせるつもりでいた。それを口の中に受けるのだけはいやだと思ったのだ。

しかし、その考えを打ち砕くように、男はまた命令してきた。

「さあ、お嬢さん、くわえてくれ。俺の男の味を思う存分味わうんだ。この、マッド・マーク・マーフィーの味をな」

初めて男の口から出たその名に、クロードは死ぬほど震え上がった。

今、目の前にいるこの男は、西部全体に名をとどろかせるお尋ね者だった。

それにおびえ、思わずその先に唇を

つけたところで、クロードはそのこと自体をも忘れるほど屈辱感を感じた。これから自分は、他の男のものをくわえるのだ。

泣きそうになりながら目を閉じ、ゆっくりと、それを口に含んでいった。

そのためには、大きく口を開かなければならなかった。クロードは、口に入れるのは亀頭だけにとどめようと思っていたのだが、そう思うまでもなく、クロードの小さな口はそこでいっぱいになった。そして、それがさらに張りつめてきたことで、思わず唇に力が入った。

男は、その刺激に声を上げた。それは、自分の堅いコックで、少女の口を支配した悦びに満ちていた。

「ああ、その唇……いい感触だ。かわいい唇だとは思ったが、そこまでいいとは思わなかったぜ」

クロードは、その亀頭を包むように舌をあて、手では、あいかわらずその根本をしごいていた。

と、男は舌を動かすように言い、次には、それを吸うようにしろと言った。いやいやながら、クロードは従った。男は、クロードが吸うのに合わせて、腰を動かし始めていた。

そのひと突きごとに、男のものがさらに奥深く侵入してくるのを感じた。そして、ついには、その長いシャフトの相当部分が口の中に入っていた。

「ああ……いいぞ、お嬢さん。なかなか覚えが早い……あっ、ああ。うまいぞ。ウツっ……イ、イク……あーー」

荒野に、男の声が響いた。

その声につづき、口の中に大量のねばねばした液体が噴出されるのを感じた。

クロードは、頭を上げて、その銃口

から発射されるものを、せめて口の中だけにとどめようとした。しかし、男のぶ厚い手が、クロードの後頭部を押さえこみ、逆に、それをのどの奥に向かって突きつけた。

その爆発力に耐えきれず、クロードはそれを呑み込んでいた。息がつまり吐き気に襲われたが、ぴくぴく動きつづけるそのシャフトから逃げることを、男は許してくれなかった。

すべてが終わり、満足したらしい男は、やわらかくなったものをクロードの口から引き抜くと、未だ吐き気がつづく彼の手足を縛った。

そして、そのオルガスムスの数分後には、クロードの体を抱きながら、毛布にくるまっていた。

隣でいびきをかきながら寝てしまった男の、精液の味がこみ上げてくるの

を感じ、クロードはひとり涙した。

第4章

その後も同じような旅の日々がつづいた。クロードは、毎日、夜が来るのが恐かった。

とはいえ、男は、毎晩それを要求してきたわけでもなく、気が向いた時だけコックを引っ張り出し、クロードにくわえさせた。そして、そのたびにクロードのテクニックが上達していくことに満足しているようだった。

そんなふうに3週間も旅がつづくうち、クロード自身も、当初の嫌悪感が薄れていった。というか、それにさえ応じていれば、男がセックスまで要求してこないことに、内心ほっとしていた。

もし、そんなことになれば、クロードが女ではないことは、さすがにばれるだろう。

男は未だ、クロードのことを女だと信じきっているようだ。おまけに、2週目を過ぎた頃から、クロードに対する接し方が目に見えてやさしくなってきた。クロードのことをあれこれ気づかってくれ、自分のことを「マーク」と呼べとまで言った。

クロードの方は、あいかわらず「お嬢さん」と呼ばれていたが、もちろん、本名を知らせるわけにはいかなかった。

クロードは今、前以上に正体を知られるのを恐れていた。

もし、自分のコックを吸っていたのが男だと知ったなら、無法者、マーク・マーフィーがどれだけ逆上するか…？

たぶんクロードは、その場で撃ち殺されるだろう。

旅のルートは、けっして直線的なものではなかった。でも、全体として西に向かっているらしいことは、クロードにもわかった。前方に高い山並みが近づいてきているのだ。

たぶん、あの山脈のどこかに、隠れ家でもあるのだろう。まっすぐそこに向かわないのは、その場所を知られるのを警戒しているからにちがいがなかった。

それはまた、町を避けているからでもあるらしい。町には入らず、町と町の間にある分かれ道を縫うように進んでいくのだ。

途中二度ほど、馬を交換するために小さな牧場に立ち寄った。そんな時、クロードは、猿ぐつわを噛まされ、近くの物陰に隠された。どうやら牧場主とは前もって話がつけてあるらしく、マークはすぐに戻ってきて、クロード

がそのまま放っておかれるようなことはなかった。

道はついに山脈内に達し、名前も知らない山を越え、峠を下っているとき、雪がちらつき始めた。そして、その雪の向こうに見えてきたのは、高い尾根に囲まれた谷間の小さな盆地だった。

高地らしく、夏草はすでにほとんどが枯れていたが、その丈は膝ほどもある。せせらぎが流れるその盆地が、肥沃な土地であることがわかった。

冬を前に、何頭かの馬や牛たちが一心にその草をはんでいる。

盆地の中央にちょっとした高台があり、そこに、1軒だけ大きな家が建っていた。クロードにとっては、カンザスシティにいたとき以来、絶えて見ていなかった大きな家だ。

2階建てらしく、丈夫そうな板でふ

いた屋根も大きい。窓にも見たこともないほど大きなガラスがはめ込まれている。とはいえ、壁は漆喰でしっかりと塗り固められ、屋根の傾斜が大きいことから、冬は雪が深いことがうかがわれた。

この家を造った人は、そういうな努力を払ったにちがいない。こんな人里離れた場所にこれだけの家を建てるのは、並大抵のことではないはずだ。

マークはこれまでとちがい、なんの警戒もない様子でその家へと近づいていた。

クロードを乗せた馬を引きながら、その家まで100ヤードくらいの地点に達したところで、マークは、路傍にすえられた数個の墓石らしきものを指さした。

「あの家を建てたのは、やつらさ。一家全員が、三年前に死んだ。いや、俺

が殺したんじゃない。コレラだ。全員が息絶えているのを見つけた俺が、土に埋めて墓をつくってやったんだ。その礼として、ここをいただいたってわけだ。今のところ、遺産を相続したというやつも現れないしな」

マークは、そう言って笑った。

「さあ、俺の冬の間の隠れ家だ。雪が積もれば、誰も近づけない。あんたが逃げたとしても、逃げ切ることはできないだろうよ」

それに対し、クロードはなにも言わなかった。これまでもめったに口をきかなかったし、マークも返事を求めて言ったわけではないだろう。

コレラに感染した家に入ることにはちょっとおびえたが、マークが平然とした顔をしているのを見て、クロードは気にしないことにした。

というより、むしろ、コレラにでも

感染した方がましだと感じていた。それで死んでしまえば、もう、この男のcockをしゃぶらされることもないだろう。

家の前まで来ると、片腕のないメキシコ人らしい大男が迎えに出ていた。マークは、その男に向かって「パコ！」と呼びかけた。それが、男の名前らしい。お互いが交わし合った視線から、マークとパコが長年の仲間であることも見てとれた。

家の裏に、離れのような小さな建物が見えていたから、おそらくパコはそちらに住んで、マークが留守にしている間、この家を守っているにちがいない。

ふたりが交わした会話はスペイン語だったので、クロードには、なにを言っているのかよくわからなかった。ただ、パコが、値踏みするような視線を

向けてきたことで、自分が話題にのぼっていることだけは見当がついた。

中に入ると、マークは家中の窓を開け、閉めきりだった各部屋の空気を入れ換えた。

その間、パコはバケツに井戸水を汲んで運んでいた。

いつの間に現れたのか、インディアンの女がひとり、パコの指示に従ってその水を大きな真ちゅう製やかんに入れて火に掛け、沸かし始めた。それが沸くと、パコは、今度は二階にある部屋のひとつに運び込んだ。

そんな作業が何度か繰り返されたところで、マークは、その部屋にクロードを連れて行った。部屋の片隅にあるバスタブが湯で満たされていた。

マークは、クロードに入浴するように言い、さらにこうつけ加えた。

「せいぜい、おめかししてくれ。今夜は、俺とあんたの祝いの式なんだからな」

そして、案内するとでもいうように、部屋の中を歩いた。

そこには、4本の柱で支えた天蓋つきベッドがあり、その向こうには、ワードローブが4つも並んでいた。マークがその扉を開けると、中には女性用のドレスなどがずらりと吊されていた。それとは別に杉材で作られた2つのチェストもあり、引き出しの中には、女性下着やリボンなどがぎっしりつまっていた。

「ここに住んでいた夫婦の子供は、娘ばかりだった。年頃はあんたと同じくらいだったから、ちょうどいいだろう。どれでも、似合いそうなものを選んで着てくれ。……ふふ、俺のためにな」

最後の言葉をウインクして言うと、

マークは部屋を出て行った。ドアの鍵をかける音が、クロードに逃げ出すチャンスがないことを告げた。

ソルトフラッツの町を出て以来、初めてひとりきりになり、クロードはさめざめと泣いた。その涙はいつ果てるかと思えたが、けっきょく、しばらくしたところで、クロードは、着ているものを脱ぎ始めていた。1ヵ月にもおよぶ荒野の旅でよごれきった体を、洗いたかったのだ。

温かいお湯に体を沈めると、ゆったりした気分になれた。さらに石けんの香りが、気持ちを解きほぐしてくれた。タオルでごしごし洗ったことで、肌もさっぱりした。

と、そこへ、先刻のインディアンの女が入ってきた。彼女は、クロードが脱いだ服をまとめると、どこか悲しげなほほ笑みを向け、そのままにも言

わずに出て行った。

おそらくこれから、とんでもないことが待ちかまえているにちがいないというのに、入浴は、クロードをますます心地よくさせていった。ことに、髪を洗えたことで、そんな気分は増した。洗い終わったお湯は、黒く濁っていた。

体を流し、インディアンの女が置いていった厚手のタオルでふきながら、クロードは、身につけるものを探した。

他に着るものもない以上、ここにあるものの中から見つけるしかないだろう。

第5章

そのチェストをひっかき回しながら、クロードは、思わずため息をついていた。

できるだけ女っぽくないものを探そうと思っているのに、どこを見ても、そんなものはないのだ。

長らく売春宿で暮らしていたのだから、女性の下着などは見慣れているつもりだった。それでも、そこにあるものは、クロードを驚かせた。どの引き出しのものを引っ張り出してみても、見たことのないような上等なものばかり。多くは日常着らしいのだが、それすら弾力ある生成のウール製だ。絹など高級な生地の下着もたくさんあった。そこまではまだクロードにもわかったが、中には、絹以上にすべすべの名前も知らない生地もあった。

この家を建てた家族は、よほど裕福だったにちがいない。それなのに、こんな人里離れた場所に牧場をつくるなんて、そうとうな変わり者だったのだろう。

さまざまな色のパンティの中から、なんとか、白無地のものを見つけ出した。やはり絹製ではある。履いてみると、肌触りはたしかに心地よかった。

ジーンズの一着もないかと、ワードローブの中を隅から隅まで探してみたが、そんなものは見あたらなかった。ズボンの類はいっさいなく、ドレスのようなものばかりだ。

途方に暮れたすえ、また涙がこぼれだし、クロードは大きなベッドに身を投げ出して枕に顔を埋めた。

クロードはしばらくそのまま泣いていた。長旅の疲れもあり、もし、ドア

の鍵が開く音がしなければ、そのまま寝入ってしまったかもしれない。

つづけて聞こえたドアが開く音に、彼は逃げ出したいと感じたが、それでも、そのままベッドの上につぶしていた。ベッドを下り、木張りの床を走ってドアに突進することもできたはずだ。少なくとも、その足音から、入ってきたのがマークやパコでないのもわかっていた。彼らのウエスタンブーツなら、もっとごつい足音がするだろう。

それでも、さまざまな気疲れと絶望感から、彼は動けなくなっていた。

と、やさしい感触の手が裸の背中に置かれ、どうやら慰めの言葉らしいスペイン語が聞こえた。

「……スペイン語じゃあ、わからないよ」

クロードは、少しだけ首をもたげ、すすり泣きながらつぶやいた。

それでもしばらく、女はスペイン語で語りかけていたが、やがて、それならという感じで、別の言語に変わった。

もう少し顔をもたげて、彼女の顔を見ながら、クロードは首を振った。

「その言葉は、もっとわからない。英語は、話せない？」

すると、今度は女の方が首を振った。

「エーゴ、ノー」

そう言いながら、ベッドのへりに腰掛けた女は、クロードの顔にかかった長い髪をやさしくかき上げ、見つめてきた。驚いたことに、彼女の目にも涙がたまっている。クロードに同情し、哀れんでくれていることはまちがいはなかった。

その顔を見ていて、クロードの瞳からさらに涙があふれてきた。女は、そんなクロードに顔を寄せ、自らも泣いた。

まだベッドにうつぶしたままのクロードを、女は抱くようにしてくれた。クロードの方も、そんな女の手を握っていた。

やがて、クロードが泣きやんだところで、女は、スカートのしわを伸ばしながら立ち上がった。そしてまた、クロードにはよくわからないなまりの強そうなスペイン語でなにか言った。

クロードが首をかしげるのを見て、女は、暖炉のそばに行き、そこにのせてあった小さなはさみを取り上げた。そして、自分の髪をつかむと、パントマイムでそれを切る仕草をしてみせた。

どうやら、クロードの髪を切ろうということらしい。

クロードは、ベッドから身を起こし、うなずいた。

たしかにそれは、いい考えだと思え

た。髪を短くすれば、マークだって、さすがにクロードの正体に気づくだろう。そのあとどうなるかはべつにして、女の子として扱うのはやめるにちがいない。

そう思い、クロードがベッドから立ち上がると、女が声を上げた。

「マドレ・デ・ディオス！」(※)

彼女は、口を押さえ、うめくように言った。

(※訳注 ‘Madre de Dios!’ スペイン語圏の驚嘆の言葉 英語に直訳すれば ‘Mother of God!’ ……というか、英語圏なら ‘Oh My God!’ だろう)

クロードには、彼女の目の動きから、その驚きが理解できた。どうやら、彼女もまた、今まで誤解していたようだ。

ぺちゃんこの胸だけなら、発育の遅い女の子とも思ったのだろうが、パンティの前に小さいとはいえおかしな出っ張りがあるのを見て、初めてクロー

ドの性に疑問を持ったらしい。

と、つかつかと歩み寄った彼女は、クロードが押さえるより早く手を伸ばし、パンティのへりをつかんだ。そして、そこを引っ張ると、中をのぞき込んだ。彼女はしばらく、縮こまったペニスを見ていたが、そのあと、あ然としているクロードの顔に目を移した。

その目に涙がたまっているにもかかわらず、彼女はふたたび目を落とし、なんと、パンティの中に手を突っ込んできた。二本の指でその小さなペニスをつまむと、まるで、そこにあっちはいけないとでもいうように、下向きに股の間に押しやり、パンティを引き上げた。

そこまでして、やっと落ち着いたらしい彼女は、もう一度クロードの姿を見た。

「マドレ・デ・ディオス」

彼女はまたそうつぶやいたあと、スペイン語で何かきいてきた。

クロードには、肩をすくめるしかなかった。

と、彼女はこめかみのあたりを指で軽く叩きながら、何かを思い出すとでもいう表情をした。

そして、思いついたように、クロードの顔に手を当てながらきいた。

「ウインクテ？」

スペイン語ともちがうらしいその言葉に、クロードはまた首をかしげた。

彼女はもう一度考えるようにしたあと、今度は別のことを口にした。

「マーク……みた？」

片言の英語で、どうやら、マークに見られたかどうかをきいたようだ。

「ノー」

クロードは首を振った。そして、ベッドの上に座り込んだ。

「マークは、知らない。もし知られたら、僕は、殺される」

ひと言ずつ区切って言い、指で拳銃の形をつくり、自分の頭にあててみせた。

そのパントマイムの意味がわかったようで、彼女はクロードの耳もとでなにかささやいた。クロードがそれにも首をかしげると、今度は髪をやさしくなで、抱きしめてきた。

どこまで理解しているのかはよくわからなかったが、こちらを慰めようとしていることはまちがいないようだ。そんな彼女に、クロードはちょっと心が安まる思いがした。

しばらくそうしていたあと、また早口でなにか話しながら、彼女はクロードの手をとり、チェストの前へと導いた。

クロードはためらいながらも、なん

だか熱意のこもった彼女の勢いに押され、そこに立っていた。と、彼女は、チェストの中の下着類を物色しはじめた。

そこで彼女が出してきたのは、フリルがいっぱいいついたいかにも女っぽいものだった。クロードは、当然それに抵抗したのだが、彼女は、まるでわかっているとでもいうようにほほ笑み、クロードのほっぺたを軽く叩いたり、ウインクしたりして、それをクロードの体につけていった。

クロードが抗議しているにもかかわらず、次々に女性下着をとり出す。その中には、胸のカップにパッドを入れたフルサイズのコルセットもあった。

彼女は、まるでそれがクロードの望みだとでも言わんばかりに、一生懸命、彼を女らしく着飾ろうとしていた。

クロードがいくら文句を言っても、

彼女はそれ以上にしゃべりつづけ、意思が通じない。

そんなやりとりの中で、唯一わかったのは、彼女の名前が「フェイエラ」というらしいことだった。

そして、クロードが唯一感謝したのは、彼女がバツスル(※)を持ち出さなかったことくらいだ。

(※訳注 当時の女性が、ロングスカートをふくらませるためにつけた木や針金でできた釣鐘型のフレーム)

しかし、そんなかすかな感謝さえ、彼女がワードローブの中から選び出した服を見たとき、どこかへ吹き飛んでしまった。

それは、そこに吊された服の中で最も手の込んだものというわけではなかったし、最もひらひらしたものでもなかった。でも、その服はまさに「女」であることを主張していた。

ライトブルーの生地に、ピンクの花

模様が刺繍されているワンピース。スカートの丈は足首まであり、おとなしめなシルエットは、いかにもしとやかな女性という感じだ。でも、レースづかいの胸当てはネックラインが大きく開き、首や肩をのぞかせそうだ。胸だって、コルセットぎりぎりのところまで見えるにちがいない。袖も短く二の腕の上の方まで露出してしまおう。

いったいフェイエラは、なにを考えているんだろう？

「そ、そんなの、やだよ」

クロードは、大きな声で叫んでいた。「そんなの無理だ。かえって女でないことがばれちゃうよ。マークはきっと、僕を殺すよ」

フェイエラは、親切そうなやさしい口調で、でも、とどまるところなくしゃべってクロードを黙らせると、そのワンピースをむりやり着させた。その

フェイエラのおしゃべりの中でわかったのは「マーク」という言葉が何度も使われたということくらいだった。

ワンピースを着たクロードの姿を満足そうに眺めると、フェイエラは、その手をとって鏡台の前に座らせた。

フェイエラはおしゃべりをつづけながら、引き出しから何本ものビンや箱を取り出し、順に並べた。それぞれなにに使うものなのかを説明しているらしい。

彼女の言っていることはさっぱりわからなかったが、クロードはすでに、それらを知っていた。ほお紅、口紅、おしろい……すべて、売春婦たちが、店へ出るために使っていたものだ。

フェイエラはクロードの上半身に白い布を掛けると、パントマイムで自分で化粧してみろと示してきた。そして、彼女自身は、クロードの髪をいじり始

めた。櫛でとかして髪をそろえ、カットしていく。毛先を少し切っているだけなのに、ぼさぼさに見えていた髪がきれいにまとまっていった。体にかけた布は、下に落ちる毛から服を守るためだったようだ。

そんなフェイエラの熱心さを見ているうち、クロードは自分がなにもしないのは悪いような気になってきた。それで、しかたなく——一方で、ものは試しという気もして——言われたとおりにメイクを始めることにした。

とりあえず、ビッキーの店で女の子たちの化粧を手伝っていた時のことを思い出し、その手順どおりに進めた。

ただ、そこで彼が思い描いていたのは、売春婦ふうの化粧ではなかった。ソルトフラッツの町をきれいなドレスと細身のパラソルで歩く品のいい女性たち……どうせなら、あんな顔をつく

ってみたいと思った。

商売女ふうの厚化粧ではなく、上流の娘たちのような繊細な薄化粧……。

それがうまくいったことは、鏡を見たフェイエラが驚いたように話しかけてきたのでわかった。でも、クロード自身は、情けない思いしかなかった。

フェイエラはますます楽しそうに、クロードの髪を切りそろえ、整えていった。

そのせいで、鏡の中のクロードの顔は、いよいよ、ソルトフラッツの町で見かけた女の子たちのようになってきた。

彼女たちは、いつも美しく、洗練されていた。ちょうど今クロードが着ているようなきれいな服を着、その下には、同じようなパンティを履いてもいたのだらう。

もちろん、彼女たちは、胸にパッド

は入れていなかっただろうし、パンティの中にクロードと同じものはついていなかったはずだ。でも、鏡の中の顔を見ているうち、クロードは、彼女たちのうちのひとりが自分のものになったような気になり、ちょっとワクワクした。

しかし、すぐ、そんな自分の錯覚に気づき、あわてて首を振った。それでは、欲望の方向が逆だろう。

髪を切り終えたフェイエラは、その髪を背中にかかるとようにブラッシングして、さらにサイドなどを整え、ますます女らしく見えるヘアスタイルをつくり出していた。

次に、フェイエラは、ドレスと合わせたブルーとピンクのリボンを取り出し、それで髪を飾った。クロード自身は気づいていなかったが、そのリボンが結ばれた瞬間、彼の目が輝いた。

それを見て、フェイエラがなにか言った。

じつはこの時、フェイエラは、そのヘアスタイリングが楽だったと伝えていた。クロードの髪質がよく、思ったほどの手間もかからなかったと言ったのだ。もちろん、彼には伝わらなかったが。

クロードの体に掛けていた布をとると、フェイエラは、ソルトフラッツの娘たちが履いていたのと同じような靴を出してきた。ヒールが高いせいで、クロードが履くのに手こずっていると、彼女が手伝ってくれた。

それを履き終わったところで、フェイエラは、クロードの手をとって、姿見の前へと導いた。

鏡の中に現れた姿に、クロードは目を見張った。

彼は美しかった！ ……いや、とい

うより、そこにいるのは、若くて美人としか表現しようのない……女性だった。

クロードはまず、もし自分が最初からこんなふうに生まれたのなら、今のようなみじめな人生にはならなかっただろうと感じた。

人から疎んじられることもなかっただろう。里子に出されても、返されることなく大事に育てられただろう。誰も殴らなかつただろうし、路地に連れ込まれてからかわれたり、いじめられることもなかっただろう。

それにたぶん、こんな目に遭うこともなかったにちがいない。

自分は、息をのむほどの美人だ！

こんな女の子なら、町の男たちは必死で守ってくれたはずだ。

それどころか、いつも男たちからチヤホヤされ、ねだればなんでも買って

もらえたかもしれない。

そこまで想像したところで、クロードは我に返った。

……ちがう！ 僕は女じゃない！

男にチャホヤなんて、されたいのか？

こんな服を着ただけで、いったいなにを考えてるんだ！

シルクやリボンがいくら似合ったとしても、僕には他の男と同じ……そう、ペニスがあるんだ！

また、涙があふれてきた。

と、後ろに立ったフェイエラが、そんな気持ちを静めるとでもいうように、抱きしめてくれた。

クロードはそれを、彼女が自分の気持ちをわかって同情してくれたのだととっていたが、フェイエラの方は、その涙を、美しくなれた自分に感極まったせいだと理解していた。

だから、クロードが落ち着いたと見るや、その首や指にいくつかの宝石類をつけた。

そして、その手をとってドアへと向かった。

部屋から出られたのだから、そのまま走って逃げたかったが、そうはいかない事情があった。靴のヒールが、走ることを許してくれないのだ。

それに、もちろん、そんなことをしたら、あの無法者にどんな目に遭わされるかわからないという恐れもあった。

だから、すでに女性にしか見えなくなっている少年は、おびえを抱きながら、おとなしくフェイエラに従った。

ハイヒールで階段を下りるのは、経験のないクロードにとって、生やさしいことではなかった。でも、フェイエ

ラがしっかりと腕を持って支えてくれたおかげで、大きくバランスを崩すことなく下りきることができた。

ところが、階下まで下りたところで、彼女はその手を離してしまった。どうやら、ダイニングルームに向かうまでの何歩かは、ひとりで歩く練習をしろということらしい。

足もとをぐらつかせながら、それでもなんとか転ぶことなく、クロードはそこまでたどり着いた。

クロードにとって、ダイニングに入っていく自分の姿は、みっともないものとしか思えなかった。

幸い、スカートで床をぞうきんがけするようなことにはならなかったが、ビッキーの店のダンスフロアで高いヒールを履いて踊っていた女の子たちにくらべれば、ただ単に前に進んでいる

というにすぎない。

ヒールがぐらつくのを隠し、転ぶのを恐れ、一步一步慎重に足を運ぶ姿は、どうしようもなく不格好だろう。まさか、その姿を、あのマッド・マック・マーフィーが、まるでお姫様のように感じているなどとは、つゆほども思っていなかった。

その無法者にとって、ダイニングルームに入ってきた新しい「サドルブライド」の姿は、信じられないほどしとやかで優雅なものに見えていた。

上品に着飾ったその姿に、鼓動が高まり、股のつけ根に激しいうずきを覚えた。

こんな美人は見たことがない！

モンタナからテキサスまで、たいいていの売春宿には行ったが、これほどの女と寝たことなどなかった。

彼女が着ているドレスは、まるであつらえたように似合っていたし、スリムな体型も申し分ない。

これまで、胸の小さな女だと思っていたが、どうやらそれはまちが이었다ようだ。たぶん彼女は、こちらを恐れて、それを隠していたのだろう。今、そのレースの胸あての下には、はっきりとしたふくらみがあるのだ！

彼は、思わず口笛を吹いていた。そして、自分が誘拐してきた娘が顔を赤くしたのに、やさしくほほえみ返していた。

クロードは、フェイエラが指し示した席に、おずおずと腰を下ろした。

テーブルは十人以上が囲めるほど大きかったが、食事の用意がされているのは4席だけだ。料理そのものは、すぐ隣の台所で準備中らしく、皿やグラ

スだけが並んでいた。これまで本物を見たことがないのでよくわからないが、どうやら、皿はチャイナ、グラスはクリスタルというものらしい。

マークはひげを剃り、ドレス姿のクロードに合わせるとでもいうように、こざっぱりした服に着替えていた。少なくとも、これまでより清潔であることはまちがいになかった。

どうやらパコが料理の準備をしているらしい。クロードが席に着いたのを確認したところで、フェイエラは、あせったように台所に行った。

マークは、その「サドルブライド」が隣りに座ったことで、ひどくのどが乾くのを感じた。それで、彼女と自分のグラスにウイスキーを注いだ。

安酒ではあったが、少なくとも、今この家にある中では最も上等なもの

だ。酒や食料を買い出しに行くのはパコの役目だったが、最も近い町との間も、でこぼこの山道がつづく。6頭のラバを引いてそんな山道を往復するのは、片腕の男にとってけっして楽なことではないだろう。だから、ぜいたくは言えない。

見ると、彼女は、グラスを握りしめていたが、飲もうとはしなかった。これから始まることがわかり、緊張しているにちがいない。

と、料理の準備をフェイエラに任せたパコがやって来て、席に着いた。

マークは、この、酒に関しては底なしの男とグラスを酌み交わすことになった。

パコと世間話をしながら飲むうち、ボトルはすぐに半分以上が空いた。

パコはほとんど英語が話せない。彼女の方も、スペイン語はわからないら

しい。そのせいでますます疎外感を募らせていくように見えた。

彼女の気持ちを和ませるためにも、マークが通訳せざるを得なかった。

ところが、酒がまわってきたパコはそんな状況を面白がり、マークを困らせるようなことばかりしゃべり始めた。

しかたなくマークは、パコの言葉の意味を薄めて通訳した。

「パコは、あんたのことを、ほんとにきれいだと言ってるよ」

マークはそう訳したが、本当のところパコが言ったのは「俺にもイッパツやらせてくれ」だった。

「若いから、きっと、マンコのしまりもいいにちがいないぜ」という言葉は、「そのドレスもよく似合うと言ってる」と言い変えられた。

フェイエラが料理を運んでくると、男たちは話すのをやめ、食事に専念しはじめた。

高級なチャイナや銀のスプーンに似つかわしくなく、その献立は素朴な田舎料理というものだった。いろいろな豆類と、焼いたりあげたりした豚肉。高級とは言えないが、きちんと調理はされていた。

ただ、クロードにはそれが、おいしいのかまずいのかよくわからなかった。食事の間じゅう、マークの手が腿の上に置かれているのが気になって、それどころではなかったのだ。

食事が終わったところで、パコは、ベストのポケットから太い葉巻を取り出して火をつけた。そして、それをくゆらせながら、クロードの方をじろじろと見つづけた。

吸い終わると、マークに「おやすみ」とつぶやき、そそくさと席を立った。台所に行ったパコは、まだかたづけものの途中だったフェイエラの腕をつかむと、強引に引きずるという感じで勝手口から消えた。

それを見送りながら、マークはひとしきり笑った。

パコの行動があまりに唐突だったので、クロードはわけがわからず、ポカンとそちらを見やっていた。そして、結果として、マークと二人きりになってしまったということの意味にも、すぐには気がまわらなかった。

ふと我に返ると、マークの手は、まだ自分の膝に置かれたままだった。そして、その自分は、きれいなドレスを着て彼の隣りにいた。

これがどんな状況なのか、これからマークが何をしようとしているのかと

ということが、突然、差し迫った問題として理解できた。

少なくとも今は、フェイエラがどこに連れて行かれたかなどということより、彼自身がどうなるのかということの方が重大な問題なのだ。

「ふふ、パコは、何しに行ったと思う？」

マークが、ちょっと秘密めかした言い方でささやいた。

そのあと、またおかしそうに笑ったので、クロードはその顔を見た。と、彼は、自分からその疑問に答えた。

「やつは、フェイエラとセックスしにいったのさ」

そして、さらに笑いながらつづけた。「でも、やつの頭ん中じゃあ、抱いてる相手はフェイエラじゃない。やつは今、あんたを犯してるつもりさ」

マークの言葉に、クロードは、大男

のパコに組み敷かれている自分の姿を想像していた。裸の体、そして、巨大なコック……。

「そ、そんな……」

クロードは思わず身震いした。

「パコが恐いか？ そりゃあそうだ。やつのことは、俺だって恐いんだからな。なにしろやつは、3つの国と2つの州から指名手配されてる殺人鬼なんだから」

「そ、そんな人を、どうして……？」

クロードはぞっとして、思わず、もうひとりのお尋ね者の目を、すがるように見ていた。

「ふふ、やつは、なぜか俺には従順なんだ。それに、やつの腕があんなふうになったのは、俺の仕事を手伝ったせいだからな。それで、この隠れ家の留守を守ってもらってる。やつにはたっぷりと金を渡して、サドルブライドの

世話までしてやってるんだ」

「サドル……ブライド？」

意味がわからず、クロードはつぶやくように聞き返していた。

マークは、そこでまた笑い声を立て、説明した。

「サドルブライドってのは、まあ、仮の花嫁ってことさ。いや、花嫁ったって、結婚するわけじゃない。俺たちの世界じゃあ、ほとぼりが冷めるのを待って、どこかに身を隠さなきゃいけない時がある。その間は、商売女も抱けない。そんな時に、そばに置いて世話させる女のことだ。俺やパコは、たいてい、冬の間は仕事をしないで隠れ家にこもる。特にここは、雪のせいでどこにも出られなくなる。だが、ひと冬も女をがまんするなんて、できない。だから、毎年、きれいな女を買うか、かつさらってきて、ここに置くんだ。

そうすりゃあ、退屈な冬の日も楽しく過ごせるってもんだ。もちろん、夜もな」

マークは、最後の言葉に合わせて、クロードの頬をなでた。

クロードは、それにびくびくしながら、さらに小声できいた。

「つ、つまり、フェイエラは、その…サドルブライド？」

「ああ、パコのために、カンザスで買ってきたんだ。コマンチ族の男からな。フェイエラはスー族だと思うから、あのコマンチが、他の種族を襲って、かっさらってきたんだろうよ。パコはどうやら、あの女を気に入ってるようだな。これまでのサドルブライドはひと冬で始末したのに、夏の間もずっと生かしてるんだからな」

クロードは、さらに聞き取れないほどの声で、次の疑問をつぶやいた。当

然、マークの耳にもとどかなかったと思うが、彼はその質問がわかったようだ。

「ああ、そうさ、お嬢さん。あんたがこの冬の、俺のサドルブライドってわけだ」

その言葉に、クロードは血の気が引くのを感じた。

そして、次の言葉で、完全に気を失った。

「パコは、すきがあればあんたの体を狙うだろうな。だが俺は、あんたを、俺の女としてひとりじめしたい。さあ、かわいがってやるから、二階へ行こう」

失神したクロードの体は、マークの腕の中に倒れ込んだ。クロードの意に反し、それが、取引成立の印となった。

第6章

意識がゆっくりと戻ってきたとき、クロードは自分がどこにいるのかよくわからなかった。

さっきまではダイニングルームにいたはずだが、ここは、どうもちがうようだ。

そう思ったことで、やっと、先刻のマークの言葉がよみがえってきた。どうやら自分は、あの言葉で気を失ったらしい。

じつはこれが、クロードがいじめられつづけてきたもうひとつの理由だった。彼はショックなことがあると、すぐ気絶する。それは、むごい幼児体験によって身についてしまった自己防衛反応なのかもしれなかったが、そんな彼の体質を知ると、ワルたちはそれを面白がり、よけいにクロードを脅すの

だ。

そんなことを思いながら、クロードは、自分がやわらかなマットレスの上で横になっているのに気がついた。それで、最初に閉じこめられた部屋なのかと思ったが、天井の様子など、あの部屋ともちがうようだ。例の女物の服がいっぱい掛かったワードローブも見あたらない。

あの部屋より大きい感じだし、壁には、バッファローの頭部の剥製が掛かっていたりする。

コーナーには書棚もあり、数十冊かの本が立てられている。

……ん？ 本？

クロードは一瞬、それに興味をそそられた。しかし、そこでマークの声がし、彼の関心はあっという間に吹き飛んだ。

「気がついたかい、お嬢さん？」

声の方を見ると、ベッドのそばの椅子にマークが座っていた。すでに上半身はシャツを脱ぎ、長めのウールの下ばきひとつの姿だった。

それに身震いしたクロードは、なにも答えられず、その誘拐犯を見ていた。

マークは、クロードが震えているのに気づいたのだろうが、だからこそ、あえて立ち上がり、その最後の下着を脱いだ。

「お嬢さん、今夜のあんたは、ほんとにきれいだぜ」

首をもたげはじめたコックを見せびらかすように近づいてきたマークが恐くて、クロードは寝返りを打って背を向けた。

でも、すぐにベッドがきしみながら揺れるのを感じた。そして、マークの手が、頬に触れてきた。そのせいで、クロードはまた、気を失いそうになっ

た。

けっして強引にではなく、むしろいたわりのこもった手つきで、マークは、クロードの顔を、自分の方に向かせた。

見つめてくるその目のやさしさに驚いていると、それが近づいてきて、次の瞬間、マークの唇がクロードのそれに押しつけられた。それもけっして乱暴なものではなかった。

クロードは、そのキスを、どうしようもなくいやなものだとは感じなかった。少なくとも、旅行中、コックをくわえさせられたのにくらべれば、ずっとましな気がした。だから、吐き気に襲われるようなこともなかった。

すぐにマークの舌が口の中に入ってきたが、それも、食事の時に避けていたウイスキーの味に抵抗を覚えただけだった。

キスがそんなにひどいものではない

と感じたクロードは、若干緊張を解いて、かすかにマークの舌に応えさえした。

じつは、そんなふうに時間を稼いでおいて、これ以上ことを進めない方法はないものかと、必死で頭をめぐらせていたのだ。

もし、パンティの中に隠している秘密を知られてしまえば、荒くれ者、マッド・マーク・マーフィーは激昂し、自分は即座に殺されるだろう。せめて、それだけでも阻止できないだろうか？

そんなふうに考えるうち、クロードは、生き残る道がまったくないわけではないと感じた。少なくとも、今夜のところは、なんとか乗り切れるかもしれない！

これだけ酒の味が強いところを見ると、マークはそうとう飲んでいるにちがいない。もう少し時間を稼いでいれ

ば、ウイスキーのせいで酔いつぶれる可能性だってある。

たしかに、外見上はさほど酔っていないように見えるが、それだけでは判断できない。ことにおよんだところでアルコールがまわり、けっきょくなにもしないて帰っていった男たちを、クロードは売春宿で何人も見ている。

たとえ、自分から気を失うことはないとしても、そこに強い刺激を与えてやれば、そうなる可能性はさらに増す。たとえば……フェラチオ。

もちろん、そんなことをするのはいやだが、ここまでにもう、さんざんやらされてきたのだ。それがもう一回増えたとしても、なんのこともないだろう。

それに、うまくやれば、マークから最大限の興奮を引き出すこともできるだろう。そうすれば、気を失わないま

でも、イッたあと、疲れて寝てしまう可能性は高い。そんな男が多いことも、売春宿での経験で、クロードはよく知っていた。

酔いつぶれるにしろ、寝てしまうにしろ、マークの意識がなくなれば、そのすきに、逃げ出すこともできる。もしかすれば、フェイエラを誘って、いっしょに逃げることだってできるかもしれない。彼女も同じサドルブライドの身。あの嫌らしそうな大男、パコから逃げ出すチャンスをうかがっているにちがいない。

そこまで考えたところで、クロードの思考はさらに発展し、マークの六連発銃を使うことに思い至った。

さっきちらりと見えたのだが、その銃は今、暖炉の上に置かれている。寝てしまえば、こちらがこの無法者を殺すことだってできるわけだ。

しかし、クロードは、そんな考えを即座に却下した。銃を持ったことさえない自分に、そんなことが平然とできるとはとても思えなかったからだ。

それでクロードは、最初に考えた計画だけにとどめ、さっそくそれに取りかかることにした。もうこれ以上考えている余裕はなかった。

キスしながら、マークは、クロードの体のあちこちをまさぐりはじめていた。今、その手は、架空の「胸」を包み、そこを揉んでいた。今のところまだ本物だと思っているようだが、いつばれてもおかしくないところまできているのだ。

それでクロードは、マークに期待を抱かせるように自分の方から唇を押しつけ、マークの体を仰向けにしていった。

さらに、片方の手をマークの下半身

に這わせ、その細い指先で、すでに堅くなっているコックに触れた。そのとたん、それは、けもののようにいきり立ち、さらに堅くなった。クロードは、その要求に応じてそれを握った。

キスをさらにつづけ、自分の方からもマークの口に舌を入れ、舌どうしをからめ合った。そして、その大きな男の体の上に、自分の小さな体を投げ出すようにした。

そこで唇をずらし、マークのあごから首、胸へと、それを這わせていった。前に売春婦がそうしていたのを思い出し、途中、男の乳首に寄り道し、そこをなめ、軽く歯を立てたりもした。

その刺激に、マークはあえぐように息を吐いた。こんなにかわいい少女から、愛情あふれる行為を受けることは、大きな悦びだった。

彼女が急に積極的になり、自分の方からあれこれやり始めたことには少々面食らったが、マークはそれを、彼女がもう逃げ道のないことを悟り、サドルブライドとしての運命を受け入れたのだと理解した。恐れるのをやめ、どうせなら、自ら楽しもうと思ったにちがいない。

実際、少女の唇は、彼の鍛えられた腹筋をくわえるようにしてたどり、その舌は、へそのあたりをなめて戯れ、さらに、じりじりと期待する場所へと向かっていた。

その間、彼女の手はずっとコックを握っていた。その手はじっとしたままで、いつものように早くイカそうとしごく様子はなかったが、きつく握ってくれていることはたしかだった。

その手のひらの暖かさに、彼のコックは鼓動ごとにいきり立ち、ぴくぴく

動きながら、その時を待っていた。

ついに、唇がその近くまで達した。できるだけその時を遅らせ、マークを疲れさせることを考えていたクロードは、そのけものを根本からなめていこうと、握っていた手を離した。

とたん、その怪物が反り返り、クロードの頬を叩いた。

これまで見た経験から言って、たいていの男は、興奮すると垂直なところまでは立ち上がる。でも、まるでへそにあたらんばかりに跳ね上がってくるのは見たことがない。

クロードは少し顔を引いて、その勢いのまま、マークのコックをお腹の側に倒させると、根本をまわりこむようにキスしていき、裏側からなめはじめた。張りつめたその表面を、根本から亀頭に向けて、ゆっくりとなめあげる。

もちろんクロードは、喜んでこんなことをしているわけではない。でも、売春婦たちがしているのを見た経験から、男が喜ぶ方法はよくわかっていた。

ちょっと舌を這わせただけで、マークは、そのやり方をほめるとでもいうように、うめき声を上げた。

今度は2本の指だけで根本をつまみ、クロードは、マークのコックを立てると、ゆっくりと自分の口もとに運んだ。しかし、そこでじらすように顔ははずし、すでにマークの腹にこぼれていた液体をなめた。

そうしながら、そこに覆い被さるように身を投げ出し、やっと亀頭の先に舌を触れた。

舌だけを使い、しばらくなめていると、マークが、早くくわえてくれといわんばかりに腰を突き出してきた。

そのせっぱつまった様子がちょっと

おかしくて、クロードは思わず、くすくすと笑っていた。

その笑顔でちらりとマークを見たあと、そこに唇をつけ、包み込むようにゆっくりと頭を下ろしていった。

マークは震えながら大きく息を吐いた。

そのやわらかな唇の感触と、その中でつづく舌の奉仕に、マークは我を忘れた。

彼が新しく手に入れたこのかわいい娘が、これまで知り合ったどんな女よりいい女であることはすでにわかっていた。でも、彼女の方から積極的に愛を捧げてくる今、もう、これまでの女とくらべることさえできなくなっていた。

その可憐な唇に包まれることで、彼はすでに、これまでのすべての経験を

忘れ、純粹な喜びの世界へと漂いはじめていた。

彼のものは、どんな売春婦にくわえられた時より大きく勃起していた。彼女は、それに歯をあてることもなく、深く頭を上下させている。

こんなにこちらの気持ちのわかった……こんなに愛にあふれた奉仕を受けるのは、生まれて初めてだ！

こんな悦びがあったなんて、信じられない！

実際、マークのものは、これまで覚えのないほど勃起していた。

すぐにでもイキそうだったが、それは、彼女のすてきな唇がそこから去ることを意味していた。彼は、この悦びを少しでも長引かせようと、高まる興奮に耐え、必死に自分を抑えていた。

フェラチオだけでこれだけいいのだ。ホンバンはもっといいにちがいな

い。こんなセックスができるなら、この冬だけといわず、次の冬も、その次の冬も、この女を手元に置いておきたいとマークは思っていた。

唇と舌をめいっぱい使い、その長いポールにそって頭を上下させながら、クロードは、この無法者に、これまでで最高の悦びを与えようと思っていた。

それが今、唯一、命をつなぐ手段なのだ！

そんなせっぱ詰まった状況に置かれていることで、クロード自身も我を忘れ、いわば夢中になっていた。

さらに、クロードの抵抗感を薄れさせていたのは、ここまでしてきた経験にくらべて、くわえているものがずっと清潔だと感じられたことだ。鼻をつく匂いのしないそれは、これまでほど

いやだと思わなかった。

それに、これさえうまくやれば、こんな行為をするのも最後になるだろうという思いが、さらに彼を積極的にさせた。

いずれにせよ、クロードは、そのコックを全身全霊を傾けてしゃぶっていた。

そう、文字通り、命がけで！

そのかわいいサドルブライドの唇が、亀頭のところまで持ち上げられると、シャフトの表面にだ液が光った。そのだ液と、コックの先から漏れはじめている液体が混じり合っていると思うと、マークはがまんできないほど興奮した。

亀頭全体に渦をまくように舌をからめながら、ふたたび彼女の頭が下り、シャフトの半分以上を呑み込む。そし

てまた上がる。

そこで今度は、亀頭の裏側にあてた舌が細かく震えるように動く。

同時に、彼女はふたたび、シャフトの根本を強く握ってきた。

マークは、それに耐えられず大きな声でうめいていた。

そんなマークの声に応えるように、彼女は、音を立ててそこをすすり、シャフトを呑み込むと、自分自身、かすかに、もだえるような声を上げた。

そして、次第にそんな首と手の動きを速めた。

彼女がもう片方の手で包み込むように睾丸を持ち上げてきたとき、マークはさらに大きな声を上げていた。

もう、がまんは、限界まで達していた。

絶頂が近づいたところで睾丸を持っ

てやると、マークがイキやすくなることを、クロードはすでに、体験的に知っていた。

さらに、爆発する瞬間、コックがどんな動きをするかも口が覚えていたから、その瞬間に合わせ、できるかぎり深くくわえ込めるようタイミングを計ってもいた。

くわえつづけ、舌を使いつづけ、その怪物に奉仕しつづけるクロードは、マークが言うところのサドルブライドそのものだった。

コックの先から熱いものがほとぼしり出たときには、マークの腰の動きでそれが抜けないよう、絞めるように唇に力を込めていた。次々につづく噴出に合わせ、まるで吸い上げるように口を動かしていた。

口の中が、これまでにないほど濃い精液でいっぱいになった。

クロードはそれに、達成感のようなものを感じていた。マークが興奮と悦びの声を上げつづけるのを耳にして、そんな気持ちがさらに増した。

ここまで、自分自身も興奮した芝居で鼻声を出したりしていたのだが、マークの精液がのどの奥にあたるのを感じながら、それがいつしか、演技なのか本気なのか区別のつかないものになっていた。

この瞬間、クロードは、自分がなんのためにこんなことをしているのか、見失った。

マークの精液を口に受けるのは、命を長らえるためだったはずだ。この喜びはきっと、それが成功しそうだからにちがいない。けっして、他の男を口でイカしたことが、うれしいのではない……はずだ。

最後の噴射が舌の上に弾んだのを感じ

じ、クロードは、口の中の液体すべてをぐくりと飲み下した。

しかし、そのあとも、次第にしぼんでいくコックをくわえつづけ、それにともなって先からにじみ出てくる精液をも、最後の一滴までやさしくなめとっていった。

こんな形で、しかも、自分自身は服を脱がされることもなくことが終わったことにほっとし、クロードは、やわらかくなったそれから口を離した。それでも、手はまだその根本を握ったままで、マークの下半身に頭を預けてじっとしていた。

激しかったマークの息づかいは次第に静まり、それがそのまま、寢息に近づいている。今へたに動けば、心地よい夢から覚まさせてしまう気がしたのだ。

思ったとおり、マークの呼吸はさら

にゆったりしたものになっていった。
5分がたち、10分がたち、マークはほ
ぼ寝入ったようだ。

それでもクロードは、もうしばらく
待った。まだ、動かない方がいい。

マークの体に頬をつけた同じ姿勢で
頭を預けているせいで、首筋が痛くな
ってきた。それで、20分近くが経過し
たにちがいないとクロードは判断し
た。もう、起きあがってもだいじょう
ぶだろう。

マークのコックを握っていた手をそ
っとはなし、ベッドを揺らさないよう、
ゆっくりと体をずらしていく。体を少
しずつ起こしながら後ろ向きにずれて
いくのに、コルセットと長いドレスの
裾がじゃまだった。

後ろ手にベッドの縁を探り当て、そ
こから片足を下ろす。それが床に着き、
もう片足を下ろしたとき、クロードは、

マークがハイヒールを脱がしてくれていたことに感謝した。

フローリングの床をヒールで歩けば、大きな足音が立つだろう。その音に、マークが目を覚まさないともかぎらない。

寝入っているマークの顔から目を離さず、後ずさるようにベッドを離れる。

そのまますり足で後ずさっていたなら、おそらく床がきしむこともなかっただろう。でも、早く部屋から出たかったクロードは、三步ほど進んだところで、向きを変えていた。そして、ドアに向かって走りかけた。

と、そこで、後ろから呼び止められた。むろん、マークだった。

「お嬢さん、どこへ行くんだ？ まだ、半分しか終わってないだろ！」

第7章

ベッドから下りてきたマークは、彼のサドルブライドに歩み寄り、ほほ笑んだ。その目は、すっかり眠気が覚めてしまっている。

クロードの小さな手を握ったマークは、自分の方へ引き戻した。

「まさか、こっそり抜け出そうとしたわけじゃないよな？」

クロードの体を抱くようにしたマークは、その手をクロードの尻に当て、そこをなでた。

「それは、あまりにも失礼ってもんだぜ。なにしろ、今夜は、俺たちの新婚初夜なんだからな」

マークは、自分の冗談がさもおかしいとでもいうように笑った。でも、クロードにとって、それは絶望的な響きに聞こえた。

男のコックをしゃぶったことが、けつきよくはすべて無駄になってしまった。うまくいったと思ったのに……。やはり、あせって出ていこうとしたのがまちがいだった。

「あんたは、ほんとにかわいいぜ。もう一度ことをはじめる前に、まず、礼を言わなきゃならんな。あんたのフェラは、ほんとに最高だ。するたびに目に見えてうまくなるんだから、俺もちよっと驚いてるんだ。でも、あんたがそこまでしてくれてるのに、いつも俺だけがイッてるのも悪いだろ。サドルブライドになった以上、あんただって、いい思いをするべきだと思うんだ」

マークは、クロードの首筋にキスしながら言った。

「つまり、もっと簡単に言やあ……。あんたを、ファックしたい」

そんな言葉に対し、クロードができ

たことは、ただひとつだけだった。

クロードは、泣き出していた。

「ふふ、恐がることはないさ、お嬢さん。もちろん、女は、初めての時は痛いらしいけどな。でも、俺は、初めての女が初めてってわけじゃない。これまで何人も、あんたみたいな娘を女にしてやってるんだ。それに俺は、血も涙もない男ってわけでもないんだぜ。初めてのあんたに無茶なことはしない。俺の言うとおりにすればいい。痛いのは最初だけで、すぐにあんたは、それがどれほどいいかわかるはずだ」

マークは、まだぐにやりとしたままのものをつかんで、振るようにした。

「終わったあとには、どんな女もみんな、泣いて喜ぶんだぜ」

クロードは、完全に動転していた。

見当ちがいなマークの言葉が、なんの慰めにもならないことは言うまでも

ない。クロードが恐れているのは、そんなことではなく正体を知られることだ。そして、それを知ったマークが、まちがいなく自分を殺すだろうということだ。

「ただ、初体験が俺だっていうのは、よくないこともある」

マークは、そう言いながらクロードに背中を向かせると、ドレスのボタンをはずしはじめた。

「一度、俺とすると……」

尻のあたりを軽く叩きながら、マークはつづけ。

「もう、他の男とはできなくなる。俺みたいに感じさせるやつなんて、他にはいないからな」

それはまちがいないだろうと、クロードは思った。

マークほどの巨根は、売春宿でも見たことがない。

いや、そんなことを心配する必要もないだろう。自分がその巨根に貫かれることはない。マークはホモではないのだ。

そして、それにもかかわらず、マークの言うことはまちがっていない。自分は、二度と他の男に犯されような目には遭わないはずだ。なにしろ、もうじき死ぬのだから。

と、そこで、着ていたドレスが体をすべって床に落ちた。驚いたクロードは、思わずパッドの入った胸を隠そうとしていた。

しかし、マークの方が、それより早く動いた。

抵抗したにもかかわらず、クロードのスリッパがはぎ取られていた。

これ以上脱がされるのを阻止しようと、マークの腕をすり抜けたクロードは、目の前にあったベッドの上に逃げ

ていた。そして、かけ毛布の下に丸まるように隠れた。

そんなことをしてもなんの意味もないことは、クロードにもよくわかっていた。でも、他にどうすることもできなかった。

逆に、マークの方は、クロードのそんな行為を誘いだとさえ受け取ったようだ。その毛布の端をめくると、自らの体をその中にすべり込ませてきた。

そして、クロードの体を抱き、ふたたび首筋に唇を這わせながら、にせ物の胸をもむようにした。

「お嬢さん、俺のことを一生忘れられなくしてやるぜ」

そう言ったマークの手が、クロードの体の上をすべり、パンティにかかった。

あわてて頭をめぐるさせたクロードは、もう一度、前と同じ手に出ていた。

急いで毛布の下に潜り込み、また堅くなりかけているマークのコックをつかんで、口をつけたのだ。

さっきの激しいフェラのせいで、あごが痛かったが、そんなことはかまっていられない。

さっきはもう一步のところで失敗したが、今度こそうまくいくかもしれない。マークを、眠らせることができるかもしれない……。

「ああーっ」

マークはあえぐような声をあげた。

「いい感触だ、お嬢さん。でも、そこまで気を使わなくたっていいぜ。俺のものはすぐ堅くなる。あんたの中に入れようとすればな。あんたのかわいいわれめを見せてくれるだけで、じゅうぶんさ」

そう言いながらも、マークは、枕の

上に頭を投げ出して仰向きになり、少女の奉仕により、自分のものがいきり立ってくる感触を楽しんだ。

でも、今回はもちろん、このまま絶頂を迎える気などなかった。

マークが今ほしいのは、少女の口ではなく、ヴァギナなのだ。

前戯はもうじゅうぶんだと感じたマークは、少女の体に手をかけ、荒れ狂うペニスから引き離すと、寝返りを打つようにして、彼女を組み敷いた。

コルセットのひもを解こうとすると、彼女がまた抵抗した。でも、それを押さえ込み、マークは、その結び目を見つけ、ひもを引いた。

クロードの緊張に反し、それを見たマークは、声を立てて笑った。

「ふふ、やっぱりそうか。あんたが胸のない女だということは、気づいてた

さ。俺の気を引くために、こんな上げ底をする必要なんてないんだぜ。まだ胸が小さくたって、あんたはじゅうぶんにかわいいよ。それに、これから、俺がかわいがって大きくしてやるよ」

コルセットとパッドをベッドの外に放り投げながらそう言ったマークは、クロードの片方の乳首にくちづけ、そこを吸ってきた。

恐怖におののいているにもかかわらず、クロードは、体の中を走ったその刺激に一瞬我を忘れた。そのせいで、マークの手が下半身に行かないようかけ毛布を押さえていた腕の力がゆるんだ。

と、一気に決着をつけようとでも思ったのか、マークは、そのかけ毛布をはねのけ、体を起こした。

クロードの手は、自然に、自分の股のあたりを隠すように動いていた。そ

こを守っているのは、今やその手以外には、薄いパンティだけになっていた。そのすべてが今、この冷血漢の犯罪者にはぎ取られようとしていた。

マークはまず、クロードの手をつかんできた。股の前に重ねた小さな両手は、マークの片手だけで簡単に握られ、どかさされていた。

もう片方の手をパンティの縁にかけたマークは、一気にそれを引き下ろした。

一分近く、静寂の時間がつづいた。聞こえているのは、すすり泣くクロードの声だけだった。

自由になったクロードの手が、その泣き顔を覆っていた。

そしてクロードは、その無法者が、すべてを知り、爆発する瞬間を待っていた。

しかし、その瞬間はなかなか訪れなかった。それに耐えきれず、クロードは指の間からそっとのぞいた。

マークは、まるで恐ろしいものでも見るように、未だぼう然と、クロードの小さなコックを見つめていた。

それは、本当に小さかった。でも、それなりに立っているように見えた。そして、それでも、マークの小指ほどしかないのだ。

これでは、ほとんど役目は果たせないだろう。しかもまだ、陰毛すらまともには生えていない。

だから、最初、マークはそれを、男の器官だとすら感じなかった。

しかし、見ているうち、この1ヵ月ほどの日々がよみがえり、自分がしていたことの意味にいきなり気がついた。

衝動的な憎悪がわき起こった。

俺のcockをくわえていたのは……
男だった！

このぼうずは、ずっと、俺をだまし、
コケにしてきたのだ！

「こ……この、いかれたオカマ野郎
が！」

マークの叫びとともに、クロードの
顔が逆手で張られた。

自分の手で顔を覆っていたことで、
その最初の衝撃にはなんとか持ちこた
え、意識を失うことはなかった。しか
し、2発目の張り手は、その手をも飛
ばしてしまった。そして、つづけて襲
った3発目を、クロードは全くのノー
ガードで食らった。

4発目が振り下ろされたとき、クロ
ードはすでに、その痛みを感じるこ
とすらなかった。……。

第8章

目覚めると、窓から陽が差し込んでいた。その角度や光線の感じからすると、どうやら、もう昼をずいぶんまわっているようだ。

でも、なんだか部屋の中が寒い。暖炉に火が入っていないせいだろうか。

いったんそう思ったところで、クロードは、自分自身がほとんど裸なのに気がついた。

ゆうべ、マークに秘密を知られたときのまま……つまり、膝までずり下げられたパンティとストッキングしか身につけていない。

ただ、今いる場所は、ゆうべの部屋ではないようだ。ここは、最初に閉じこめられた部屋、つまり女物に着替えさせられた部屋だ。

と、誰かがそっと、顔を拭くのを感じ

じた。水を浸したタオルの冷たさに身震いし、クロードは、思わずその手をつかんで顔から離していた。

フェイエラのやさしくなぐさめる感じの音が聞こえ、タオルがベッド脇の洗面器に戻された。そして、彼女の両手がクロードの手を包んだ。

フェイエラは、痛ましそうなまなざしでこちらをのぞき込んでいた。そんな彼女の表情で、クロードにも、自分が今、どれほどむごい状態なのか、察しがついた。

たしかに、顔がひどく痛む。手を当てると、ちょっと触れただけで腫れているのがわかったし、その触れた部分がさらに痛んだ。

自分が生きているのが不思議な気がしたが、一方で、こんな痛みにさいなまれるなら、生きていない方がましだとさえ思えた。

力を振り絞って起きあがろうとすると、痛みが体中に走った。フェイエラの手がやさしくそれを止め、ふたたび枕の上に落ち着かせた。

どうやらゆうべ、マークは、こちらが気を失ったあとも殴りつづけたにちがない。考えていた以上に、体のあちこちが痛めつけられているようだ。

と、いったんベッドのそばを離れたフェイエラが手鏡を持って戻ってきた。これで、傷を確かめろということらしい。

その鏡で自分の体をざっと見たところで、クロードはフェイエラが押しとどめた理由がわかった。腫れやアザが全身におよび、これではたぶん、ベッドから出るのも無理だろう。

その姿は本当に悲惨なものだった。顔は全体が赤く腫れあがっていたし、あばらのあたりも、そこら中に殴られ

たアザが残っている。腰から脚にかけても、あちこちが赤黒く変色していた。

ペニスや睾丸は、一見、さほどひどくないように見えるが、もともとが小さいのだから、ふだんとくらべたらそうとう腫れている。さらに、ちょっと体を動かすだけで、そこに激しい痛みが走った。たぶん、マークは、ここを集中的に痛めつけたにちがいない。

骨が折れている様子はなかったが、腫れ上がった膝は、ふだんの倍にもふくらみ、当面、体重を支えられそうになかった。

フェイエラは、なにかなぐさめるようなことを言いながら、クロードが少しでも痛みを感じないですむようにと、枕の位置などを直してくれた。

フェイエラの言っていることは、ほとんど理解できなかったが、マークという言葉とともに、パントマイムで馬

に乗って去っていく様子を示したことで、彼が今、この屋敷にいないことがわかった。

それがなにより、クロードの気持ちを落ち着かせた。

全身をきれいに拭いたあと、フェイエラは、新しいパンティを持ってきてはかせてくれた。今回のはふつうの綿製だった。

しかし、次に彼女は、やはり綿製ではあっても、裾の長いネグリジェを持ち出してきた。クロードが不満な顔をすると、彼女は、自分の体を抱くようにして震えてみせた。夜になるともっと冷えるから着ろと言いたいのだろう。

体を少しずつ持ち上げながらそれを着せていくフェイエラに、逆らうほどの体力も残っていなかったし、この部屋に男っぽい衣類などないこともわか

っていたので、クロードは黙ってそれに従った。

そのあと、膝あたりまである綿の靴下もはかされた。

フェイエラはそこで、暖炉に火を入れ、いったん部屋を出て行った。

しかし、数分後には、温かいスープの器を持って戻ってきた。そして、自らスプーンを持ち、根気よくクロードの口に運んだ。

あごはまだ痛んだが、クロードはそのスープをほとんど平らげ、食べ終わると、またすぐ眠りに落ちた。

傷の回復には思った以上の時間がかかり、毎日がゆっくりと過ぎていった。

フェイエラは、毎日、マークがまだ戻っていないことを伝えてくれ、クロードは、とりあえず、それに安心した。

一日おきにパコが暖炉の薪を運んで

きたが、言葉が通じないことがわかっているせいか、なにも話しかけてはこなかった。ただ、その大柄のメキシコ人がこちらを見る目つきに、クロードはおびえた。

その数日、クロードは泣き暮らしていた。フェイエラがいるうちはまだいいのだが、ひとりになると心細く、それ以上に、なぜ自分がこんな目に遭わなければいけないのかという思いに、涙があふれてくるのだ。

しかし、傷が癒えてくるにしたがって、そんな悲しみより、退屈さの方が勝ってきた。

そこでクロードは、マークの部屋に本があったのを思い出し、フェイエラにそれを持ってきてくれるように頼んだ。

異なる三つの言語と、それにも増し

て身振り手振りが飛び交ったあげく、
やっとわかってもらえ、フェイエラは、
一冊の分厚い本をとってきてくれた。

それはすてきな詩集で、クロードは、
一行一行をかみしめるように読んだ。
夢中になったクロードは、あっという
間に全巻を三回は読み通していた。

そこで、その本は枕元に置いたまま、
フェイエラにもう一冊持ってきてくれ
るように頼んだ。その後も何度かそれ
が繰り返され、クロードは毎日、読書
に明け暮れた。

これらの本を誰が買いそろえたのか
はわからないが、少なくともマークで
はないだろうとクロードは思った。あ
の殺伐とした男が、こんなロマンティ
ックな文学を好むとはとうてい思えな
い。

もちろん、クロード自身は、それら
の本を大好きになった。

フェイエラに絶対安静を強いられていた2週の間、二度ほど雪が降った。ただ、まだ積もるほどの季節ではないらしく、その日のうちに溶けたようだ。

看護婦フェイエラは、その2週間が過ぎたところで、やっとベッドから出ることを許してくれた。

最初は、彼女に腕を持ってもらって床に立った。彼女は、思っていた以上に力持ちらしく、クロードがふらついて全体重を預けてもびくともしなかった。

きっと彼女は、力仕事もいとわない働き者にちがいない。身長はたぶん、平均的な女性より低いのに、彼女に支えられていると安心できた。もっとも、クロードの方が男の平均をはるかに下回り、彼女より若干小さいということはあるが。

いずれにせよ、フェイエラは、まちがいなく優秀な看護婦だった。

毎日、クロードの体をきれいに拭いてくれ、彼女自身が採集して煎じたらしい薬草を傷に塗ってくれた。

インディアンはみんな、自然療法に秀でているという話は耳にしていたが、今、クロードはそれを信じていた。

彼女の薬草のおかげで、アザはきれいに消えていき、腫れもほどなく引いた。あれだけ腫れ上がっていた膝も、すぐにいつもの状態に戻った。

最も手こずったのは睾丸で、何日間か腫れが引かず痛みも残った。しかし、それも、今ではもとどおりの小さなサイズになっている。

フェイエラの手厚い看護は、外用薬だけでなく、内面にもおよんだ。

クロードは一日に何度か、やはり彼女が煎じたらしい薬草入りの苦いお茶

を飲まされた。そして、そんな時、彼女は、長い時間ベッドのかたわらに座り、クロードの愚痴を聞いてくれた。もちろん、その意味はほとんど伝わってはいなかっただろうが、クロードが泣き出すと、やさしく抱きしめてなぐさめてくれた。

病人用便器を取り替えるのさえ、いやな顔ひとつせず献身的につくしてくれるのだ。

傷が治ってきても、例の薬草茶だけはつづいていたので、クロードは、これはいったいなにに効くのかときいた。すると、その質問を理解したらしい彼女は、スー族の言葉でなにか説明した。

クロードには、やはり、なにを言われているかわからなかったが、その中に「ウインクテ」という言葉が何度も出てきたので、それがきつと、あの薬

草茶の名前なのだろうと思った。

そのウインクテ茶はひどく苦かったが、時に微妙に味が変わった。毎日飲むうち、そんな風味のちがいもわかるようになり、クロードは、最初苦いと感じるコーヒーに慣れていくように、そのお茶が好きになっていった。

男の服が着たいというクロードの要求がわからないのか、それともわかっていても無視しているのか、フェイエラは、毎日女物を出してきて、クロードに着せた。

あまりごてごてせず、色も地味なホームドレスが中心だったが、胸元には小さな花柄の刺繍が入っていたりする。そして、どんな服を着ても、髪にはリボンが飾られた。

下着も、あいかわらず、やわらかくてすべすべの女物を着つけている。

クロードが、いくらそんな必要はないだろうと言っても、パッド入りのコルセットかブラジャーも着けさせられた。

それどころか、フェイエラは、いかにもインディアンらしく、布に雑穀を入れて縫い合わせた胸型のつめものをつくってきた。どうやらパッドではボリュームが足りないから、それをカップに入れろということらしい。

もちろんクロードはそれに困惑し抵抗したのだが、フェイエラはがんとしてそれを通そうとした。

言葉が通じないこともあり、一方でフェイエラの献身的な世話に感謝していたこともあり、けっきょく、クロードはそれらを受け入れた。

その結果、クロードは、いよいよ女にしか見えない姿で毎日を送っていた。

マークが旅に出て、おおよそ1ヶ月が経過していた。そして、谷間には、雪が積もりはじめていた。

あの無法者がいないことに感謝しつつも、クロードは彼がどうしているのか、いつ帰ってくるのか、それが気になった。雪で遭難して命を落としているのではないかと心配にすらなった。

あれだけひどい目に遭わされたというのに、クロードは知っている人間が死ぬことを望んではいなかった。

マークが帰れば、自分が殺される可能性だってあるのに、雪がひどくなる前に戻ってくればいいなどと案じていた。

パコとフェイエラの間で交わされるスペイン語の会話は理解できなかったが、聞いているうち、どうやらマークが、クロードに代わるサドルブライド

を探しに行っているらしいことだけはわかった。

しかし、それにしては帰りが遅い。

雪山での遭難ではないにしても、彼はお尋ね者なのだから、どこかで撃ち殺されている可能性もあるわけだ。クロードはそれを、本気で心配しはじめていた。

ちょうど1ヵ月が過ぎた日。これまでの降り方とはちがい、外が吹雪き始めた。おそらくこれが何日かつづき、谷は雪で埋まるのだろう。

そう思いながら、窓の外を眺めていた午後、その吹雪の中から、馬に乗ったマークが戻ってきた。

第9章

その姿を見て、あらためてあの夜の
ことを思い出したクロードは、恐怖に
震えた。そして、あわててベッドにも
ぐり込み、かけ毛布をかぶった。

身を隠そうにも、それ以外逃げる場
所はないのだ。

部屋の鍵はパコが管理し、クロード
が逃げ出せないようにしていたし、フ
ェイエラも、出入りの際には必ず鍵を
かけている。

ベッドの中で体を丸めたクロード
は、それでも不安で、枕を抱こうとし
た。と、枕元に置いてあった例の詩集
に手が触れた。クロードは、まるでそ
こに載っている大好きな詩たちにすがる
とでもいうように、その本を握りし
め震えていた。

夕方近くなったところで、ドアの鍵

が開く音がした。

クロードは恐る恐る毛布から顔を出し、薄目をあけて盗み見た。この時間なら、食事の用意をしたフェイエラかもしれないと思ったのだ。

しかし、その期待は裏切られた。開いたドアの向こうに立っていたのは、まぎれもなくマークだった。

マークはまだ、長旅から帰ったままの薄汚れた格好で、ひどく疲れて見えた。ひげは伸び放題だし、髪は汗とほこりでごわごわに固まっている。

けだるそうに部屋に入ってきたマークは、面倒だがどうしてもかたづけなければならぬ仕事に直面しているとでもいうように、しばらくこちらを見ていた。そして、大きなため息とともに、椅子を引き寄せ、そこに腰掛けた。

キルト製のベッドカバーと毛布にくるまったクロードは、寝たふりをした

まま、薄目の間から、そんなマークの様子をうかがっていた。

マークが椅子を置いた位置から察するに、彼自身も、あまりこちらに近づきたくないと感じているようだった。

「……おい、眠ってないのはわかってるんだぞ」

マークは、怒ったように言った。

「話がある。ちゃんとこっちを向けよ」

恐ろしさと恥ずかしさの間で迷ったあげく、クロードは、かけ毛布をどけて身を起こした。

思ったとおり、マークは、クロードが着ているものを見て、驚いた顔をした。

見られてしまった以上、今さら隠してもしかたないと考え、かけ毛布から出たクロードは、ベッドのへりに腰掛けた。

「まだそんな格好をしてるのか？」

冷たい声音と、さげすみの目で、マークが言った。

それにびくつきながらも、クロードはなんとか反論した。

「他に、着るものもないですから。フェイエラは、こんなものばかり着せようとするし」

マークはそれにかすかにうなずいた。とりあえず、納得はしたようだ。

「まあ、それは、あの女が従順だということだな。前に俺が言いつけたことを、後生大事に守ってるわけだ」

「前」というのは、彼が、クロードの正体を知る前という意味だろう。

「もし、もっとまともな服を用意してもらえるなら、僕だって、すぐにでも着替えたいです」

クロードはそう言った。今着ている服で、ある意味、じゅうぶんまともに見えるのだが。

「べつに僕は、好きでこんな格好をしてるんじゃないですから」

「じゃあ、なぜあんなことをした？」

マークは、クロードの顔を見返しながら、鋭い語調できいてきた。

「俺が『お嬢さん』と呼んだとき、なぜ、そうじゃないと言わなかった？」

「言おうとしました！」

クロードは涙をためて、言い返していた。

「でも、言えなかったんです。あなたが恐ろしくて」

「それにしたって、『僕は男だ』と言うだけただろう。お前の方から言わないで、俺にわかったと思うのか。体はそんなに小さいし、その上、そんなに……かわいい顔をしやがって。俺が女だと思いこんでるのを、お前は、一度も否定しなかったじゃないか」

「だから、あなたが恐ろしかったんで

す！」

クロードの言葉は、ますます泣き声になっていた。この期におよんで「かわいい」などと言われている自分が、情けないせいでもあった。

「最初、急いで逃げてるうちは、なにか言うすきもないほど、あなたは張りつめてた。僕に対しても、ただ脅しつづけていた。その間にあなたは、ますます僕を女だと思いこんだようだった。そんなあなたに、もし男だなんて言ったら、あなたはきっと、僕を撃ち殺すだろうと思ったんです。特に、あれ以来……つまり、その……あなたのものをくわえさせられたとき以来、なおさらそう感じて、それが恐かったんです」

その言葉に、マークはしばらく黙ったまま座り、ドレス姿で泣いている少

年を見つめていた。

……今、こいつの言ったことはまちがいではないだろう。

たしかに、もし自分のものをしゃぶっているのがサドルブライドでなく男だと知ったら、そのとたん、俺は前後不覚になって、こいつを撃っていたにちがいない。

「しかし、お前も、よく男のものをくわえる気になったな」

マークは、気まずい思いできいた。「そうしなければ、殺されると思ったから……」

少年は、しゃくり上げながら答えた。「がまんして、何度かしてるうちに、いつかはあなたが、それに飽きるんじゃないかとも思ったし……。そしたら、逃がしてくれるんじゃないかって……」

そこでマークは、ふたたび黙り込み、

頭をめぐらせた。

……たぶん、こいつは正直に言っているのだろう。べつに、最初からだまそうとしていたわけではなさそうだ。

だとすれば、たしかに、誤解した俺の方にも非はある。

それにしても、こいつには、男としてのプライドはないのか？ 男としての勇氣はないのか？

……で、こいつをどうする？

こんなみじめなガキを俺の手で撃ち殺すなんて、気が滅入るだけだ。

いっそのこと、あのインディアン女に言いつけて、食事に毒でも盛ろうか。

でも、さっきパコから聞いたところによると、あの女はこいつとずいぶんねんごろになっているようだ。

おそらく、素直に言うことはきかないだろう。

だとすれば、俺は、あのインディア

ン女も殺さなければいけなくなる。

そうならば、この冬、俺とパコは、女なしで過ごすことになる。

いや、それ以前に、あの女を殺せば、パコが黙っていないだろう。

けっきょく俺は、俺以外の三人すべてを殺さなければいけなくなるわけだ……。

立ち上がったマークは、すすり泣く少年を見ながら、心を決めた。

この冬、四人が食うだけの食料はある。今、あわてて始末をつける必要もないだろう。

「……ところで、お前、名前はなんていうんだ？」

「クロードです」

「……ふ、クロードってか」

まるで女にしか見えないこの人物の男っぽい名前を聞き、マークの嫌悪感がまたぶりかえした。

「……まあ、いい。ク、クロード、もう泣くな。今ここで、お前を殺そうとは思ってない。この前、ひどい目に遭わせたことも、まあ、謝っておこう。なにしろ、あの時は、俺も動転してたからな。だが俺は、お前をずっと生かしておくとも言っていないぞ。なにしろ、お前は、いろいろと知りすぎた。少なくとも、このまま逃がしてやるわけにはいかない。お前の言葉から、この隠れ家がかぎつけられないともかぎらないしな。春までは、このままここに置いてやる。その間に、どう始末するか考えることにする」

こちらに耳を傾け、少年が泣きやんだことに、不思議な安堵感を覚えながら、マークはつづけた。

「服のことは、しばらくそのままがまんしてくれ。お前が着られるものは、他にないからな。いずれ、フェイエラ

になにか縫わせることにしよう。お前にもっと似合う……というか、まあ、本来のお前に合ったものをな。パコか俺の服が使えれば問題ないんだろうが、俺たちは、服なんてそんなに持ってないし、だいいち、サイズもちがうだろう」

「わかりました。もう少し、こうしています」

クロードは、着ているドレスのしわを伸ばし、鼻をすすりながら答えた。

それは、さほどいやなことだと感じなかった。こんな服で人前に出るというのなら話はべつだが、ここにいるかぎり、他の誰かに見られることもない。それに、着心地も悪くなかったし、暖かだった。

「よし、話は決まった。もしお前が信用できると思えば、春には逃がしてや

ってもいい。その時までには、フェイエラに新しい服も用意させよう」

「ありがとうございます」

クロードは、つぶやくように礼を言っていた。

「ああ、じゃあ、そろそろ行かないとな」

マークは、言うとすぐに、ドアへと向かった。あきらかに、ここにいるのが気まずいという感じだった。

「あの……」

そんなマークを、クロードは呼び止めていた。

「……ん？」

「新しいサドルブライドは、見つかったんですか？」

自分に代わる誰かがいたのかどうか、気がなって、クロードはきいた。いたのだとすれば、その女性がマークのひと冬のセックス玩具になるわけだ。

「そんなこと、誰に聞いたんだ？」

マークは一瞬不思議そうな顔をしたあと、答えた。

「そうか。パコのやつだな。……いいや、見つかってない。ここの場所を知られたくないから、近くの町からさらってくるわけにはいかん。それで、遠くまで行ったんだが、うまくいかなかった。最後は売春婦を雇おうとも思ったが、まともな女で、うんと言うやつはいなかった」

マークはそう言ってから、なぜか自虐的に笑った。

「ふふ、少なくとも、お前ほどの美人はな」

マークがサドルブライドを連れてこられなかったことに、クロードはほっとした。他の誰であれ、自分と同じような目には遭わせたくないと感じたのだ。しかし、そのせいで、ニッコリと

笑ってしまった。

「……あっ、すみません」

こちらをいぶかしげににらんだマークに謝ったあと、誤解されては困ると、あわててつけ加えた。

「あの……、女の人をさらってきて、おもちゃにするなんて、よくないと思ったから……」

言ってから、しまったと思った。

まだこちらを見ているマークに、クロードは緊張した。

しかし、予想に反し、マークはちょっと笑った。

「ふふ、俺はそういう人間なんだぜ。だからこそ、無法者なんて呼ばれてるんじゃないか。それは、お前だって……」

そこまで言ったところで、マークは、なんだか気まずそうに言葉をとめた。そして、別のことを口にした。

「なあ、そんな格好をしているお前を、クロードとは呼びにくいぜ。それに、冬の間、俺の仲間が、突然やって来ないともかぎらない。そんな時、お前を『クロード』なんて呼んだら、おかしいだろう。パコは、余分なことはしゃべらんだろうが、他のやつらは信用ならない。俺だって、変なうわさは立てられたくないからな。仲間が来た時のことも考えて、フェイエラが新しい服を作るまで、仮の名前で呼ぶことにしないか？」

誘拐や性的暴行について非難がましいことを言ってしまい、マークが激怒するのではないかとびくびくしていたクロードは、とりあえずほっとし、うなずいた。

「え、ええ、そうですね」

と、マークが、なにか待っているというようにこちらを見てきた。

なんのことかわからず、クロードが首をかしげると、マークは言った。

「だから……、お前をどんな名で呼べばいいんだ？」

「あ、ああ」

クロードは、その名を自分で選ばせてくれるらしいことに、ちょっと驚きながらうなずいた。

とはいえ、そんなことは考えたこともなかったから、クロードはあせった。これまで、ファーストネームで呼ぶほど親しくなった女性なんて、数えるほどしかいない。それに、こんなことに自分の名前が使われるなんて、彼女たちだってうれしくないだろう。

「……キャロライン」

クロードはためらいがちに言っていた。

とっさに思いついたのは、幼い頃に死別した母の名だった。

マークは、こんな名を気に入るだろうか？

と、その無法者はうなずいた。そして、部屋を出て行きながら、背中越しに言った。

「おやすみ、キャロライン」

その言葉に、思わず、「キャロライン」はほほ笑んでいた。

第10章

それから数日、クロード……いや、キャロラインは、マークの気が変わらないよう、注意を払って過ごした。一方で、部屋に入ってくるたびに前以上にいやらしい目つきで見てくるパコを、避けるように過ごした。

やがて、キャロラインは、日中のほとんどをフェイエラとともに過ごすようになった。雪が深くなって逃げられる心配がなくなったと思ったのか、マークが部屋の監禁を解いてくれたからだ。ドアに鍵がかけられることはなくなり、屋敷の中を自由に動き回れるようになった。

ヒールで歩くのはまだ苦手だったが、それは、歩きにくいというより、まだ膝に多少の痛みが残っているからだった。

キャロラインは、フェイエラが料理や掃除をするのを手伝おうとしたのだが、彼女はそれをよしとせず、キャロラインを椅子に座らせた。そういう仕事は女がやるのがスー族の伝統、男の子は座って見ているとでも言いたげだった。

とはいえ、キャロラインは、前以上に少年には見えなくなっていた。毎日、女物の服を着つづけていることで、日々、その服が体になじんでいく気がする。そして、キャロライン自身、ここにとどまる以上、それを受け入れるしかないと思い、着こなしに気を配っていた。

フェイエラも、キャロラインを女の子らしく装わせることを楽しんでいるように見えた。

体の傷はすっかり癒え、塗り薬などはもう必要なくなっていた。でも、例

のウインクテという薬草茶だけは、未だに飲まされていた。

というか、今では、キャロライン自身がその味をすっかり気に入ってしまい、一日に何度か決まった時間にそのお茶を飲むのを楽しみにしていた。

それをおいしいと感じるキャロラインは、他の人にもいれてあげようとしたのだが、なぜかフェイエラは強く首を振り、このお茶はキャロラインだけのものだと、身振りで示した。

当初、マークは、キャロラインを避けているように見えたが、食事の時などは、ふつうに話しかけてきた。

雪が深くなったせいで、男たちも屋敷の中に閉じこめられることになった。しかし一方で、毎日、屋外に出なければいけなくもなった。暖炉や料理に使う薪運びが必要だったし、パコた

ちの住む離れや、家畜小屋との間の雪かきもしなければならぬからだ。

しばらくすると、フェイエラは、キャロラインを女の子として認めていくとでもいうように、少しずつ家事を手伝わせるようになった。ことにキャロラインは、料理するのが好きで、上達も早かった。

食事の時、男のどちらかが味をほめてくれたりすると、キャロラインとフェイエラは、ふたりだけにわかるほほ笑みを交わし合った。

12月の終わり頃には、四人とも、そんな暮らしにすっかり馴染み、毎日が淡々と進んでいった。そして、その頃になると、マークは、キャロラインと二人だけで過ごす時間を持ちたがるようになった。

「どうせなら、仲良くやっていく方がいいだろ」とマークは言い、キャロ

ラインも、それにうなずいた。

じつは、キャロラインが読書好きなのに気づいたマークが、本を読んで聞かせてくれと言い出したのだ。ほとんど字が読めないマークにとって、それは、楽しいことに思えたようだ。そしてそれは、キャロラインにとっても、けっしていやなことではなかった。

毎晩、他のふたりが離れに去ると、マークは暖炉の前の長いすに寝そべり、キャロラインは暖炉のそばのひとりかけの椅子に腰掛けて本を読んで聞かせた。

最初、キャロラインは、お気に入りの詩集を選んだのだが、マークの方は、言葉のあやを楽しむのには向かなかつたらしく、すぐにわけがわからないという顔をした。

彼はけっして頭が悪いわけではない。それは、キャロラインにもすぐわ

かった。ただ、一度もまともな学校教育を受けてはいなかった。

それで、あれこれ読んでみて、マークが関心を持てる種類の本を見つけ出し、ふたりの夜の読書会は、楽しいものになっていった。

ときどき、読んでいる最中に、マークがおかしな目で自分の方を見ているのを感じたが、キャロラインは、それを気にしないことにした。マークといっしょにいることに前ほど緊張しなくなっていたキャロラインは、せっかくのそんな雰囲気壊したくなかったからだ。

キャロラインの男物の服を作るという話については、遅々として進んでいなかった。

マークは約束通り、パコの通訳も借りながら、フェイエラにどんな服を作

ればいいのかを説明していた。フェイエラも、それにうなずき、数少ない手持ちの中から生地を選び、マークに見せて了解も取っていた。

昼間も絶え間なく働いている彼女は、裁縫仕事をやるなら夜しかないといい、いずれ、キャロラインにも手伝ってもらうことになるとも言った。

ところが、冬の間は、衣服の修繕や何やかやで、つくろいものが多く、そちらが先になった。キャロラインの新しい服にはなかなか手がつかないようだった。

雪のせいで完全に道が途絶する前に仲間がやってくるようなこともなかったので、マークも一度言ったきり、それ以上の催促はしなかった。

フェイエラは、忙しい中、時折、シャツとズボン用の生地を取り出したり、形紙に合わせて切る様子を見せた

りしていたが、なかなか完成には至らなかった。

そうこうするうち、1月も半ばになり、キャロライン自身、そのことを問いただすのを忘れがちになった。マークもあれっきりなにも言っていなかったから、そのことが話題にのぼることすらなくなっていた。

フェイエラは作業を中断したままで、結果として、キャロラインがこの冬の間中、女装して過ごすことが、暗黙の了解になっていた。

どのみち、とらわれの身であることに変わりはないのだ。四人でいるかぎりは、どんな格好をしていようがいいだろうと、キャロライン自身も思っていた。

キャロラインは幼い頃から、夜、よく夢を見る方だ。それは、今も変わら

ない。

ワルたちにいじめられたり、殴られたりした過去の経験が悪夢としてよみがえり、うなされることもしばしばだった。

ある夜、キャロラインは、やはり過去の経験に基づく夢を見た。ただし、それは初めて見る夢だった。そして翌朝、起きてみると、パンティの中が濡れていた。寝ているうちに射精したことはまちがいがなかった。

その夢の内容をはっきりと覚えていたキャロラインは、それが恥ずかしくて、その日一日、マークを避けつづけた。夜の読書も、疲れていることを理由にこたわった。

じつは、それは、マークのcockをしゃぶっている夢だったのだ。

そんな夢で夢精してしまったということは、今、キャロラインが、そんな

行為に欲望を感じているということに他ならないだろう。

そう考えたことで、キャロラインは、否応なく、自分の中のある変化に気づかざるを得なかった。

今も、春になったら男の暮らしに戻りたいという希望に変わりはないが、どうやら、この何週間かのうちのどこかで、自分自身のことを女だと見なしはじめたようなのだ。

ある意味、それは当たり前かもしれないと「彼女」は思った。

毎日、ドレスを着てメイクし、「キャロライン」と呼ばれつづけているのだ。自分のことを男だと思ふより、女だと思った方が、現実的に、ずっと暮らしやすいのだ。

意識しないでもそうなってしまふのなら、もういっそのこと、積極的にそう考ええる方がずっと楽かもしれないな

い。

これが一生つづくわけではない。春までのことなのだ。その時には男に戻れるのだし、今は、そんなことは忘れてしまってもかまわないだろう。

そう考えると、かわいい服を選んで着ることが、なんだかすごく楽しいことに感じられた。メイクやアクセサリ一選びにも熱が入った。

そんなふうに気持ちが変わったことを、キャロラインはひとり胸にとどめ、誰にも言わなかったのだが、フェイエラだけは、彼女の変化に、すぐ気づいたようだ。

そんな変化のせいかな、2月は楽しい日々がつづき、キャロラインは、毎日の暮らしに完全に満足していた。

マークとの行為の夢もひんぱんに見るようになっていた。どういうわけか、

夢精まで伴うことは少なくなったが、そんな夢を見ると、前以上に興奮する実感があった。

キャロラインはそんな夢に、罪の意識を感じるのはやめることにした。それはきっと、女性として暮らすことの副作用のようなものなのだ。そして、夢であるかぎりは、誰かを傷つけるようなこともないだろう。そう考え、思い悩まないことに決めた。

フェイエラとの関係も、ますます親密なものになっていた。英語、スペイン語、スー族の言葉……3つの言語をチャンポンにした、ふたりだけに通じる奇妙な言葉ができあがっていき、あとはちょっとしたジェスチュアを加えれば、たいていのことはわかり合えるようになった。その結果、ふたりの間には心から信頼できる友情が芽生えていた。

マークと過ごす夜の時間も、前以上にすてきなものに思えるようになった。毎日、これだけ本が読めて、しかも、新しく手に入れた知識を誰かと共有できるという経験は、キャロラインにとって生まれて初めてのことだった。どうやら、マークもそれを喜んでくれているようで、そんな彼を見ているうちに、いろいろなわだかまりも消え、時にキャロラインは、長いすのマークの隣りに座り、体を寄せて本を読むことすらあった。

そんな時は、ちょっといけないことをしている感じがあるのだが、そのことが逆に、彼女の気持ちをワクワクさせた。

ところが、2月の末になると、そんなマークの態度が変わってきた。どうやら、家の中にずっと閉じこもってい

ることに欲求不満を募らせているらしく、毎日イライラとし、酒の量も増えてきたのだ。パコが、昼間から、いっしょになってがぶ飲みするせいでもあった。

「もう、こんなところはうんざりだ！」

マークは酒に任せて、わめいた。

「まるで壁が迫ってきて、つぶされそうだ！」

キャロラインは、彼の気持ちを紛らせようとしたが、本を読んでも、集中力がなく、すぐに飽きてしまう。

例のウインクテの時間に、フェイエラに相談すると、彼女はほほ笑みながらこう言った。

「春、来れば、きっと、直ります。そう、あれは、春の病気、ね」

この間、フェイエラからの助言もあり、キャロラインは、マークが喜びそ

うなことをいろいろしていた。

彼が好みそうな料理を作り、本を読むときも、自分の好みはさしおいて、彼の気に入りそうなものだけを選んだ。

そんな中、いつしかマークも、キャロラインのことを話題にするとき、「彼女」という代名詞を使うようになっていた。それが、キャロライン自身の自分は女なのだという錯覚を、さらに拡大していくことにもなっていた。

「彼の方が、前みたいに思ってくれるなら、たぶん、そんなもやもやも晴らせてあげられるのに……」

三つの言語のチャンポンでは、細かいニュアンスは伝わらないだろうとも思い、キャロラインは恥ずかしげもなく言っていた。しかし、そのインディアン女性は、それを正確に理解したという顔でうなずいた。

「ウインクテ」

お茶の名前と、マークへの気持ちがどう関係があるのかよくわからなかったが、キャロラインは、気持ちを落ち着かせろという意味だと思い、フェイエラのアドバイスに従ってそのお茶を口に運んだ。

それから2日後の夜だった。キャロラインの部屋のドアがノックされた。

時間は、すでに深夜。キャロラインは、ベッドに入ろうと、ネグリジェの上に着たローブを脱ぎかけたところだった。

ちょっと不安を感じながらドアを開けると、マークが立っていた。

招き入れるように身を引くと、入ってきたマークは、すぐにドアを閉めた。

「本を、読んでくれ」

ウイスキーの臭いをぷんぷんさせな

がら、マークは、ぶっきらぼうに言った。

うなずいたキャロラインは、彼に椅子をすすめ、ちょっと考え込んだ。

「でも、ここにあるのは、詩集だけ…
…よ」

この部屋には、枕元に置いた例の本しかなかったのだ。

「ああ、それでいい」

マークはまた、ぶっきらぼうな口調でそう言った。

いつも詩集なんて面白くないと言うマークにしては珍しいことだと思ったが、自分が好きなものをいっしょに聞いてもらえるのは、うれしい気がした。

ベッドから本を取り、もうひとつの椅子をマークの近くに寄せて座り、彼女はお気に入りのページを開いた。

「愛しい人のために」と題されたその詩は、愛する女性のために危険な闘

いに挑む騎士を主人公とした叙事詩だった。主人公が熱愛する女性とともに迎えるエロティックな場面も二カ所ほど出てくるが、詩全体を通して、高貴な香りにあふれている。

ところが、キャロラインが読み出してしばらくたったところで、マークは無言で立ち上がり、部屋を出て行ってしまった。入ってきたときには気づかなかったのだが、その手には、半分ほどになった酒ビンが握られていた。

ボタンと閉まったドアを見つめながら、キャロラインは、悲しい思いがした。マークは、この詩のあまりの女々しさに、嫌気がさしたにちがいがなかった。

ため息をつき、ローブを脱いだキャロラインは、その本を握りしめたまま、ベッドの中に入った。

そして、ランタンの灯を消す前に、

もう一度その詩を読みたいと感じた。この詩はいつも、彼女にいやなことを忘れさせ、すてきな夢へと導いてくれる。

本を開いたところで、自分の胸元が目に入り、キャロラインは、さっきマークが来たとき、ローブを着ていてよかったと思った。このネグリジェ姿は、いかにもセクシーなのだ。

そんなふうを感じたことにくすっと笑い、彼女は詩を読み始めた。主人公たちが愛を交わす場面までくると、いつものように股のつけ根あたりがむずむずした。

……もし、マークがこのネグリジェ姿を見たら、どう感じただろう？ もし、自分が、もともと女として生まれていたなら、売春婦たちがするのと同じように、マークを満足させてあげられたのに……。

つい、そんなことを考えていた自分に気づき、キャロラインはふたたび詩集に目を落とした。ハンサムな騎士が必死に愛を得ようとするその詩を、彼女は、完全に相手の女性の立場に身を置いて読んでいた。

読み終えたところで、ため息をつきながら本を閉じ、ランタンを消すのも忘れて目を閉じた。その美しい物語の余韻を楽しみたかったのだ。

しかし、彼女の頭の中に広がった空想の世界は、一瞬にして、荒っぽいノックの音でかき消された。

ちょっと舌打ちしながらベッドを出た彼女は、そのせいで、からかってやりたいような気にもなり、今回はローブを着ずにドアに近づいた。ネグリジェのまま、ドアを開けたのだ。

その姿を見たたん、マークは、キャロラインの反応も待たず、押すよう

にして部屋の中に入ってきた。そして、部屋の真ん中あたりで、彼女の腕をつかんだ。

酒のせいで目を赤くしているのも、手に酒ビンを持ったままなのもさっきと変わらなかったが、その酒ビンの中身が目に見えて減っていた。

そのビンをかたわらのテーブルに置くと、マークは、キャロラインの顔を見つめてきた。その目つきに当惑したキャロラインは、視線をはずし、床に目を走らせていた。

そして、やはり、ネグリジェの上にローブを羽織るべきだったと思った。

今からでも遅くないと感じた彼女は、そのローブをとろうと、体の向きを変えた。

しかし、今度は両腕を持たれ強引にもとに戻された。

キャロラインを自分の方に向かせ、マークはその美しさに見入っていた。

その姿は、女にしか見えなかった。着ているものも、むしろぶりつきたくなるほど女らしい。

前の部分もちょっとした出っ張りさえなく、男だと思えるところは、どこにもないのだ。

奇妙なことに、マークは最近、こんな場面ばかり夢に見ていた。さらに今は、ウイスキーが、抵抗感を薄れさせていた。

その上、夢に見たとおりのキャロラインのネグリジェ姿を目の当たりにして、最後に残った抵抗感も消えてしまった。

「お前は、俺のサドルブライドだよな。ちがうか？」

キャロラインの腕を放したマークは、そう言いながら、その手でベルト

をゆるめていた。

酔っているせいでちょっと手こずったが、間もなくベルトとボタンがはずれ、ズボンが床に落ちた。

彼のコックは、すでに岩のように堅くなり、上向きに反り返っていた。

マークの言葉にあ然として立ちつくしていたキャロラインは、下に落ちたズボンにつられ、その驚くほど怒張したコックを見た。そして、思わず身震いしていた。

もちろん、また、この男のコックをしゃぶるなどということは避けたかった。でも、ことわるのは恐ろしい。

この間いくらうちとけてきたとはいっても、彼が人殺しであることは変わらないのだ。ことに、これだけ酔っている彼が激怒すれば、今度こそ殺されかねない。

でも一方で、その酔っているということも、よく考えなければならない。もし、そんなことをして、明日の朝、彼が正気になったとき、今度は、したこと自体に腹を立てるかもしれないのだ。

でも、迷っているひまはなかった。

彼女はうなずき、そのコックに手を伸ばしていた。

「え、ええ。ぼ……あたしは、あなたのサドルブライドよ。いきり立ったマッド・マーク・マーフィーをいやしてあげるのが、あたしの役目……でしょ？」

キャロラインは、酔っぱらった彼の機嫌をとるようにささやいていた。

第11章

そのサドルブライドの言葉にうなるような声を上げ、マークは彼女を抱き上げると、ベッドの上に寝かせた。

ズボンとブーツをそそくさと脱ぎ、自らもベッドにのって、従順に横たわる彼女の胸のあたりをまたぐように膝立ちする。

そして、体を前に傾け、すでに口を半開きにして待っている彼女の顔めがけて、堅いコックを突っ込んだ。

この何週間か、毎晩のように夢に出てきては彼を悩ませつづけた少年……いや、女の、やわらかな唇が、マークのたぎるような性欲を受けとめた。

マークの欲望がそうとうたまっていたことはまちがいがなかった。唇や舌を使った刺激をさほどする間もなく、そ

の腰が激しく前後し、コックが口の中を突いた。そしてすぐに、大量の精液が、次から次へとどのどに向かって噴射された。

キャロラインは、マークが心から満足できるよう最善をつくそうとした。コックの動きに合わせて唇を絞め、その大量の精液をこぼさず、すべて呑み込んだ。

彼女は、なにより、マークの荒ぶる心を鎮めたいと考えていた。

だから、マークがオルガスムに達し動きを止めたあとも、最後の一滴まで搾り取るように、やわらかくなっていくコックを吸いつづけた。

そのおかげで、満足したらしい酔っぱらいの無法者は、ぐったりしたコックを引き抜くと、そのまま、キャロラインに覆い被さるように身を投げ出した。

そして、ほどなくいびきをかき始めた。

男の股のあたりに下敷きになっていた少女は、そこからなんとかはい出すと、ちょっと迷ったようだったが、けっきょくは、男の隣に寄り添うように身を横たえた。

翌朝、目覚めたキャロラインは、目の前にマークの寝顔があったことにちょっと驚いた。そして、ベッドサイドにフェイエラが立っていたことにさらに驚いた。

彼女は、こちらに向かって手をさしのべると、どうやら無意識のうちに抱きしめているらしいマークの腕の中から、キャロラインを救い出してくれた。

乱れたベッドから出ると、キャロラインは、マークが脱ぎ散らかした衣類を集めるフェイエラを手伝った。

そして、ネグリジェの上からローブを羽織り、汚れ物を持ったフェイエラとともに、洗濯場まで行った。

この頃では、フェイエラと顔を見合わせると、まるで女どうしのようになくすくす笑いを交わし合うのがつねになっていたが、今朝のフェイエラは、いつも以上に、からかうような笑顔を向けてきた。そのせいで、キャロラインの方は照れ笑いになった。

もちろん、キャロラインは、好きでマークのものをしゃぶったわけではない。でも、さっきのマークの満足そうな寝顔から察するに、たぶん、彼はもう、おかしい荒れ方はしないだろう。それにたぶん、男にそんなことをされているという抵抗感も、薄らいだにちがいない。

そう思うと、なんだかうれしいよう

な気分になった。だから、洗濯するフェイエラに、照れながらも、ゆうべ起こったことを弾んだ口調で話していた。

「ウインクテ」

フェイエラがまたそう言い、朝のお茶の時間が始まった。

濃いめにいれたそのお茶は、口の中から、マークの精液の味を洗い流してくれた。

ゆうべ、マークがイッた時、キャロラインは、その味も臭いも、前ほどいやだと感じなかった。でも、翌朝の息にその臭いが混じるのは、やはり気分のいいものではなかった。

お茶を飲んでいると、マークが部屋を出て、自分の部屋に向かう足音が聞こえてきた。

それでキャロラインは、今のうちに部屋に戻って着替えようと考えた。

その時、キャロラインが思っていたのは、酒がさめて正気になったマークが、ゆうべのことに腹を立てていなければいいがということだった。

そのせいかどうか、彼女が今日選んだのは、手持ちの服の中で、最も多くリボンやレースが使われた、いちばん女の子っぽい一着だった。

以前、この服を着た時には、胸に例のつめものを入れなければならなかった。だから、今回もそうしたのだが、なんだか胸がきつい。

それで、抜いてみたら、服はすんなりフィットした。ブラジャーのおかげかもしれないが、ドレスの胸には、かわいいふたつのふくらみもある。おまけに、コルセットもつけていないのに、ウエストも細く見えた。

……こんな服ばかり着ているせい

で、体型が変わってきたのだろうか？

キャロラインはしばらく首をかしげて考え込んでいたが、やがて肩をすくめた。

なんにしても、かわいい服が楽に着られるのは、ありがたいことだ。

自分の部屋に戻ってもう一度寝たらしいマークが起き出してきたのは、昼近くだった。それでも二日酔いが残っているらしく、顔をしかめてうなり声を上げていた。

彼は、ゆうべのことについては、ひとことも触れなかった。それで、キャロラインは、もしかしたら酒のせいで、あんなことがあったこと自体、忘れているのかもしれないと思った。

夕食が終わると、マークは、この頃いつもそうしているように酒を飲み出し、「本を読んでくれ」とも言わなか

った。

それでキャロラインが自分の部屋に戻っていると、日没後1時間たった頃、またドアがノックされた。

じつのことを言えば、彼女も、一方でそれを予測していた。だから、例の大好きな詩や、他にも、気持ちを昂ぶらせてくれる官能的な詩を何編か読んで、心の準備をしていた。

ネグリジェも、ゆうべのものよりずっと露出の多いものを身につけていた。

入ってきてそんな彼女を見ると、マークは、入り口に立ったまま、彼女の頭を自分のコックへと押しつけた。

そこですぐ1回目をすませたのだが、どうやら今夜のマークは、そんな性急な行為だけでは満足しなかったようだ。終わったとたんに、また、それ

が堅くなって立ち上がってきた。

そこでマークは、キャロラインの体をやさしく横抱きし、第2ラウンドのためにベッドまで運んだ。

そして、今回はすべてキャロラインに任せるとばかりに、服を脱ぎ、ベッドの上に大の字に身を投げ出した。

キャロラインは、なぜかそれをうれしいと感じた。

だから、時間をかけて、そのコックをなめ、しゃぶり、くわえた。彼女の口の中で、ふたたび嵐のような噴出が起こるまでに、たっぷり1時間近くがたっていた。

あごが痛んだが、キャロラインは、マークをもう一度、思う存分イカせられたことに、自分自身、大きな満足を感じていた。

……これは、殺されるのが恐くてやってるんだから。

彼女は、心の中でそうつぶやいたが、彼女自身、もうそれを信じてはいなかった。

彼女の中にわずかに残る「クロード」の痕跡が、言い訳を必要としたというにすぎなかった。

マークのものは、すでにやわらかくなっていたが、それでも、キャロラインの手が握ると、ぴくぴくとそれに応えた。

キャロラインはそれを持ったまま、マークの厚い胸に頭を預け、太い腕に包まれて眠りについた。

翌朝、毛布から出た顔にふれる冷気のせいで、キャロラインは目を覚ました。でも、もう片方の頬の下に熱い肌を感じ、とたんに幸せな気分になった。筋肉の盛り上がるマークの体に身を預けているのは心地よかった。男の体か

ら発する熱が、彼女を包み、守ってくれている気がした。

ちょっと首をもたげて、マークの顔を見ると、まだぐっすりと寝入っているようだった。それで彼女は、ちょっと毛布を持ち上げ、その下をのぞみた。

と、思ったとおり、朝立ちしたマークのものがそびえていた。

くすっと笑ったキャロラインは、マークの腕に頭を預け、しばらく、その横顔に見入っていた。それでも、マークは起きる様子がない。

そこでもう一度毛布の中をのぞき込んだ彼女は、心の中にむくむくと衝動が湧き上がるのを感じた。その恥ずかしい思いつきを実行に移すためには、例のクロードの痕跡に、また言い訳しなければならなかった。

……だって、彼が目を覚ましたら、そのままベッドを出ていくと思う？

きっとまた、しゃぶれって言うわよ。

キャロラインは、心の中でそうつぶやいた。

……どうせやらなきゃいけないのなら、早めにかたづけちゃった方がいいでしょ。

そこで自分自身にうなずくと、彼女は毛布の下にもぐり込み、さっそく、マークを口に含んだ。

朝だということもあるのか、それは堅く張りつめていた。なんだか、これまでで、いちばん堅くなっている気がした。

根本をきつく握り、乾いた表面をだ液で潤すようにしながら、ゆっくりと頭を上下する。

しばらくそうしたところで、今度は指に力を込めてしごきながら、唇を絞めたまま頭を後ろに引く。「ポンッ」という音がして亀頭がはずれると、次

には辜丸を口に含み、そこをなめた。

マークがもたえるような声を上げ、それに合わせて脚が動いた。そして、キャロラインの頭の上を毛布がすべってはズれた。目覚めたマークが、毛布を足で引き下げたのだ。

「おはよう」

コックからわずかに唇を離し、キャロラインは言った。そして、マークの顔色をうかがうように、おずおずと笑いかけた。

それに対して、マークはなにか言う代わりに、ほほえみ返してきた。そして、もたげていた頭をふたたび枕に預けた。

それをマークの了承のしるしと受け取ったキャロラインは、ふたたび目の前の太い肉棒に気持ちを集中させ、口に含んだ。

彼女はまた、時間をかけ、愛情のこ

もったフェラチオをした。

……ううん、ちがうわ。これは、この乱暴な男に言われて、しかたなくやってることよ。あたし自身が楽しんでるなんて、とんでもない。

今回もまだ、そんな言い訳をしていた。

ゆうべ、満足しているせいか、今回は、マークをイカせるまでに実際に時間がかかった。でも、キャロラインは、それをやりきった。

大きなシャフトを舌でなめあげ、張りつめた肉棒を唇で包んで上下し、最後にはまた、口の中に、精液を氾濫させることに成功した。

「ありがとう」

マークはそう言って、ゆうべ脱いだ服を拾い集めると、裸のまま、部屋を出て行った。

その筋肉のしまったむき出しの尻を

見送っているとき、キャロラインは、なぜかふくらみはじめている乳房の奥がうずくのを感じた。

その日の朝食後、マークはキャロラインに、日常必要なものを、彼の部屋に移せと言ってきた。

キャロラインは、その提案に、密かに心おどらせた。

これまでいた部屋は、今後、単なる衣装部屋になるのだろう。そして彼女自身は今夜から、大きなベッドのある彼の……いや、「ふたりの部屋」で暮らすのだ。

もう、クロードの異議申し立てはどこからも聞こえず、言い訳も必要なくなっていた。

第12章

その春は、しっぽりと過ぎていった。キャロラインは、その瞬間瞬間を心から愛していた。

彼女とマークは、毎日かたときも離れず、夜もおたがいの腕の中で眠った。

マークはけっして、毎晩、要求してきたわけでもないのに、むしろキャロラインの側からすすんでマークの体をなぐさめた。

そして彼女は、新たな夢を見るようになった。

いつも同じ夢……正真正銘の女になったキャロラインが、マークの激しい欲望に応え、マークのものを自らの体に受け入れている夢だ。

そんな夢を見た翌朝、パンティが湿っていることもあったが、どういうわけかそれは、次第に減ってきていた。

ごくたまに一人になったときなど、キャロラインは、マークのことを考えながらマスターベーションした。そんな時も、小さいなりに勃起はするのに、射精に至ることは少ない。そして、それにもかかわらず、以前とはちよつとちがう感じのオルガスムには達するのだ。

いくらそのペニスが小さくとも、マークといるとき、キャロラインはそれを、彼の目に触れさせないように気を配っていた。そして、それを隠すことも以前より容易になっていた。

気のせいかもしれないが、それがさらに縮小してきたようなのだ。ペニスだけでなく睾丸にしても、前より簡単に体の中に押し込めてしまう。その上でペニスを股の間に挟んでしまえば、まったくそれが無いように見える。どうも、男性器全体が小さくなっている

のはたしかなようだ。

体の変化はそれだけではなかった。

胸には、今やはっきりとしたふくらみができている。春の終わり頃には、それは乳房と言っていいものになっていた。

マークの前ではブラジャーやコルセットをとっていなかったから、5月の終わりの段階でも、マークはまだ、それに気づいていなかった。でも、いずれ知られる時が来るだろう。その時の驚いた顔を見るのが楽しみで、キャロラインは、毎日メジャーをあてて寸法を測っていた。

もし、このまま大きくなりつづければ、夏の終わり頃には、例のつめ物もパッドもなしでドレスが着られそう。キャロラインは、そう思い、測るたびにワクワクした。

毎日測っているうちに、胸ばかりでなく、他の部分の変化にも気づいた。たとえば、腰まわりもあきらかに大きくなり、丸みを帯びてきていた。

ちょっと奇妙には感じたが、キャロラインはこれらの変化を、がりがりだった体に肉がついてきたのだと理解していた。

以前とちがい、今は、栄養のある料理を毎日規則正しく食べられる。おそらくそのおかげだろうと考え、太りすぎないように注意しようと思った。

そんな閉ざされた谷間の非現実的な毎日にも、小さな波乱が起きた。マークとパコが、なにか言い争う姿が、ひんぱんに見られるようになったのだ。

しかし、早口のスペイン語の会話だったので、キャロラインにはよくわからなかった。それで、マークに、なに

を反目し合っているのかきいてみたのだが、彼は口を濁して教えてくれなかった。

でも、スペイン語がわかるフェイエラは、ケンカの内容を理解していた。

「パコ、キャロラインの、ここ、ほしいと言ってます」

フェイエラはそう言って、ますます丸みを帯びてきているキャロラインの尻を叩いた。

「えっ？ どういうこと？」

じつは、おおよそ見当はついたのだが、だからこそ、キャロラインは聞き返した。世の中には、後ろの部分でセックスしたがる男がいるのを知らないわけではなかった。売春宿で、それを求めて女の子からいやがられている男を何人も見かけたからだ。

「パコとマーク、それぞれのサドルブライド、交換することよくあります。

私も、パコに言われて、マークと寝た。今、パコ、キャロラインと寝たがってる。マーク、それ、ことわりました」

キャロラインにとっては、最後に語られたことより、その前の言葉の方がショックだった。フェイエラとマークが寝た……突然、心の中に嫉妬の嵐が吹き荒れ、キャロラインはフェイエラをにらみつけていた。

それに対して、フェイエラは、ほほえみ返した。

「それ、前のこと。キャロライン来てから、マーク、私に関心ない。キャロラインだけ見てる」

その言葉に、いくぶんか気持ちが静まり、キャロラインはやっとパコの要求に思いが至り、ぞっとした。

思わず、「あんな不潔で薄気味悪い男にそんなことされるなんて、ぜったいいいや」と口走っていた。そして、言

ってから、ちょっとおたおたした。フェイエラは、毎晩そんな男に抱かれていますのだ。

でも、フェイエラも顔をしかめてうなずいた。

「そう。パコ、悪いやつ。それに、夜も、悪い。私、これまで、何人も男に抱かれた。パコ、その中でも最低。たいていの男、力づくでも、少しは、女の気持ち気にする。でも、パコ、するとき、いつも酔ってる。私の中に入れて、出せば、それで終わり。私、関係ない。それに、これ……」

フェイエラは、そう言って、自分の股のあたりにコックの形を示してみせた。

「……大きいの？」

キャロラインは、思わずきいていた。「ノー、小さい。パコの、小さい。だから、私……。でも、平気」

「フェイエラ、ごめんね」

彼女にそんなことまで言わせてしまったのが申し訳ない気がして、キャロラインは謝った。

「だいじょぶ」

フェイエラは、逆に、キャロラインをいたわるようなまなざしでつづけた。

「パコの小さい。だから、痛くない。パコにのられてるとき、私、目つむって、他の誰かのこと、考えます。だから、平気。でも、マークはちがう。マークは男。キャロライン、マークと、お尻のセックス、したか？」

あまりに直接的な表現に、キャロラインは顔を赤くし、あわてて首を振った。

「そんな……。口で……。だけよ。今のところ、彼はそれで満足してるし」

「マーク、そうかもしれない。でも、

キャロライン、満足か？ 入れてほしくない？」

キャロラインは、今度はちょっと笑ってしまった。

「そんなこと……。あたしも、今のままで平気よ。入れるなんて……。あたしには、無理よ」

六月が来ると、マークとパコは、それぞれ谷を離れた。

マークは、なにか仲間と打ち合わせがあるのだとか言って馬で旅立った。パコの方は、ラバを引き、食料などの買い出しに出かけたのだ。

旅立ちの時、キャロラインとマークは、長い時間、情熱的なキスを交わした。

そして、残されたキャロラインは、毎日マークを思い出しては涙した。

フェイエラは、そんな幼いサドルブ

ライドをなぐさめるため、例のウインクテに関して、これまでとはまたちがうことを始めた。

毎日、少しずつ葉のブレンドを変えて味のちがうお茶をいれた。さらに、その葉を採取するため、キャロラインを外に連れ出した。スー族の女たちに伝わるその製法を教えようということらしい。

野山に生える植物の種類や、その中から薬草を見わける方法など、フェイエラが持っている知識の豊富さに、キャロラインは舌を巻いた。

そして、それらの薬草の効用について、片言の英語をまじえて説明するフェイエラの言葉で、キャロラインは、やっとある事実気づかされた。

キャロラインの男性自身を縮ませ、胸を大きくしているのは、どうやら、あのウインクテ茶らしいのだ。

「私たちの仲間にも、キャロラインみたいな人、少しいます。男の体に生まれても女の心持つ人、女に生まれても男の心持つ人……ウインクテ(※)。英語では……たしか、ツー・スピリッツ(※)。ウインクテとして生まれた女、狩りや闘いに行くこと、許されます。キャロラインと同じウインクテの男、女の服着て、女の暮らしします。酋長の許しあれば、女に近くなれる珍しい薬草、飲めます。だから、私、その薬、キャロラインのために毎日つくった」

(※訳注 本来、ウインクテ ‘Winkte’ とは——茶の名前などではなく——、アメリカ先住民が部族を越えて持っていた性別概念 ツー・スピリッツ ‘two-spirits’ は西欧人がそれを英訳した言葉 ただし、ツー・スピリッツが西洋的価値観から「異常」ととらえられたのに対し、先住民たちはウインクテを「男」「女」に並ぶ「第三の性」と認識し、その存在を社会生活上も尊重していたといわれる)

キャロラインは、自分の知らないところでそんな薬を飲まされていたという事実に、少なからず腹立たしい思いがしたが、でもすぐに、けっきょく、今の自分にとって、フェイエラのしてくれたことは悪いことではなかったと感じ、自分の体の変化を打ち明ける気になった。

それを聞き、フェイエラは、心からうれしそうに言った。

「もう、そんなに効いてますか？ それ、すばらしいこと。キャロライン、きっと、選ばれたウインクテ。旅の最後まで行ける人」

むずかしい英単語を使えない彼女の説明を理解するのは大変だったが、彼女が言いたいのは、この薬草の効果で、中には完全にふつうの女性と見分けがつかないところまで体に変化してしまうウインクテもいるということらしか

った。フェイエラは、今後、キャロラインの体がこう変わっていくだろうと予測した。

最終的に、睾丸は溶けてなくなってしまいうだろう。ペニスは、小さくなるだけでなく、うまくいけば体内に逆行し、窪みに変わっていくかもしれない。胸もきつと、もっと大きくなるだろう……と。

その言葉に、キャロラインが服を脱いでみせると、フェイエラは、その乳房が、すでに自分より大きくなっていると目を見張った。

そして、インディアンの女の間には伝わる薬草の秘伝をさらに熱心に教えだした。例のお茶——それは、キャロラインが思っていたのとはちがい「ウインクテ」という名ではなかった——についても、どんな薬草をどこで採取し、どう調合してどう煎じればいいかを正

確に伝授してくれた。

その薬草の中には、冬の間は採れなかったものもあった。今の季節ならそれも合わせて調合できるから、今後、効き目はさらに大きくなるだろうと、フェイエラは保証した。

それを聞いて、キャロラインは、マークが帰ってきたとき、大きくなった胸をどんなふうに見せようかとワクワクし、幸せな気分になった。

ところが、マークの戻りは予定より遅れた。出ていく時は、1・2週間で帰るような口ぶりだったのに、7月が終わりに近づいても戻ってこないのだ。

キャロラインは、マークが恋しくて、毎晩、泣き暮らした。

だから、馬を下り厩舎につなぐその姿を見つけたときには、一目散に家を

飛び出し、抱きつかんばかりに駆け寄った。

ところが、いっしょに連れてきた二人の男たちの目を気にしてか、マークはすげなく言った。

「キャロライン、あとにしてくれ」

そして、その男たちを居間に招じ入れ、何かひそひそと話し始めた。自分の部屋に戻ったキャロラインの瞳から、また、涙がこぼれた。

マークが連れてきた二人の男たち——ひとはアガンシャーという名のインディアンと白人の混血、もうひとは「海賊」というあだ名で呼ばれている片耳の男だった——は、それから数日滞在し、その間、キャロラインに向かって、いやらしい視線を送りつづけた。それどころか、時にはキャロラインの行く手を阻むようにして立ち、胸

を揉んだり、尻をなでたりした。

そんな様子を見ていながら、マークは、さほどとがめ立てもしなかった。さすがに、男たちがキャロラインを二階に連れて行こうとしたり、露骨に抱きついたりしたときだけは、いかにも、俺のサドルプライドに手を出すなという目でにらみつけ、止めはするのだが……。

キャロラインは、そんなマークの冷淡さを恨んだ。しかし、それでもまだ彼女はいい方なのかもしれない。パコは、フェイエラとのベッドに、客人二人を招き入れさえしたのだ。

二人の男は、マークとの謀議を終えたらしく、やがて去っていった。どうやら、近いうちに、マッド・マーク・マーフィの犯歴に、新たな強盗事件が加わるらしい。

男たちが去ってから1週間、神経が高ぶっているのか、マークは酒ばかり飲んでいて。思ったとおりに「10月に大仕事がある」と告げ、「それまでは、家でのんびりするつもりだ」と語ったにもかかわらず、まるで、キャロラインといっしょにすることがイラつくとしても言いたげに、彼女を避け、飲んだくれてばかりいるのだ。

以前のようにキャロラインの体を抱いて寝ることもなく、部屋からも閉め出した。しかたなく、キャロラインはもとの部屋に戻って寝た。その間、二度ほどマークがやってきたが、それもまるで、フェラチオだけが目的という感じだった。キャロラインの口の中に精子を放出すると、サドルブライドとしてかわいがるというような態度も見せず、さっさと出て行ってしまおう。

キャロラインにとって、それは、ま

まったく手を出されないよりつらいことだった。

そんなある夜、ドアの外から、いつも以上に酒に酔い、わけのわからないことをわめいているマークの声が聞こえた。

「くそっ、開けろ！ 男をみくびりゃあがって」

キャロラインが掛けがねを開けると同時に、マークは、まるでドアを蹴破るように入ってきて、さらに怒鳴り声をあげた。

「ええっ、どうなんだ。言ってみろよ。お前は、俺のサドルブライドなんだろうが」

キャロラインに向かって、いきなりののしるのように言うと、手にしたウイスキーびんを壁に投げつけ、彼女の腕を乱暴につかんだ。

「い、痛いわ。マーク」

マークの怒りにたじろぎ、キャロラインはその腕を振りほどこうとした。しかし、マークはそれを許さなかった。「答えろよ。お前は、俺のサドルブライドなんだから。それとも、男のチンポをくわえるのが好きな、ただのオカマ野郎か？」

マークは、怒鳴り立てながら、つかんだ腕にさらに力を込め、キャロラインをベッドの方へと追いつめた。

「あ、あたしは、あなたのサドルブライドよ」

キャロラインは、その痛みに、泣き叫ぶように答えていた。

「だから、あなたのおちんちんだけが大好きなの」

彼女が本当に言いたかったのは「あなただけが大好き。だから、おちんちんだってくわえられるの」だったのだが、動転したせいで、それは明らかに

言葉足らずになっていた。

結果、その言葉は完全に誤解され、無法者の怒りにかえって油を注ぐことになった。

マークは怒りの形相でキャロラインを突きとばすと、ベッドに倒れたその体に馬乗りになった。そして、ズボンの中から自分のコックを引っ張り出し、むりやりキャロラインの口にねじ込んだ。

それにむせながらも、キャロラインは、いつものようにサービスしようとした。しかし、マークはそれさえ無視し、まるでそこを犯すとでもいうように、顔に向かって激しく腰をぶつけてきた。

そのせいで、キャロラインは何度も窒息しそうになったが、幸いにも、そうなる前にマークは絶頂に達し、それは離れていった。

マークは、ジーンズからコックをはみ出させた姿のまま、ベッドの上に大の字になり、いびきをかき始めていた。

その姿にただ恐ろしさしか感じられず、キャロラインはそっとベッドを降り、部屋から逃げ出した。

とはいえ、どこに行く当てもなかった。フェイエラと話したかったが、この時間、彼女はパコとベッドにいるはずで、そんなところにのこのこ入っていけば、今よりもっとひどい目にあいそうだ。

気がつくやうに、キャロラインは、ダイニングに突っ立って泣いていた。

そんな姿を、起き出してきたマークに見られたら、また何をされるかわからない気がした。

それで迷ったが、結局は居間に行き、火の消えた暖炉の前のソファで体を丸め、目を閉じた。

……マークは、どうしてあんなふう
になってしまったんだろう？

そんな思いが、また、まぶたに涙を
にじませた。

ちよつとうとうとしてしまったのかも
もしれない。階段を下りる足音にハッ
として身を起こすと、怒鳴り散らすマ
ークの声とともに、居間のドアが開い
た。

「くそっ！ 男をみくびりやがって。
ぶっ殺してやる！」

その声の恐ろしさに、ソファを立っ
たキャロラインは、叫びを上げながら
逃げ出していた。しかし、すぐにマ
ークが追ってきて、ダイニンググル
ームに入り、テーブルに取りすがろう
とした時には、後ろから強い力で抱
きかかえられていた。

マークは、酔っ払った口調でさら
に

何かわけのわからないことをわめいた。その声におびえ、キャロラインはマークの腕を振りほどこうとしたのだが、それがさらに怒りをかかったようで、まるでそのまま絞め殺すとももいうように力が強まり、身動きできなくなっていた。

いくらじたばたしてみても、荒れ狂う無法者にかなうわけもなかった。その圧倒的な力の前に、キャロラインはただただ小刻みに体を震わせていた。

しかし、ほどなく、マークはわめくのをやめた。今や女らしい弾力をまとったキャロラインの下半身に押しつけられ、がまんの限界に達したマークのコックは、持ち主同様、酔いに身を任せようと決めたようだ。

最後のつぶやきとともに、マークは、キャロラインの上体をテーブルの上に押さえつけ、尻を突き出すような格好

をさせた。

そして、ネグリジェの裾をまくり上げると、キャロラインが抵抗する間もなく、パンティをずり下げた。さらに、あらわになったアヌスに、何の警告もなく、コックを突き立てた。

あまりの痛みに、キャロラインは叫びを上げ、その強引なストロークが10回にも達しないうちに……気を失った。

……意識が戻った時、マークはすべてを終えたらしく、部屋を出て行くところだった。

「男を……みくびるなよ」

マークはまた、そうつぶやきながら階段を昇っていった。

自らの部屋に戻ったキャロラインは、泣きながら下半身の始末をし、やっとベッドに身を横たえた。

第13章

それから2週間、キャロラインはマークと口をきかなかつた。マークの方も、そんなキャロラインに対してばつが悪いのか、また酒を飲みつづけた。その結果、キャロラインは、ほとんどの時間をフェイエラとともに過ごした。

そのインディアン女は、サドルブライドの先輩として、年若い少女をなぐさめ、励ました。そして、また同じことをされた時、うまくやれるようにと助言した。

「ベーコン油、使うといいです」

それを枕元に用意しておいて、マークのものが入って来る前に、そこに塗れというのだ。

それに対して、キャロラインは、またあんな事をされるくらいなら、その

前に自分は死ぬつもりだと答えた。

フェイエラは、たとえそんなセックスでも、けっして苦しみばかりではないはずだと言った。

「最初の時、痛いのは、ふつうのセックスだって同じ。でも、好きな人にされるなら、がまんできる。それに、たぶんそのうち、よくなってきました」

キャロラインは、そんな言葉にそっぽを向き、顔をしかめた。

しばらくつづいたそこの痛みはもう癒えていたが、心の痛みは消えていない。マークがしたことを、自分はけっして許さないだろうとキャロラインは思った。

しかし、そんな決意は簡単に崩れた。

三日後、酒の匂いもさせずキャロラインの前に立ったマークの手には、彼女のために自ら摘んできたらしい花

束が握られていたのだ。

そこで彼は、この前の行為を謝り、許してくれと言った。その懇願の口調は真剣で、目にはなんと涙さえたまっていた。

キャロラインにも意地があったから、その場では、わびを受け入れなかったものの、結局、次の夜には、またマークのcockをしゃぶっていた。そして、週の終わりには、ふたたびマークの部屋で一日を過ごすようになっていた

ある晩、二人は、あのことについて、はじめてまともに話し合った。

「どうして、あの時、ちゃんと頼んでくれなかったの？ もし、あなたがまともに話してくれたなら、あたし、逃げ出したりしなかったと思うわ」

マークの毛深い胸板に顔を埋めながら、キャロラインはつぶやいた。

舌の上にはまだ、マークの精子の温かみやねばねばした感触が残っている。それで、あのレイプの真意をきいてみたくなったのだ。

と、マークの目に、また涙が浮かんだ。

「そんなこと、お前はぜったい、いやがると思ったんだ」

マークは、まず、そう言った。

「だから……ああするしかなかった。いくら女の格好をして、きれいに化粧してても、お前は……男だ。どれだけ俺が欲しくてたまらなくても、お前がそれを許してくれるとは思えなかった。だから……。それに、俺自身だって、自分がなんでそんなことを考えるのか、さっぱりわけがわからなくなって……」

その声は、泣き声になっていた。

そんなマークを見て、キャロライン

の心から、いっさいのわだかまりが消えていった。

「じゃあね、これを見て。これでもあなたは、あたしのことを、男だと思う？」

マークの目を見つめながらそう言ったキャロラインは、ベッドの上に立って、ネグリジェの裾を胸の上までたくし上げた。さらに、その下に着けていた唯一の下着である綿のパンティをもずり下げた。

そこに現れた胸のふくらみや、小さくなった男の象徴を見て、マークは息をのんだ。

「たしかにこれ、まだちょっと小さいかもしれないわね」

キャロラインは、片手でその乳房を持ち上げるようにして言った。

「でも、ちゃんと、女の子のおっぱいでしょ。このおっぱいは、マッド・マ

ーク・マーフィーのものよ。それから、こっちも、女の子のものとはちよつとちがうかもしれない」

胸から放した手を、今度は下半身に持っていき、中身がほとんどなくなった袋や、小さく萎縮してしまったコックを示しながら、キャロラインはつづけた。

「でも、もう、男の子のでもないでしょ。あたし、女よ……あなたの女。マーク、あたし、あなたのこと、愛してるのよ。愛する人の願いなら、女はなんでもかなえてあげたいと思うわ。あなたが幸せだと感じられるなら、どんなことでもいやじゃない。だから、もう、お酒になんか頼らないで。あんなやり方じゃなく、あなたのしたいことを、ちゃんと言ってくれさえすればいいの」

ついに、マークは泣き出していた。

自分の罪を悔い、恥じ入るようなその姿は、この男が生まれてこの方、人前では一度も見せたことのないものだろう。

そんなマークを抱きしめたキャロラインは「もう、いいのよ」と、やさしくささやきかけた。その言葉をきっかけに、二人の抱擁はさらに熱を帯び、お互いの体をきつくからめ合った。

マークはまだその抱擁をつづけていたようだったが、待ちきれなくなったキャロラインは、体をずらしていき、マークのコックをふたたび口に含んだ。そのとたん、幸せな思いが彼女を包んだ。

彼女は、いつも以上に熱意を込めて、それに奉仕した。しかし、オルガスムに達する寸前で動きを止めた。そして、じつは何週間も前から、心の奥に秘めていた言葉を口にした。

「あなた、お願い。……入れて」

用意しておいたベーコン油の助けを借りても、キャロラインの裏口は、そんなに簡単には開けなかった。

それでも、その潤滑油をめいっぱい塗り込み、マークがゆっくりと挿入してくれたおかげで、そして、キャロライン自身も、息をつめるようにしてこらえたおかげで、やがて、巨大なコックの大部分が、幼いサドルブライドの体内に収まった。

自分の「夫」のすべてが入ってきたと感じられた瞬間、キャロラインの心臓は喜びに高鳴り、満たされた思いが、大きな声を伴ったため息となって口をついた。

その結合が、体だけでなく心からのものだと感じられたからこそ、マークが腰を動かしはじめた時、キャロライ

ンの目からは、幸せの涙が溢れ出した。

マークはゆっくりと、そして深く、腰を上下させていた。キャロラインもまた、体の奥から突き動かされるように、その動きに合わせて腰を持ち上げていた。お尻の肌に、マークのボールがひたひたと当たるのがわかり、それがまた、キャロラインを幸せな気分の中に導いた。

もちろん、「おさな妻」のそこはまだ固く、マークのものが前後するたび痛みが走ったが、その先が体の奥を打ったたび湧き起こる感情の高ぶりに、そんな痛みはすぐにどこかに消し飛んだ。

キャロライン自身のものは、勃起することもなく、体の振動に合わせてかわいらしく揺れていた。その先からは液がたれていたが、それは、精液というより、愛液とっていいものだろう。

そして、かつてその幼い器官が感じた
どんなオルガスムより高い波が押し寄せ、
キャロラインの全身を震わせた。

この前とはちがい、むしろキャロ
ラインの方が先に、そこに達していた。

マークは、かろうじて持ちこたえな
がら、そんな美しい妻の恍惚の表情に
目を奪われていた。その裸の乳房は、
マークの動きに合わせて大きく揺れて
いた。その熱い絞めつけは、痙攣しな
がら、マークのコックを絞りあげてい
た。

もう耐えきれず、マークも、声をあ
げながらその中に膨大な量の精液を噴
射していた。

ふたりにとって永遠とも思える悦び
をもたらしたその初めての交わりは、
実際には、ほんの二・三十回のストロ
ークだけで終わっていた。

その日から何週間か、ふたりは、愛の行為に溺れた。それは、キャロラインの口とアヌスが耐えられる限界まで、一日何度も繰り返され、マークのコックもまた、その絶え間ない摩擦に、赤むけ寸前になった。それでもなお、少しの瞬間でも離れると、お互いの体が恋しくてたまらなかった。

今や、マークの精液の味にも、挿入されたときの感覚にも夢中になっているキャロラインは、いつときでも彼の姿が見えないと、家中を探しまわった。そして、彼が家の中にいないと——たとえば、自分の頼みで外に何かをとりに出たときでさえ——おろおろとうろたえた。

そんなキャロラインを見て、フェイエラは、彼女が食事や睡眠も満足にっていないのではないかと心配した。「だいじょうぶ、ちゃんと食べてるわ」

キャロラインは、フェイエラにうなずいた。

「だけど、寝てないことはたしかね。だって、夜の間も、ずっとしてるんだもの」

そんなふうにお互いに夢中になっているふたりには、自分たちのすぐ近くで起こっていることさえ、目に入っていなかった。だから、パコとフェイエラの間で進行していた深刻な事態にも、まったく気づかずにいた。

第14章

パコは、マークと同じくらい悪党で、マークと同じくらい自分勝手な男だったが、その自分勝手さは、マークほど単純ではなく、もっとねじ曲がっていた。

まだ子供だった頃、ちょっとしたいさかいから自らの父親を殺してしまったパコは、メキシコのソノラにあった家を逃げ出し、さまよったあげくバンディート(※)の一味に加わった。

(※訳注 ‘bandito’ 《スペイン語》山賊 山中で徒党を組み、平野の町や村を襲う強盗団)

その仲間が自警団に追いつめられ、ほぼ皆殺しにされた時も、危うくそこから逃げ出し、今度はメキシコ領内のコマンチ族にまぎれ、アメリカ領内のアパッチ族相手に銃を密輸する仕事を始めた。そのルートが合衆国当局に摘

発されると、次には列車強盗の一味に入る。やがて、そこで知り合ったマッド・マーク・マーフィーに誘われ、銀行強盗に鞍替えしたというわけだ。

その間、彼はすでに何件もの殺人を犯していたが、それは「仕事」上の銃撃によるものに限らなかった。メキシコからオレゴン州に至るあらゆる場所で、彼は女を強姦しては殺していた。

パコにとって女は、自らの肉体的欲望を解消する手段でしかなかった。従順に従わないような女には、何のためらいもなく暴力をふるった。ましてや、自分のことを嫌ったり、見下したような態度をとる女には、激しい憎悪をぶつけた。

そのゆがんだ性癖は、ことに、腕に受けた銃創から壊疽(えそ)にかかり、片腕を切り落とさなければならなくな

ったことで、より鬱屈した。

マークから隠れ家の管理を頼まれ引き受けはしたものの、自分がそんな仕事しかできなくなったことに、彼は劣等感を募らせた。だから、女が、少しでも馬鹿にしたような素振りを見せようものなら、前以上に逆上した。

この数年で、パコは何人ものサドルブライドをさらってきていたが、ひと冬以上もった女は、フェイエラをおいて他にいない。たとえ女が表面上はおとなしくいうことをきいていたとしても、春になる頃にはその女に嫌気がさし、いたぶりながら殺してしまうのだ。

フェイエラがそうならなかったのは、ここに連れてこられた事情が、これまでのサドルブライドとはちがうこともあるだろう。フェイエラは、買われてきた女だ。パコはこれまで、女が欲しくなると、手近な町でさらってく

るか、売春宿に出かけていた。そんなパコの行動からアシがつくのを恐れたマークが、買ってきてあてがったのだ。

フェイエラは、自分が売られた女だということをよくわかっていて、その運命を受け入れていた。自ら進んで寝るのではないにしても、他の女のようにあからさまにパコを拒否しなかった。初めてパコがひどく殴ったときでさえ、傷の手当てをするとすぐに、不平も言わずパコのベッドに戻ってきた。そんなインディアン女の諦念とも言える従順さに、パコは、ある種、畏敬の念さえ抱いていた。だから、殺すことなく、2年近くもそばに置いているのだ。

しかし、そんな関係も、昨年の冬から徐々に揺らぎはじめていた。

マークが、新しいサドルブライドを

連れて戻ったからだ。

その女は驚くほどの美人だった。一目見た瞬間から、パコはその姿に魅入られた。女が、じつは女でなかったことがわかったあとでさえ、その若くてかわいらしい「少女」に、パコの性欲はたぎった。前でできないというなら、後ろを犯せばいいだけのことだ。

しかし、そんな欲情を抑え、パコは自分にチャンスがめぐってくるのを待った。春が来る頃には、マークも女に飽き、おこぼれをちょうだいできると思ったからだ。

これまでだってそうだった。マークは、自分の女を、パコにも使わせてくれた。マーク自身だって、前には、フェイエラを共有していたじゃないか。

ところが、春になっても、マークがそうしてくれる気配はなかった。気持ちを抑えきれなくなったパコがいくら

掛け合っても、マークは断固としてそれを拒否するのだ。しかもそれは、パコにだけでなかった。大事な客人に対してさえ、自分の女を振る舞おうとはしなかった。そのせいでやつらは腹を立て、マークのことを仲間として信用できないと思ったにちがいないというのに。

今、パコはフェイエラとセックスするとき、頭の中では、あの女のことを思い描いている。インディアン女の黒い髪をブロンドだと想像し、張りを失った三十代の肌を、若くてぴちぴちしたティーンエイジャーの体だと思いこむ。

頭の中のそんな少女の像は、彼を興奮させ、そのせいで、すぐにイッてしまう。

どうやら最近、フェイエラは、それ

を、彼のセックスが弱くなったからだ
と勘違いし、馬鹿にしているようだ。
もちろん、表だってはそんな表情を見
せないが、心の中であざけり笑って
いるにちがいない。パコにはそれが
わかるのだ。

俺を笑うようなやつは、許さない！

もうじきマークは、6人の仲間と落
ち合って銀行を襲うため、旅立つ。そ
の時、この屋敷に、あのブロンド美人
と自分が二人きりになる凶を想像し、
パコは暗い情念にとりつかれていた。

もちろん、マークがいる間、そんな
素振りはおくびにも出さなかった。も
しマークに気づかれ、決闘にでもなっ
たら、片腕の自分が不利なことは目
に見えていたからだ。

しかし、マークが出て行ったら、す
ぐにでも、キャロラインに向けた性欲
を満足させるつもりだった。その前に、

もうひとつ、邪魔なものをかたづける必要はあったが。

別れを惜しむマークとキャロラインが、抱き合って泣いているのを見ているときでさえ、パコは、頭の中でそのたくらみをめぐらせていた。

「マークが戻ってきた時には、キャロラインは逃げたと言えればいいだろう。フェイエラの方は……正直に、飽きたから始末したと言えやすむ」

それは、けっしてうまい言い訳とはいえなかったが、パコにしてみれば、精いっぱい頭を働かせていた。

彼は、深い墓穴をひとつだけ掘るつもりでいた。そこに、フェイエラとキャロラインの両方を埋めるのだ。

フェイエラの死体は、キャロラインを味わいつくすまで、家畜小屋の隅に隠しておく。最終的にキャロラインに

飽き殺したところで、まずその死体を墓に埋め、その上に土をかぶせて、さらにフェイエラを埋める。

たとえマークが、パコの言葉を疑って掘り返したとしても、インディアン女の腐乱した死体を見つけるだけだ。それ以上深く掘ろうとは考えないだろう。

マークが問いつめてきたら、自分は逃げたキャロラインを追ったのだと言うつもりだ。しかし、彼女はバークスバーグの町まで逃げ切り、人混みにまぎれてしまったとでも言えばいい。

もしかすると、マークは自分自身で、キャロラインの足取りを追うかもしれない。その結果、誰も彼女を見ていないことがわかれば、疑いはふたたびパコに向く。

そうなったらそうなった時だ。入浴中や就寝中、油断したすきにマークを

撃ち殺してしまえばいい。それなら、マークが銀行から奪ってきた金まで、自分の手に入る。

マークにとってそれは、自業自得というものだ。いくらかわいいからといって、オカマなぞに、ここまで骨抜きにされているのだから。

その「情婦」との長い抱擁のすえ、やっと馬にまたがったマークは、何度も彼女の方を振り返った。未練たっぷりなその顔には、涙さえ流れていた。

そんな姿に、パコは失笑せざるを得なかった。

かつて、マッド・マーク・マーフィーは強い男だった。それが、ここまで女々しくなってしまった。野獣を猫に変えてしまうほど、この女の舌や唇の奉仕はいいにちがいない。

今度はそれを自分が試す番だ。マーク同様、こいつに、女としての悦びを

教えてやろう。でも、マークとはちがい、このオトコオンナに、男にとって女とはどういうものかを思い知らせてやろう。

マークが見えなくなるまでたたくみ泣きつづけるキャロラインの姿に、そんな情念をたぎらせながらも、まだ、パコは手を出そうとはしなかった。

その前に、例のものを始末しなければならぬ。

今日のところは、まだ、許してやろう。

パコはそう思った。

でも、もうすぐ、このブロンドのサドルブライドは、俺のものになるのだ。今度は、俺に犯されて泣くことになるのだ。

第15章

マークが去ってから2日目の夜だった。愛する人と過ごす心地よい夢を見ていたキャロラインは、一発の銃声によって目覚めた。

ベッドを出たキャロラインは、恐ろしさに震えながらも、ナイトガウンを羽織り、階下に降りた。

家の中には誰もいないようだった。それで、窓越しにパコたちのいる離れを見やった。こちらも、別に変わった様子はない。

もしかすると、あのメキシコ人がコヨーテでも撃ったのかもしれないとキャロラインは思った。家畜小屋の子牛を狙い、ときどきコヨーテが谷に降りてきていたからだ。でも、それはエサの少ない冬の間のことで、夏場にはあまりないことだった。

インディアンや夜盗が家のまわりにいるような気がし、そのあともキャロラインは寝つけず、おびえながら座っていた。

朝が来ても、そんな不安な気持ちは消えなかった。

その上、いつもなら朝食の仕度に来るはずのフェイエラがやってこない。それは、昼食時も同じだった。しかたなく食事の用意はキャロライン一人ですることになった。

その食事を感謝の言葉すらなく食べるパコに対し、キャロラインはもちろん、フェイエラはどうしたのかときいてみた。しかしパコは、言葉がわからないというようにそれを無視するばかり。

昼食後、馬に乗って出かけようとするところでやっと「あいつは病気だ」と言った。

それにしても、パコはどこへ出かけようというのだろうか？

フェイエラの方が心配になり、さらに、もっと悪い予感もあって、パコが出ていくとすぐに、キャロラインは離れへと向かった。

ところが、ドアの前に立ち、いくらノックしても中で動く気配がない。さらに悪い予感が募り、キャロラインは、恐る恐るドアを開けてみた。と、その最悪の予感が的中していた。

そこで、フェイエラは死んでいた。

恐怖に悲鳴を上げながらも、キャロラインは、すぐにその場を離れ、母屋へと走った。こうなったら、自分には隠れるしかないのだ。隠れつづけて、マークの帰りを待つしか。

キャロラインには、パコがすぐに戻ってくるのがわかっていた。そして、

あのメキシコのバンディートが、自分を犯しに来ることも。

パコがいつも自分に向けてくる視線、それが最近ではお尻に向けられていることも、かがんだ時、胸をのぞき込もうとしてくることも、彼女は当然気づいていた。

キャロラインは、ライフルを取りに行こうと思った。マークがそれをどこに隠しているかを、キャロラインは知っていた。もし、パコが襲ってきたら、あのライフルで……。

しかし、パコも、そこまで馬鹿ではなかった。いったん離れたのは、すぐに戻ってきて忍び込むため。実際、キャロラインが裏へ向かったのを確かめた時点で引き返し、堂々と玄関から家の中に入っていた。そして、まさに、キャロラインが向かおうとしている彼女とマークの部屋で待っていた。

ドアの陰に潜んでいたパコは、ドアが開き、キャロラインが一步踏み込んだところで、長い片腕をその体にまわし、彼女の自由を奪った。さらにその手を、胸の上に置き、キャロラインの乳房を揉んだ。もちろん、ウエストの背中側には、勃起したパコのものが押しつけられ、こすりつけられていた。

その間パコは、キャロラインの耳もとで、スペイン語の単語をうめきつづけた。それは「売女」とか「淫売」とか、さらにもっと汚いあざけりだったのだが、キャロラインにその意味が伝わっていなかったことだけが、せめてもの救いだった。

パコのやり方は、乱暴で容赦なかった。胸に当てていた手でキャロラインの服を引き裂くと、その勢いのまま、彼女をベッドの上に突き飛ばした。そして、その上に覆い被さると、すぐに、

彼女のバックにコックを挿入してきた。

その瞬間、キャロラインは泣き声をあげたが、それは痛みにとりより、精神的ショックのせいだった。パコの男性自身は、そこに大きな損傷を与えるほどには大きくないのだ。とはいえ、そのバンディートのコックの往復が、なんの潤いもなく行われたこともたしかだ。

ことが終わると、パコは、幼いサドルブライドを裸のまま縛りつけ、ベッドの上に放置して、なにも言わずに出て行った。ふたたび欲望がたまったら、処理しにくるということだろう。

キャロラインのまわりで、時間はゆっくりと過ぎていった。

あんなかたちで強姦されれば、たいていの女性は、肉体にも手ひどい傷を

負うだろう。でも、キャロラインは、そのことから免れていた。パコのものが小さかったという以上に、そんな乱暴への対処法を知っていたからだ。かつてビッキーが、店の女たちに、そんな時はうまく手を使ってさっさとイカせてしまえと言っていたのを覚えていたのだ。だから、先刻は、秘かに手を添え、そこへの摩擦の時間を短縮していた。

それよりもつらかったのは、自分の体の味を知っているもうひとりの男のことを思い出したからだ。すでに、自分が愛を捧げるのはマークだけだと決めていたのに、パコがそれを奪い取っていった。いや、彼は、もっと多くのものを奪おうとするだろう。

早く逃げ出さなければ、いずれどこかの時点で、パコは命まで奪うはずだ。

そう思ったサドルブライドは、その

日一日を、自分を縛りつけている革紐との格闘に費やした。

パコの方は、午後をずっと飲んですごし、日が暮れる少し前に、ふたたびキャロラインの部屋を訪れ、彼女を犯した。

それでとりあえず満足した彼は、ふたたび酒に戻り、8時過ぎには、台所の床で寒さに震えながらも寝てしまった。

キャロラインは、その間も、ずっと起きつづけていた。朝までには、なんとかその縛りから抜け出したいと、もがきつづけていたのだ。でも、残念ながらその努力はほとんど進展を見ることがなく、結局は疲れ果て、いつの間にか寝入ってしまった。

彼女の目を覚まさせたのは、部屋のドアが開けられる音だった。

そこには、窓から差し込む朝日を浴びて、裸のままのパコが立っていた。

「グッドモルニン、ビッチ」

パコは、訛りのひどい英語でそう言った。

「今日、お前の尻でやったあと、口できれいにしてもらおう、ふふ」

その笑い声は、二日酔いの頭痛のせいで、くぐもり、ゆがんでいた。

ベッドに近づいてくる彼の下腹部で、慎みのかけらもないコックが、滑稽に揺れていた。

後ろ手にしばられたキャロラインをうつぶせにし、引きずるように、下半身だけをベッドから下ろさせたパコは、さっそく、突き出た尻にそのコックを押しあててきた。

それが穴にめり込んでくるのに抵抗

しようとしたことが、強い絞めつけとなった。

「おおッ、いいぞ、感じる……」

パコがうめいた。

キャロラインの体に加えるコックへの圧迫に、よほど悦びを感じたらしいパコの目が、自然に閉じた。

「マークがお前、独り占めしたわけ、よくわかる。こんなきついビッチ、他にはねえ」

パコが体を少し引き、ふたたび激しく突きながら言った。

その痛みにキャロラインは涙ぐんだ。しかし、泣き声は抑えた。この悪臭を放つ男を、無視しようとしたのだ。

たとえどんなに傷つけられたとしても、たとえどんなにひどい言葉を浴びせられたとしても、この男が悦びの反応だと勘違いするような反応は、いっ

さいすまいと思った。

強姦に対して、女は抵抗できない。でも、男に楽しい思いをさせないことならできるはずだ。キャロラインは、そう思っていた。

三度目の突きを繰り返したところで、パコはふたたび言った。

「お前の尻、あのインディアンのビッチよりきつい。もう……イク。いっぱい出る……」

実際、パコはそこで、大量の精子をキャロラインの中に放出した。

しかし、彼自身の脳は、その悦びを感じることはできなかつた。

その瞬間、一発の銃弾が、そこを吹き飛ばしたからだ。

銃をホルスターに納めたマークは、怒りの叫びとともに、まだぴくぴくと動いているパコの死体をキャロラインの背中から引きはがした。

そして、ずくにナイフで後ろ手にし
ばった革紐を切ると、しくしくと泣い
ている少女を抱き上げ、抱きしめた。

第16章

マークが早々に戻ったのは、仲間との合流に失敗したからだった。

なにか不穏なことが起きている。

そう感じたマークは、計画——アラバマの簡易銀行二カ所の襲撃——をあきらめたのだ。その計画は、雪が降る前にマークが考え、仲間たちと打ち合わせたものだったが、例の海賊と呼ばれる男が、待ち合わせた谷間に姿を現さなかった。おそらく、殺されたか、捕まったかのどちらかだ。

幸い、この夏、なにもせずに過ごすだけの蓄えはある。もし、警察が仲間に接触しているのがわかれば、さらにひと冬を越し、次の春を待つ余裕もあるだろう。

そう考えたマークは——計画が挫折したというのに——、思わずにんまり

していた。恋に落ちた女が、男に何をしてくれるのか、それを味わいつくすのも悪くないと思えたからだ。

もちろん、パコがキャロラインを犯しているのを見て驚いたのだが、マークは、そこですぐ手は出さなかった。万が一、キャロラインの方から誘ったと考えられなくもないからだ。

しかし、近づいてキャロラインが縛られているのを目にして、これは強姦、つまりパコの裏切りだと確信したのだった。

マークとキャロラインは、フェイエラの遺体を、パコがすでに掘っていた穴に丁重に葬ったが、パコの死体は、山中に捨てた。いずれ、狼か熊の食料になるだろう。

「やつには、それでも贅沢ってもんだ」

マークの言葉に、キャロラインも異論はなかった。

自分が犯されたこと以上に、フェイエラが殺されたことで、パコを憎んでいたからだ。

キャロラインのそんな思いにマークも気づき、いよいよ彼女に対する愛おしさが募る気がした。

その強姦の傷が癒えるまで、マークは、サドルブライドをそっとしておいた。

そして数日後、おずおずと誘った時、彼女の方から示した積極的な態度に驚くことになった。

二人はふたたび、毎日交わりを持つようになり、時には、日に何度もということもあった。そして昼間も、前以上に体を寄せ合って過ごすことが多くなった。

空腹に耐えきれなくなるまで、数日間、裸のまま、ベッドルームで過ごしたことさえあった。

心を許し合える親友を失ったという不幸はあったものの、キャロラインに、前以上に幸せな日々がおとずれていた。

そんな夏が過ぎ、秋になっても、キャロラインは、フェイエラに教わった例のハーブを飲みつづけていた。材料となる薬草は、フェイエラが生きているうちに、次の冬が終わるくらいまでの分を採取していた。だから、キャロラインの前のは、小さくなりつづけていた。

でも、キャロラインは、マークの前ではパンティを脱がなかった。

男の痕跡を隠し、自分を女だと思いたいのだと受け取ったのだろう。マー

クも、あえてパンティーを脱がしたりせず、その生地を脇によけてコックを挿入することをいとわなかった。

だから、マークは気づいていないが、キャロラインの体の変化は、さらに画期的なところまで進んでいた。

そしてキャロラインは、そんな秘密を夫と共有する日を、心待ちにしはじめていた。

1年前からふくらみはじめたキャロラインの胸は、すでに発育の過程をほぼ終え、完全にふくよかなものになっていた。もう日中は、ブラジャーのサポートなしには過ごせない。乳首も大きくなり、かわいく突き出している。

背中線の線も丸みを帯び、肌はすべすべで、ことに形よいお尻は、しばしばマークを狂わせた。そのヒップラインはたしかに幅が広がったようで、キャロラインの歩き方に、さらに女らしさ

をつけ加えていた。

声もまた——もともと男っぽくはなかったが——高音の伸びが増し、通りがよくて甘いソプラノと言ってもいいものになっていた。

いや、もっと肝心な部分で、今、劇的な変化が進んでいた。

中に睾丸の存在を感じ取れなくなった陰のうが縮み、さらに、その中央が縦に割れるようにして体の中にめり込みはじめていた。そんなふうにしてできた唇のような形の上端には、もともと小さかったコックがさらに縮んでピンク色の粒となり、埋め込まれていた。

そんな変化に、キャロラインは当然ワクワクし、それを夫に見せる日が待ち遠しくてたまらなかったのだ。

しかし、それには、まだ不足していることがあった。そのくぼみは浅く、とてもプッシーと言えるものではない

のだ。今のところ、指の第一関節が入るくらい。

とはいえ、その部分の体の中への逆行はつづいていたから、このペースで行けば、年の終わりくらいには、それなりの深さに達するかもしれない。

キャロラインは、マークのcockの長さを思い描き、それに応えられるプッシーが早くできればいいのにと、一人にんまりした。

そんな日々はあっという間に過ぎ、その年の大晦日、キャロラインはマークに、パンティを脱がせてくれと頼んだ。そして、そこを見た瞬間、彼の顔に浮かんだ喜びの表情に、自らも喜びにあふれた。

それから二人は、彼のcockをなんとかその新しいプッシーに入れようとしたのだが、それはやはり、うまくい

かななかった。やっと亀頭が納まるくらいしか進めなかったのだ。

でも、その夜から、それが二人の楽しみにもなった。その試みが前戯の一部として組み込まれ、毎晩繰り返されたのだ。

2月の終わりには、マークの巨大なコックの半分までがその濡れた器に入るようになり、キャロラインも、その底でなにかが起ころのを感じ、悦びを共有できるようになっていた。

マークが初めてキャロラインのプッシーの中でイッた時、彼女は、これまで味わったことのない至福感の中で、彼の締まったウエストに巻き付けた脚をきつく絞め、むせび泣いた。彼女の新しいクリトリスに加えられる刺激は、彼女の体の中で、オルガスムに次ぐオルガスムを引き起こし、その信じ

られない感覚に、体が大きく震えた。

マークのものがその中にほぼ入りきった時も、そして、彼が舌を使った実験を始めた時も、キャロラインはやはり、これまでに経験したことのない震えを感じた。その震えは、まちがいはなく、臍からの爆発的な衝動によるものだった。こんな経験をできた自分は、もうけっして不幸にはならないだろうと、キャロラインには思えた。

4月の初めには、最初のひと突きから、マークのものが根元まで入るようになり、その何時間もつづいた長大で甘いストロークに、キャロラインは絹のシーツを台無しにしてしまうほど悶えた。

脚を開き、その足先を彼の体にきつくからめ、お尻を持ち上げて力強い突きに応えること、それが、今やキャロ

ラインにとって、人生の目的にもなっていた。

唇を這わせ、キスし、夫の太いコックをなめ、吸い、それでプッシーを突き貫かれること、それが、キャロラインの頭のほぼすべてを占めていた。

女としての本物のセックスを知った今、夫のコックをくわえることも、以前とはまったくちがう意味を持つようになっていた。それは、無理をしてでも彼を悦ばせるというより、その太くて力強いものが与えてくれた女としての悦びに対する感謝の行為になっているのだ。

一晩に何度もやってくるオルガスムの叫びのせいで、彼女の声は枯れてさえた。

6月頃には、キャロラインの体から、クロードの痕跡はすっかり消え失せて

いた。

彼女自身、自分のか細い体に、ひとつの欠点さえ見つけられないと感じていた。胸は、完全に発育し、陰部もおかしなところはなにもない。じつは、鏡でそこを映し、それを確信したのだが。

夫の優しさにも心から満足し、二人でいる幸せを満喫していた。

だから、6月5日、夫から告げられた言葉には、自分のもとから彼が永遠に去ってしまうような不安を感じた。

「……だから、ほんの数週間、留守にするだけだよ」

マークは、涙を流しながら彼のコックをしごく妻に言った。

「いやよ、行かないで。ずっとここで、ふたりですごせばいいじゃない」

キャロラインは、最初の体液を絞り出すとでもいうようにきつく握りなが

らも、すすり泣いている。

「……むッ」

マークは、ちよっとうめきながら、それに答えた。

「どうしても、行かなきゃいけないんだ」

「そんなこと、ないわ」

キャロラインは、そこからしみ出したとろりとした液体をなめ取りながら言った。

「もう、銀行強盗なんてやめて。ここの牧場をちゃんとやっていけば、暮らしてけるはずよ」

さらに、裏筋に舌を這わせ、彼女はつづけた。

「お、俺は、百姓じゃない」

キャロラインが、睾丸の片方を口に含んだ悦びに負けそうになりながら、マークは主張した。

「そうなればいいじゃない」

彼女は、もう片方の睾丸へと口を移す合間に主張した。

「お前は、わかってないよ、キャロライン。俺は……うッ……無法者。好き勝手に生きるには、金がいるんだ」

マークから「キャロライン」と呼ばれることに、いつもながらのうれしさを感じながら、彼女は軽く歯を立てるようにして、マークの「長さ」の先端へと口を移していった。

「大金が必要だったのは、賭け事と女を買うためでしょ」

そして、亀頭をやさしくくわえる前に、つけ加えた。

「今はもう、そんな気にもならないって言ったのは、あなた自身よ」

マークは、この議論に最終的な決着をつけたかったのだけれど、キャロラインの唇が、コックを呑み込んでいくことで、それはいよいよむずかしくな

った。ことに、コックの裏側にあてられた彼女の舌が震えるように動くことで、まともに考えることさえできなくなった。

「だが、俺には借りが……ああッ、キャロライン……ある男に、借りがあるんだ。もし、約束を破れば、やつはすぐに……うッ、ああ……俺たちを殺しに……。うッ、頼む。もうひと仕事だけ……………あああ」

どうやら、マークに断念させることはできないかもしれないと感じたキャロラインは、せめて今だけでも、彼の頭の中からそのことを追い出そうと決めた。

唇と亀頭のカリが作り出した「ポン」という音とともに、勢いよくそのコックから口を引くと、キャロラインはマークのウエストあたりに馬乗りになり、上体を前に倒していった。たわ

わな胸が、彼の口もとに届くようにしたのだ。

マークがそこを吸い始めると、キャロラインは、片手でその髪をなで、もう一方の手を彼の下腹部へと伸ばした。いきり立つコックを、プッシーへと導くためだ。

本当のことを言えば彼女は、正常位で、マークの重さを感じながら犯される方が好きだ。でも、今日は騎乗位。まるでそのコックが鞍でもあるかのように、それをホットなプッシーで包みながら腰を落とした。

マークはそれに悦びのうめき声をあげ、勢いよく腰を浮かして突き上げてきた。

それに目を閉じたキャロラインは、その労力への感謝の印として、そこを絞った。

「ねえ、お願い。行かないで、マーク

・マーフィー」

キャロラインは、そのきつい絞めのまま腰を上下しながら、最後の嘆願をした。

「あたしは、あなたにずっと、ここにいてほしいの」

マークは、それに答えようとしたが、ぎゅっと目を閉じることしかできなかった。すぐにイキそうになるのを、こらえるのに必至だったのだ。

「あッ、あッ、あッ、あッ……」

キャロラインもまた、その上下運動をつづけながら、うめいていた。太いポールは、彼女の新しいクリトリスにも触れ、そこを強くこすっていたからだ。

もう自分の衝動がこらえきれなくなったのだろう。そこでマークはキャロラインの腰を両側から握るようにつかむと、体を起こして、キャロラインを

後ろに倒した。

挿入したままで立場を入れ替えた無法者は、彼の花嫁——今やサドルブライドなどでない、本物のブライド——の乳首を吸いながら、その可憐な割れ目に向かって体を打ちつけた。

すぐに、二人そろって、鮮烈なオルガスムに達していた。

第17章

結局、言葉どおり、数日後にマークは旅立った。生き残ったギャング仲間を見つけ、襲うべきひとつかふたつの銀行を見つける旅に。

キャロラインは、最後まで行かないでと懇願したのだが、その涙は無駄に終わった。手持ちの金が心細くなっていることをよくわかっているマークにとっては、それしかなかったのだ。

マークは、遅くとも二か月後には戻るという約束と、キャロラインの世話係として新たに雇った一人の男を残して行った。

その年老いたインディアンは、ロング・ランと名のつた。ノースカロライナのチェロキー族だと言い、ちゃんとした英語を話す。マークとは十年來の知り合いで、信頼できる人物だともい

う。

でも、キャロラインはすぐには信用できず、しばらくの間、その一本歯のほほえみから距離をとっていた。しかし、やがてその存在にも慣れ、さらにはうちとけ、終日、二人で話しながら過ごすようになった。

ロング・ランは、自分のことを、もう、いろんなことに興味を持つには年を取りすぎてしまったと言うが、そこは男。キャロラインのそぶりが気になるのはたしかなようだった。でも、キャロラインの方は、彼に対し、そんなそぶりはいっさい見せなかった。

いつしか、彼にとってキャロラインは、孫娘のような存在になり、女として意識することもなくなったようだ。まあ、偶然、入浴中のところをのぞいてしまった時は別にしてという話だが。

キャロラインは、最初の頃、ロング・ランが呼びかけてきた「ミセス・マーフィー」という言い方が好きだったのだが、結局は、お互いファーストネームで呼び合う間柄になっていった。

彼は、日中、キャロラインにひとりでさみしい思いをさせることなく、つきあってくれた。彼女が本を読んでいる時は傍らで静かに聞き、縫い物をしている時には、飽きさせないように、あれこれおしゃべりしてくれた。

一方でロング・ランは、周囲に対する警戒も怠らなかつた。彼の仕事はなによりも、大切なレディを守ることなのだ。キャロラインの知る限り、彼はいつも、バッファロー銃(※)を携えていた。

(※訳注 ‘buffalo gun’ 主に狩猟に使われた大口径長距離射程のライフル)

ロング・ランは、衰えから、速くは

歩けなかったが、馬に乗ると人が変わったようになる。乗った馬に負けないほどの俊敏さを発揮するのだ。

その年老いた男は、毎日、谷間のあちこちに出かけ、ほったらかしになっていた家畜の様子を見てまわった。

パコとマークは、時折、鹿や子牛を狩ってくることはあったが、この谷にどれほどの牛がいるのかに興味を示したことはなかった。

でも、ロング・ランは、牛を見つけると一頭ずつ連れ帰り、「マーク・マーフィー」を表す「M/M」の烙印を押してから、ふたたび放牧した。

ここには、牧場経営にじゅうぶんなだけの家畜がいることがわかると、彼は、家畜小屋の屋根を修繕し、周囲に家畜のための柵をめぐらせ、水飲み場の井戸もきれいに掃除した。パコが6年間、ただ見ていただけの牧場を、ロ

ング・ランは2か月で立て直していた。

「あの人がこれを見たら、きっと、すごく感謝すると思うわ」

すっかり変わった周囲の様相を見ながら、キャロラインが称賛すると、ロング・ランは、照れ笑いを浮かべ、それを否定した。

「いんや、わしは給料分働いとるだけじゃ。それ以上のことは、なにもしたらんよ」

ロング・ランはよくしてくれたとはいえ、夏の終わり頃になると、キャロラインは、日々、さみしさが募った。ひとつには、以前のように女どうしとしておしゃべりできる相手がいなかったからだ。そして、それ以上に、マークがないことがつらかった。それは、頭ではなく、体の欲求から来るさみし

さだった。

そんなさみしさを紛らすためもあり、彼女は、フェイエラから引き継いだ畑やハーブ園の仕事に精を出した。日々の糧のための収穫はもちろん、冬の到来を考え、備蓄のためにもせっせと働いた。今年の経験から言って、その量の半分くらいは無駄になってしまうかもしれないが、そんな作業は楽しく、時の過ぎるのを忘れさせてくれた。

しかし、10月末近くなっても夫からの音沙汰はなく、そのさみしさは、急速に心配へと変わっていった。

景色に冬の兆しが見え始める頃になると、その心配はさらに増大し、キャロラインの心のほとんどすべてを占めるまでになった。

だから、その朝、遠くから響いた銃声に、全身を絞めつけられるような痛

みを感じた。

あわてて外を見ると、ひとりの男が馬に乗り、西の峠からの道を、猛烈な勢いで下って来ていた。

マークなら東の峠から来るはずだった。

それで、ロング・ランは、例の射程の長い銃を構え、その男を狙った。とはいえ、彼のシャープス(※)は射程が長くなりすぎると狂いが生じ、弾が逸れていく。標的がもう少し近づくまで待たなければならなかった。

(※訳注 ‘Sharps’ バッファロー銃のメーカー名
量産され普及したこともあり、多くの西部劇に登場する)

いや、ロング・ランが引き金を引くの
のをためらったのは、それだけでない
なにかを感じたからのようだ。

その馬が近づき、乗っているのが待ちわびた夫であると気づいたとき、キ

キャロラインは悲鳴のような声を上げた。

……でも、だとすると、さっきの銃声は？ 帰ったのを知らせるため？

首をかしげながらも、一刻も早くマークのもとに行きたくて、家を飛び出しかけたキャロラインを、ロング・ランがあわてて抱きとめた。

驚いてその年老いた男の顔を見ると、軽はずみな行動は控えろという感じの一瞥が返ってきた。

それで、キャロラインは理解した。マークは、こちらに手を振ったりしていない。おそらく、追っ手がいるのだ。さっきの銃声は、その追っ手が、マークを狙ったものなのだ。

マークの馬は、家の玄関側でなく、その陰に隠れるとでもいうように、裏手へと回り込んだ。そして、裏口から、まるで落馬するという感じの音が響い

た。

さらにそれを追いかけるように、また遠くからの銃声と、そして、すぐ近くを弾が飛ぶ風切り音がつづいた。

キャロラインは悲鳴を上げながらも、長いスカートの裾をたくし上げ、裏口へと走った。

裏口を入ってきたマークは、飛びつこうとするキャロラインの小さな体に覆い被さるようにし、まるで彼女を守るとでもいうように、台所へと導いた。

ロング・ランは、マークに代わって馬を引くと、すでに次々に銃弾が撃ち込まれ、土ぼこりが舞っている庭を平然と横切り、家畜小屋へと向かった。撃ち手たちの目を、そちらに引きつけようということらしい。キャロラインには、ロング・ランがなにか大声で歌っているのさえ聞こえた。

「……えっ!? マーク！」

そこで、愛する夫の姿を初めてちゃんと見たキャロラインは、思わず叫んでいた。

そのシャツから血が噴き出し、流れ落ちていた。

台所の椅子に崩れ落ちるように座ったマークは、キャロラインの叫びが聞こえなかったとでもいうように、片手でライフル銃に弾を込めようとしていた。

あわてて、引き裂くようにそのシャツの片側を脱がせると、マークの厚い胸を弾が貫通していた。乳首のおよそ二インチくらい上と、そして背中側に、穴が開き、そこから血があふれていた。

ただ、その血は、泡立ったり黒ずんだりはしていない。そのふたつが死のサインだと、かつてフェイエラに教えられたことをキャロラインは思い出していた。

「キャロライン、俺を置いて逃げろ」
定まらない目の焦点をライフルに合わせるようにしながら、荒い呼吸とかすれた声で、マークが言った。

「やつら、俺の後を尾けてやがった」
そんなマークの言葉を無視し、キャロラインは、テーブルの上にあったタオルで、胸と背中の中を押しさえた。さらに、自らのペチコートを手長く引き裂き、それを包帯代わりにして、その上から巻いた。

しかし、キャロラインがその作業を終え、マークが弾を込め終えた頃には、多くの馬のひづめの音が、家のすぐ近くまで迫っていた。

二発の銃弾が、台所の窓ガラスを割った時、キャロラインは思わず、床にひれ伏していた。そして、台所の中を通ったその弾道音に、動悸が速まり、頭さえ上げられなくなっていた。

「マッド・マーク・マーフィー、聞いてるか？ ブラハム郡の連邦執行官、コルトンだ。手をあげて出て来い。そうすれば、命はとらん」

「うるせえ！」

割れた窓に向けてライフルを撃ちながら、マークが叫び返した。

妻をかばい、その上に身を投げ出すようにしているのだから、それは相手を狙ったものではなく、威嚇の意味しか持たないのだが。

その銃声の一瞬あとには、少なくとも見ても1ダースの銃弾が、部屋を横切り、反対側の壁に当たった。

それに身をすくめたキャロラインは、床に伏したまま泣き出していた。

彼女にはもう、どうしたらいいのかわからなくなっていた。そして、それ以上に、大切な夫がどうなってしまうのかという怖れに、心がかき乱されて

いた。

と、突然、彼女の上に被さっていたマークの体重がなくなった。ずれるように半身を起こした彼は、自由のきく方の手で彼女の肩をつかみ、起こそうとしていた。

「立って、ハニー。お前だけでも安全なところに隠れるんだ」

「だめ、隠れるなら二人で」

キャロラインは、すすり泣きながら言った。

……でも、どこへ？

この家は木造で窓も多い。至近距離から撃った弾が貫通しないのは、せいぜい、柱や梁に使っている丸太くらいのものだろう。

そこでマークは、キャロラインの頭に浮かんだのと同じことを思ったにちがいない。立ち上がり、粉々になった窓から、外を一瞥した。

「……ちっ、完全にまわりを囲んでやがる」

マークは、そうつぶやた。

「隠れるんなら、地下室しか……」

そこまで言ったところで、マークは粉々になった窓から、外に向かってまた一発撃った。

外の連中は、それに応戦しては来なかった。しかし、マークをののしる声が、すぐ近くから聞こえた。

銃を撃ったせいで、マークは言葉を最後まで言い切らなかったが、同じことを考えていたキャロラインには、その無念さが伝わった。

地下室の入り口は、家の外にあるのだ。今からではもう、逃げ込むには遅すぎた。

と、部屋の中を見まわしていたマークが、ハッとした顔をした。そして、大きな鉄製のレンジに近づいた。

そこでマークは、その上に手をかざした。中に火が入っていないことを確かめたようだ。

さらにマークは、オーブンの扉と、かまどの扉も開け、それを確認した。

完全な冬場ならともかく、このレンジを使おうとすると、部屋の中が熱くなりすぎる。それで、キャロラインとロング・ランは、今はまだ、調理に外の窯を使っていた。

痛みをこらえ引きつったものにはなったが、キャロラインに笑顔を向けると、マークは、その中に入れと身ぶりで示してきた。

調理に使うときは大きなオーブンだと思っていたが、人が入れればやはり狭い。でも、キャロラインの小さな体ならなんとかなった。しかし、入ってみると、それでいっばいだった。

「だけど、あなたは？」

キャロラインは、なによりそれが心配でささやいた。今、命を狙われているのは自分ではないのだ。

「俺のことは気にするな。それは、俺が考える」

マークは、また引きつったほほえみを浮かべ、そう言った。

こんな状況でも、そのほほえみが引きつっていても、それだけで、キャロラインの心は充たされていく気がした。彼女は、夫を心から愛していた。

「これを、持ってろ」

オーブンの扉を閉じる前に、マークはそう言って、自分のシックス・ガン(※)を差し入れてきた。

(※訳注 ‘six-gun’ 回転式六連発銃 いわゆるリボルバー)

それだけで、キャロラインにはマークの意図が伝わった。

郡警察の保安隊とは言え、大半は、

このことのためだけにかき集められた西部の男たち。しかも、大捕物で頭に血が上っているのだ。そこに武器も持たない女がいれば、祝杯代わりの輪姦をもしかねなかった。

と、その時、家畜小屋の方から、ロング・ランのバッファロー銃の鈍い音が響いた。そして、誰かの断末魔の叫びがつついた。

「ははーん、そらみろ。ひとり、やられたようだな」

マークが大声で叫んだ。

「早めにあきらめないと、何人死ぬかわからんぞ。俺の仲間たちが、あちこちに隠れているんだからな」

それがはったりだとわかったのだろう。外の連中が、言い返してくることはなかった。ただ、部隊のいくらかを家畜小屋周辺に差し向けたらしい気配は伝わってきた。

マークはそのあと、時折、銃を撃ち、連中が裏口に接近するのを防ぐのに成功していたが、一方で、玄関側からの侵入も警戒しなければならないと感じていた。それで、部屋を出て、そちらを見に行こうとした。

しかし、連邦執行官は、マークが予期したのより早く動いていた。すでに、部隊のうちの一人が、玄関からつづく廊下に突入していた。

台所を出かかったマークは、すぐそれに気づき、とって返しながら、背中越しにライフルを撃った。

ほぼ同時に、保安隊員が手にした45口径も火を噴いた。

弱った体であわてて方向転換したのと、自らの銃の反動のせいで、マークは足をもつれさせ、台所の中によれるように倒れ込んだ。結果としては、それがマークの命を長らえさせた。隊員

の弾は心臓に当たらず、こめかみをかすめただけだったのだ。

台所のオープンドアを蹴破るように入ってきた隊員の方は、まったくの無傷で、そこに仰向けに倒れた無法者を見下ろした。彼は、マークが死んだと思ったのだろうが、それでも用心して、マークに向けた銃をしっかりと保持していた。

そして、さらに近づいたところで、マークの胸がまだ動いていることに気がついた。

そこで、もう一度銃を握りなおすと、その無法者にねらいを定め、引き金に指を掛けた。

一発の銃声が、部屋の中に轟いた。

第18章

「あっ、奥さん」

自分の店の前の掃除をしていた商店主が、掃く手を止めて帽子を持ち上げ、通りかかった女性に挨拶した。

その女性は、まるで名士でもあるように、町中の人々の注目を集めていた。

あの、マッド・マーク・マーフィーの妻。それが今、この町、ブロックストーンにいるのだ。

「あの女、人殺しのくせに、なんで牢屋に入ってないんだい」

キャロラインの後ろ姿をいつまでも見ている主人に対し、店から出てきた妻が腹立たしげに言った。

「だから、ベッテ、彼女への聴取は終わって、無罪放免が決まったんだ。この国では誰も、夫を守ろうとして人を撃った女の罪は問わんよ。ことにその

相手が、法を外れて、自分の夫を撃ち殺そうとしたってんならな」

「その保安隊員は、自分の仕事をまっとうしようとしただけじゃないか」

妻は夫をにらみつけながらつづけた。

「強盗で人殺しの無法者、マッド・マック・マーフィーみたいな大悪人をやっつけるのは、それこそ、正義の味方ってことだろ」

「いんや、裁判による絞首刑。それが、この国の正義だ。やつは、その手順を踏み外したんだ。現場を目撃した二人の隊員も証人になった。おまけに彼らは、出撃前に、マッド・マック・マーフィーをできるだけ殺さずにつかまえろと命じられていた。無抵抗な状態で殺すようなまねはするなとな。それで、ミセス・マーフィの正当防衛(※)が立証されたってわけさ」

(※訳注 銃社会アメリカでは、正当防衛の許容範囲が日本よりずっと広い それは今もあまり変わっていない)

「ちっ、かわいい女にや、男は甘いんだから」

店のドアをボタンと閉めながら、妻は、いまいましげに言った。

その妻が意図したとおり、キャロラインには、二人のやりとりが聞こえていた。この町には、彼女の境遇に同情してくれる人もいたが、当然、すべての人がそうだというわけではない。

でも、キャロラインは、保安隊員を撃ったことを後悔してはいなかった。

そのおかげで、マークはまだ生きているのだ。たとえば、刑務所の中でだとしても。

裁判は、ネバダ州ブルックストンで、

早急に進んだ。郡警察が二人の容疑者を連行して何日もたたないうちに、それは始まった。ちなみに、ロング・ランは、山の中に逃げ、今のところ捕まっていない。新たな捜索隊が、今、彼を追っているようだ。

キャロラインへの審理は特に早く進み、夫が、数々の犯罪歴の中でも、最近の銀行強盗で犯した二件の殺人の審問を受けているうちに、無罪が確定していた。

とはいえ、夫の方も、捕まって三週間後には結審を迎えた。

その結果、絞首刑の日が明日に迫っていた。明日の朝には、キャロラインは、未亡人になるのだ。

キャロラインが刑務所の近くまで来たときには、夜のとぼりがすっかり下りていた。

裁判官とこの町の保安官は、最後の夜を、マークと二人で過ごすことを許してくれた。もちろん、この町に連行されて以来、彼女が保護監察下に置かれていた下宿部屋に連れてくるわけにはいかないのだが。

キャロラインは、この寛大な措置にちょっと驚いた。なにしろ彼女は、無罪確定後、マークを脱走させるために留置場の鍵を盗み出そうとさえしたのだ。それなのに、男たちは、すべてのことを許してくれた。おそらくそれは、今のキャロラインの容姿のおかげだ。マークと暮らす以前——つまりクロードの時代——には、世の中からそんな扱いを受けたことのなかった彼女は、それにも、少なからず驚いた。

夫のことを思うと、彼女の心は張り裂けそうだった。でも彼女は、当のマイクからのアドバイスも受け、そんな

内心を隠し、できるだけ平然とした顔で毎日を過ごしていた。町の人たちとうちとけはしなかったものの、ていねいに接していた。とはいえ、もちろん、友情を育むというわけにはいかなかった。

なにしろ彼らは、彼女から、最愛の夫を——その凶悪な犯罪歴のせいであるとしても——奪おうとしている人々なのだ。

一步一步、心を落ち着かせるようにして歩きながら刑務所に入るキャロラインは、手持ちの服の中でも最も上等なドレスとペチコートを手につけていた。

あの隠れ家から連行される際、キャロラインは、すべての服を持って行きたいと主張した。町で何を着ていたらいいのかわからないからというのがそ

の理由だったが、じつのところ、それは、ロング・ランが逃げる時間を稼ぐためでもあった。結果、連邦執行官はそれを受け入れ、保安隊は荷馬車2台分の衣装を積み込むことになったのだ。

金についても心配だったが、ブロックストーンに来て1週間後、彼女は枕の下に、小さく巻かれた札束があるのを見つけた。それは、1本の鷲羽根に巻きつけられていた。あの年老いたインディアンにちがいがなかった。

例の銃撃戦のさなか、ロング・ランは、マークの馬を連れて家畜小屋にいたのだから、逃げる際、その鞍袋から銀行強盗の成果をかすめたのだろう。でも、それをすべて横取りするのではなく、危険を冒してまで届けてくれたところをみると、やはり、キャロライン

のことが気になっているのだ。

それは、けっして大金ではなかったが、しばらくの間生きていくにはじゅうぶんな額だった。今のところ、重要参考人だった彼女の部屋代や食費は、郡がまかなってくれていたが、これからはそうはいかない。ここから数か月、この金を大事に使っていかなければならない。未亡人として生きていくことになる数か月を。

保安官事務所に入るとき、彼女はすでに流れ落ちる涙をレースのハンカチで抑えていた。

そこで待っていたのは保安官と連邦執行官のカルトン。そして、保安官の妻、アビゲールだった。この間、マークとの面会の時は、必ず彼女が来ている。キャロラインを身体検査するためだ。

アビゲールは、いつも、キャロラインに優しく接してくれた。というか、ここで夫を失うことになる女性の誰に対しても、同情を抱いて接するのだ。

とはいえ、彼女は任務に忠実だった。男たちを部屋から追い出して行こう彼女の検査は、微に入り細にわたった。なにかを隠せるような場所は、すべて調べる。つまり、彼女の検査をパスするということは、キャロラインの女性への変身が、完璧であることの証明でもあった。

その検査が終わったところで、アビゲールが男たちを呼び戻し、いよいよマークと会える時間がやってきた。

マークの独房は、その小さな監獄のいちばん奥まった場所にあった。

二人のプライバシーを気遣ってだろう。その独房の檻の下半分には、すで

に目隠し用の毛布が吊されていた。とはいえ、ただの毛布だから、隣の部屋の誰かがちょっとずらせば、二人がむつみ合う姿は簡単にのぞかれる。

でも、今夜のキャロラインは、そんなことは気にもならなかった。マークとの最後の夜。それ以外のすべてのことは、どうでもよかった。

実際には、この特別措置のため、他の部屋はカラにされていたのだが、彼女はそれさえ気づかなかったのだ。今は、マークの姿しか見えなかった。

その姿は、かつての無法者の陰もなくやつれていた。

肩の傷は、完治にはほど遠かったし、そのせいで、片腕はまったく上がらなくなっていた。

こめかみの傷はさほど深くないものの、銃弾がかすめた跡がかさぶたになって残っていた。マークは、そのせい

で頭痛がひどいとも言った。

それらのけがのせいで、それ以上に、絞首刑が差し迫っていることで、食欲もなくなっているらしい。実際に、体重もかなり落ちているようだ。

キャロラインが監獄の鍵を盗もうとしたと聞いたとき、マークは「そんなことは、もう二度とするな」といさめた。愛しい妻の一生を、自分と同じように牢獄で終わらせたくはなかったからだ。

でも彼は、脱獄するため、仲間が襲撃してくれることをまだ期待していた。しかし、ここに至っても、その気配はない。どうやら自分は、やつらから見放されたようだ。もしかすると、ロング・ランだけは、その機会を狙っているかもしれないが、あの年老いたチェロキーも、今は追われる身らしい。

やはり期待はできないだろう。

俺の悪運も、ついに尽きたということか。

マークは、そう思っていた。

保安官が独房の鍵を開ける前から、二人はその扉に張りつくようにして、檻のすき間から熱烈なキスを交わし合った。

扉が開けられると、毛布の陰に隠れた二人は、恐ろしいほどの勢いで、愛を交わした。

マークは、妻の望みに応え、その口にもプッシーにも、何度となく精子を注ぎ込んだ。

オルガスムに次ぐオルガスムに、二人は悶え、叫び、夜明けが来て疲れ果てるまで、それをつづけた。いや、男たちがマークを迎えに来て、ふたたび服を着なければならなくなったその瞬

間まで、二人はむつみ合っていた。

むせび泣くその手が、夫の腕から引きはがされ、そのためにやってきた町の女たちに支えられ、さらに気が狂ったように泣き叫び、キャロラインは、夫が吊される瞬間を迎えた。

第19章

マーフィー未亡人にとって、ブルックストーンにいつづけることは、やはり耐えがたかった。

だから、夫の埋葬に立ち会ったあと、すぐに駅馬車に乗った。

とはいえ、深い悲しみと混乱から立ち直れないでいる彼女に、行くあてがあるわけでもなく、駅馬車の終点まで行っては、また次に来た駅馬車に乗るといふ、果てしない旅をつづけることになった。

その間、もとの隠れ家に戻ることは、一度も考えなかった。あの家にはマークとの思い出がつまりすぎているし、いずれ、本来の持ち主の親族が現れないとも限らない。

そんな旅の末、たどり着いたのは、

カリフォルニアのホワイトバーグという小さな町だった。そこで、手持ちの金が心細くなり、仕事に就くことを考えざるを得なくなったのだ。

とはいえ、これから先、どう生きていけばいいのか、めどがあったわけでもない。

じつは、旅の途中で訪れたすべての町で、彼女は、面倒をみたいという男からの申し出を受けた。そして、やはりすべての町で、売春宿のマダムから、うちで働かないかと誘われもした。でも、そのすべてをことわっていた。

そんなキャロラインだったが、ホワイトバーグの地方紙の片隅に載っていた求人広告には目を留めた。それは、この町の教育委員会が出していたもので、小学校の教師の募集だった。自信はなかったが出かけてみると、教育委員会の男たちは、ほんの数分の面接だ

けで、彼女の採用を決めた。しかも、
広告に出ていたより高い給料を出すとい
う。

彼らそれぞれが、「ミス・マーフィー」という呼び名に秘かな希望を抱いたことはまちがいがなかった。マークと
のことを隠さざるを得ないキャロライン
にしてみれば——一度も合法的な結
婚はしていないのだし——「ミス」と
呼ばれるのは受け入れたのだが、その
姓だけは残しておきたかったというこ
とだ。

そんな事情だったから——もちろ
ん、採用してくれたことには感謝した
が——男たちが抱いた希望は、やがて
やんわりと拒否されることになった。

最愛の夫を失ったことは、未だ、キ
ャロラインの心に、大きな影を落と
していた。

かつてのサドルブライドにとって、学校で教えることは、思った以上に楽しい経験だった。だから、最初の一年は、あっという間に過ぎて行った。

子どもたちはみんな、自分たちのきれいな先生が大好きだった。学年の終わりには、キャロラインのクラスにいつづけたくて、留年を画策する男の子たちまで現れた。

一方、学校以外の時間、キャロラインはハーブの栽培に精を出し、フェイエラから教えられた薬草の調合をした。そんな女性らしい生活が楽しくて、もはや、かつての自分に戻りたいなどという思いは、まったくなくなっていた。

2年目の夏になると、以前はことわっていた町の若い男たちからの誘いに応え、ピクニックや日曜礼拝に出かけ

るようになった。秋には、その中から、気の合う人が見つかり、彼との間に、親密な雰囲気ができあがっていった。お互い、かけがえのない存在だと感じるようにもなった。

ジェームズ・ウォルトンというその男は、この地方を走る鉄道会社の御曹司だった。とはいえ、父の会社に、いちエンジニアとして勤め、レール敷設やトンネル工事の現場で、懸命に働いていた。裕福なことを鼻に掛けるようなところはみじんもなく、やさしくてハンサムで——キャロライン自身、そんなふうに感じている自分に驚いたのだが——マーク以上に、彼女のことを大事にしてくれた。

そして、次の春には、二人は結婚していた。

エピローグ

その馱馬車は、町の通りの真ん中に停まった。

そこから飛び降りたハンサムな青年は、彼の美しい花嫁が、狭いステップをうまく降りられるよう、手をさしのべた。

その小さな町のほとんどすべての男たちは、動きを止め、これまで見たこともないその美人を、あがめるようなまなざしで呆然と見つめていた。

頭の方から足の先まで、一分の狂いもない完璧なレディ。やさしそうな夫の腕に手を掛け、か細い体で板張りの歩道に行くその姿は、女らしい魅力に満ちている。夫との会話にほほえみを浮かべるその顔も、驚くほど気品がある。

いつもは、気取ってそれなりに上品

に見える町の女たちも、彼女の美しさの前では、田舎くさくてがさつな存在にしか見えなかった。

そんな美しい来訪者に少しでも近づきたいと思ったのだろう。女たちは話しかけようとしたが、そのプリンセスに優しい微笑みで拒否され、素通りされていた。

そんなふうに気位の高い女たちを避けていた彼女だが、なぜか、そこに通りにかかった売春婦に声を掛けた。さらに、驚いている彼女になにかを訪ねるように話し込んでいる。

そして、周囲があ然として見つめる中、ハンサムな夫とともに、マダム・ビクトリアの売春宿に入ってしまったのだ。

町にはざわめきが広がり、いつまでもつづいた。

その1時間後には、夫婦はふたたび
駅馬車に乗り、ソルトフラッツの町を
去って行った。二人がこの町を訪れる
ことは二度となかったが、ただ、ビク
トリアだけは、ミセス・キャロライン
・ウォルトンが、かつてクロードと呼
ばれた少年だったことに気づいてい
た。

「彼女は、わしの頬に手を触れ、わし
の名前を呼んでくれたんじゃ」

ウイスキー・ジムはうれしそうに言
う。

「結局、いい女は、本物の男をよく知
つとるということじゃな」

それが、あの美人がなぜ自分の名を
知っていたのか、数週間悩んだ末に、
老カウボーイが出した答えだった。

Copyright (C) 2007 by Teresa Ann Wood

Based on the text FictionMania

Translated by Rino Maebashi

この「荒野の花嫁」は、テレサ・アン・ウッドさん作のオンライン小説“The Saddle Bride”を、前橋梨乃が翻訳したものです。原作著作権はテレサ・アン・ウッドさんが、翻訳著作権は前橋が保持します。個人で楽しむ以外、無断でのコピーを禁止します。